

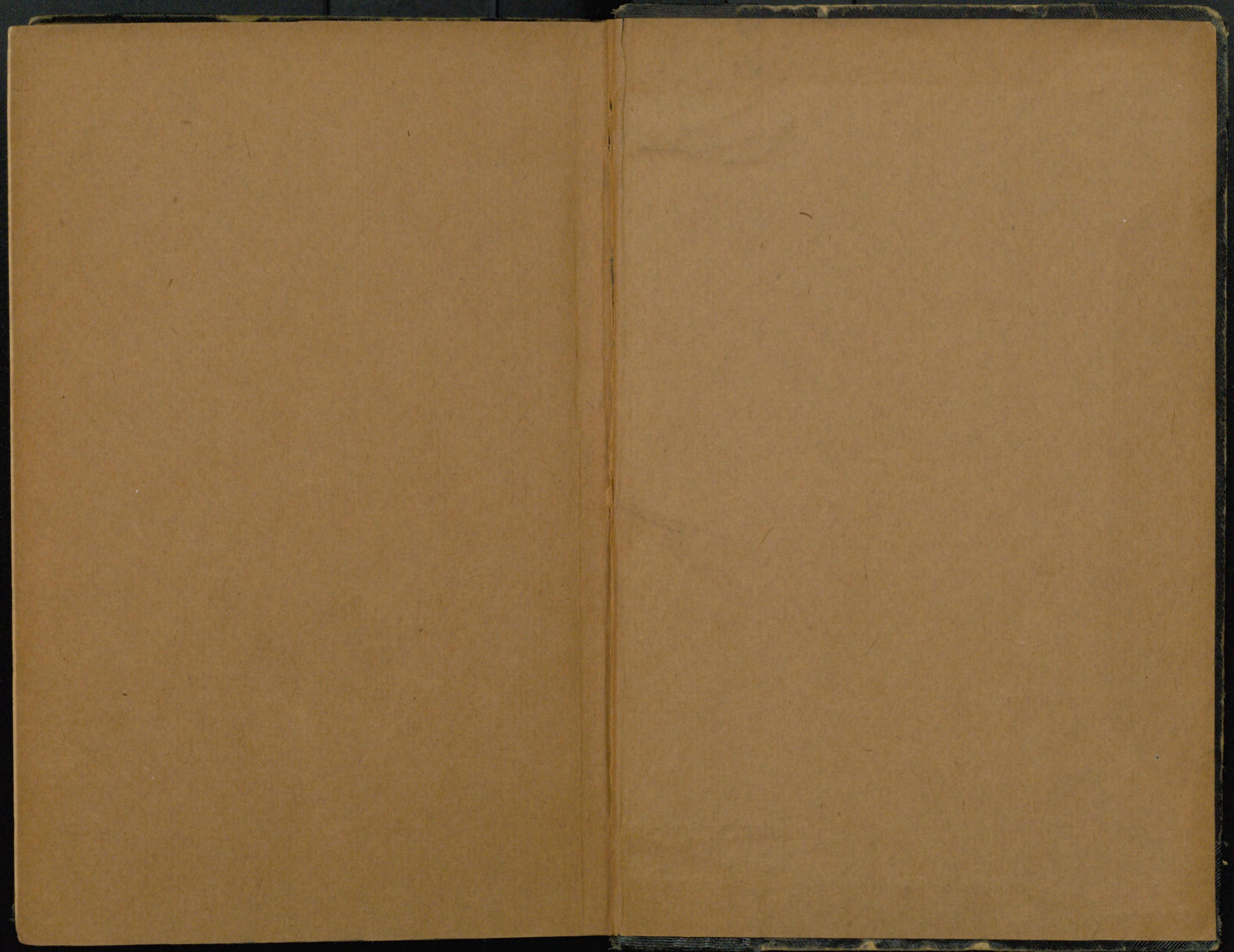
599-131



1200501529289

599
31





53.1

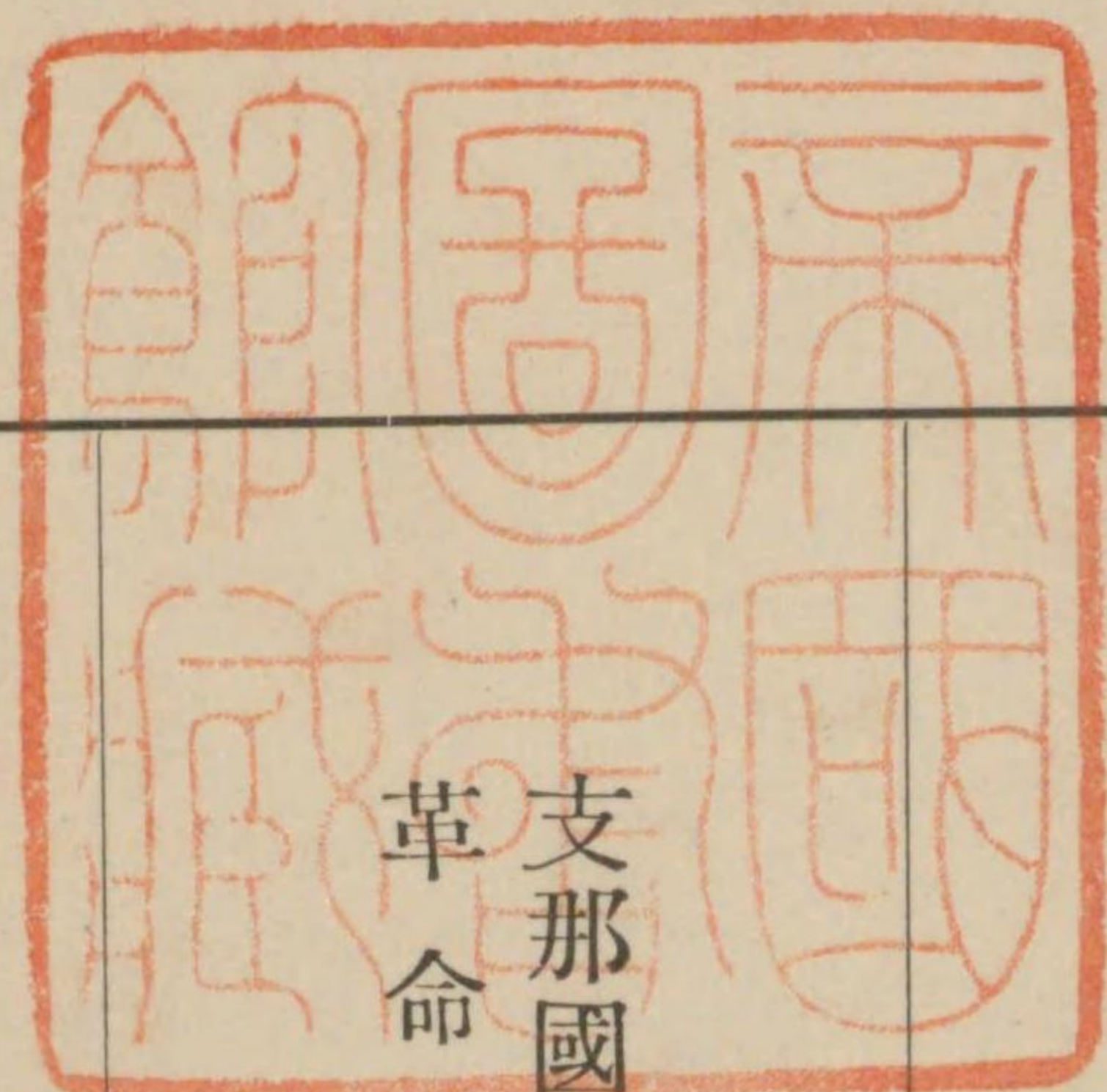
大阪每日
東京日日
記者
布施勝治著

支那國民
革命

馮

玉

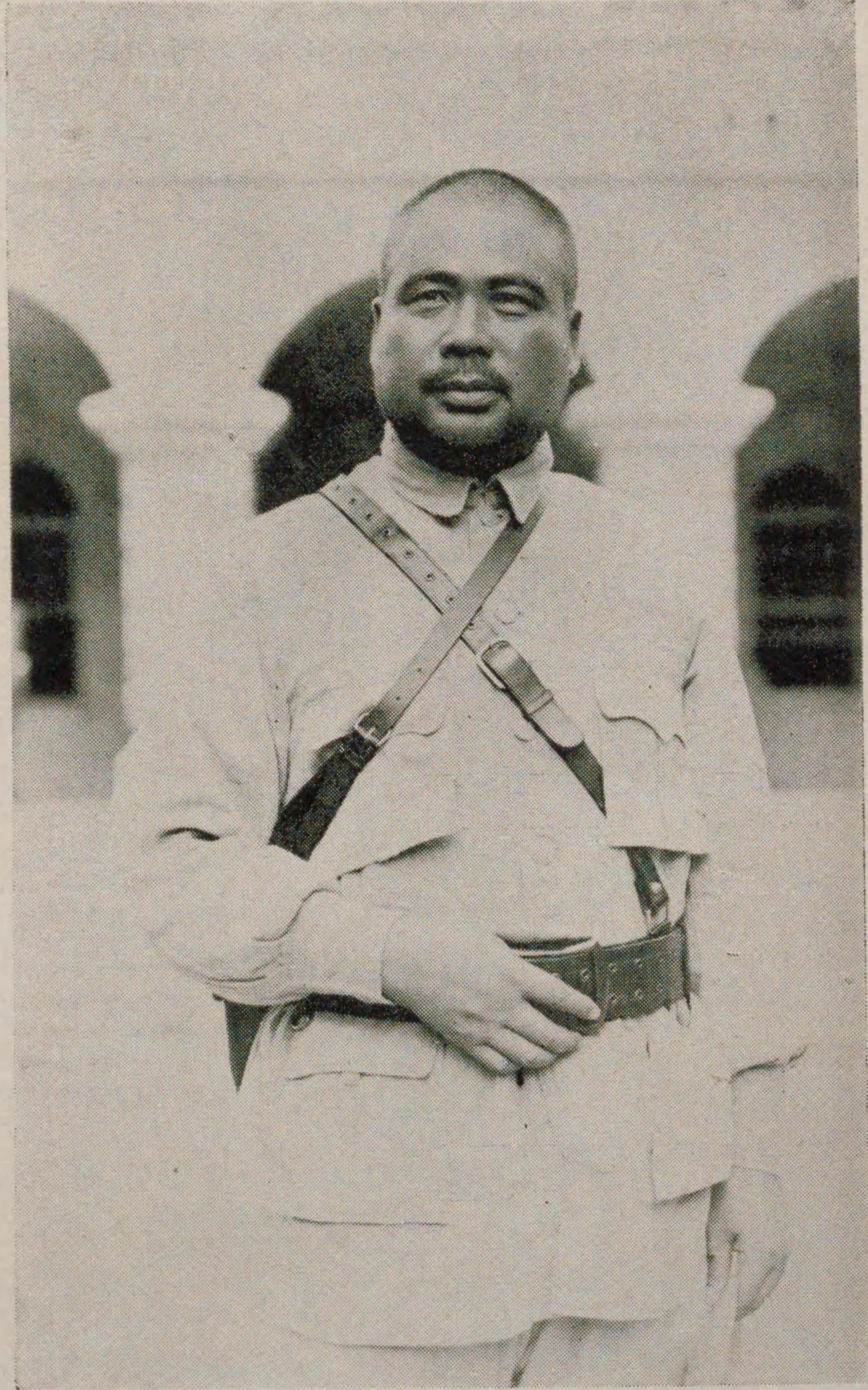
祥



東京
大阪屋號書店發行



馮 玉 祥



馮 玉 祥

599-131

自序

最近の五ヶ年、即ち大正十三年七月から、昭和四年六月まで、著者は北支那變局の中心地たる北京にあつて、打ち續く民國動亂の推移を觀望してゐた。その間、幾多の群雄、中原にあらはれ、鎬を削つて覇を争ふたが、吳佩孚先づ敗れ、次いで段祺瑞隱退し、張作霖また倒るゝに至つて、北支那の舞臺に残れる北洋武將は、たゞ馮玉祥と閻錫山の二人のみとなつた。

著者が北京に來た歲、即ち民國十三年の秋、馮玉祥は北京クーデター的一幕を打つて、直隸軍閥の巨頭吳佩孚を一蹴に附した。爾來彼は度々失敗を重ねたが、その都度捲土重來、巧みに新局面を開き、中央舞臺に乗り出して來た。しかもその進退出退は變幻警拔を極め、常に人の意表に出で、容易に端倪をゆるさない。著者の北京における五ヶ年間の新聞記者生活は終始馮玉祥の行動によつて緊張を續けて來た。本著は著者の最近五年間における北京日誌を展開したに過ぎない。しかもそれは期せずして、馮玉祥を中心とした支那國民革命史となつた。

昭和四年十月十六日

著者

寫眞目次

南京における馮玉祥	馮玉祥の勞働振り
北伐戦時の馮玉祥	徐州における蔣・馮の初會見
馮玉祥の書(其の一)	南口祭壇上の馮玉祥
馮玉祥の書(其の二)	晩年の張作霖
馮玉祥の書(其の三)	馮玉祥の書(其の三)
クリスチャン・ヂエネラル時代の馮玉祥	蔣介石と馮玉祥
バイブルを読む馮玉祥軍	閻錫山・蔣介石・馮玉祥
四照堂における吳佩孚	總司令か兵卒か(陣中の馮玉祥)
日本公使館避難中の宣統廢帝と廢后	馮玉祥の兵工政策
莫斯科驛頭赤軍の馮玉祥歓迎	墨子を読む馮玉祥
五原誓師式	セピロ服の馮玉祥

支那國民馮玉祥目次

一、馮玉祥と私の問答	一
三度も違ふ對話の印象・「一粥一飯當思來處不易」・饒舌り過ぎぬ用意の筆答・「非工不食」・將卒統制の要諦・眞正の共產主義と似而非共產主義者・三民主義も世界主義か	
二、クリスチャン・ヂエネラル	二
名門の出か瓦工の子か・壁に光を藏して・「氣死學生」・王社黨から革命黨へ・叙府の班師・復辟討伐の先鋒・煩悶の極から信仰へ・武穴の唱和・變つた督軍振り・「善政の暴行」・一省内に二人の英雄・「大總統脚下の爆彈」	
三、北京クーデター	三
吳佩孚と馮玉祥・班師回京的一幕・兩統幽閉の悲劇・段祺瑞擁戴か孫文擔ぎあげか・委員制政府建設の秘計・老段の出廬・奉軍の京畿侵入・油揚鳶にさらはる・孫文の北上より臨終まで・民國革命の新エポーク	
四、國奉戦争	四

失意時の處生術||實力涵養・争ひの林檎||關稅會議・張作霖に最後警告・郭松齡の叛
逆・「昨の敵は今の味方」・恩人の仇討||徐樹錚暗殺・京津より綏遠へ・不平時の韜晦策
||下野外遊・軍閥の赤白分野

五、赤露の百日修行

窮餘の逃げ道から窮して通ずる道へ・庫倫會議・滯露百日の赤化修行・赤色扮裝芝居・
「レーニンに似た支那人」・馮・國、露の奇しき三角關係・三民主義の手ほどき・馮玉祥
のロシア土産

一四三

六、五原誓師

敗報を手にして蹶起・敗軍の立直し・バイアルより三民主義へ・決死章と犧牲帶・北京
へ直攻か河南へ迂迴か・甘肅行軍と陝西入り・西安奪取より潼關進出まで・鄭州入りの
奇計・難行苦行の實踐躬行

一六

七、中原進出

鄭州及び徐州會議・南京と武漢の政争調停・共產黨對策・北伐根據地の開拓・靳雲鶚討
伐・新河南の建設・馮玉祥式善政の強制勵行

一九

八、北京入り

北伐四大戦局・國民革命軍の新陣容・蝸牛式戰略・山東攻略戦・保定の會戦・張作霖の
都落ち・京漢線のマラソン競走・北伐完成奉告式・碧雲寺の革命軍巨頭・北京より南京
へ

三三

九、張作霖と馮玉祥

好敵手張作霖・三年間の争覇戦・兩雄の對照・東北と西北・保守主義と進歩主義・新軍
人と舊軍人・張作霖の都落ち・皇姑屯の慘劇

二五九

十、蔣介石と馮玉祥

戴天仇と私の議論・孫文主義は中庸か左傾か・蔣介石の「中正」主義・支那のケレンスキ
I・爪をかくす鷹・私と田中前首相との對話・支那を動かす二つの力||蔣の財力と馮の
武力・編遣會議と第三次代表大會・武漢争奪戦・援蔣討漢か援漢討蔣かはた中立嚴守か
・海へ!港へ!

二六七

十一、閻錫山と馮玉祥

北洋武將最後の二人・背面の脅威・下野の道連れ・二人の外遊劇・われとわが家族を人

三九

質に・狸藝の中にも「面子」を重んずる支那武士道

十二、西北國民軍

三三

革命軍閥の卵・バイブルを操典とする「東西無二の模範軍」・國民軍の礎石・救國愛民主義・我々が廢除不平等條約而拚命・九方面軍制より十二師制へ・軍縮費で軍備擴張か・國民軍の長所と短所

十三、馮玉祥を繞る人

三七五

子飼の乾兒・人材主義・全軍馮姓たゞ一人・國民軍の五元老・國民軍の新幹部・軍閥出身の文官・客將と外様政客・國民軍も畢竟支那軍隊か・韓復榘は明智光秀か・李徳全と馮洪國

十四、馮玉祥の言論

四〇三

天才に磨きかけた雄辯・牧師、先生、そして志士・思想上の三大變革・共和擁護と衣食住行論・文書は冷靜平易、辯論は熱烈過激・「一草一木民膏民脂」・朝會の問答・三句六字七問八綱十誡

十五、反蔣戰爭

四五一

蔣介石の「六大罪」・三年がかりの瞞蔣策・監禁か親戚待遇か・三國史の劉備を真似たか・蔣の財力と馮の武力・馮玉祥の「達磨藝」

十六、未知數の馮玉祥

四七一

老獺、變節、赤化、排日・「親日」と「排日」の兩刀使ひ・個人感情に支配さるゝ國際政策・「英雄涙多し」・叛逆者か革命家か・未成品の強味・孫文と馮玉祥・支那のケマル・バミアか

一 馮玉祥と私の問答

三度も違ふ對話の印象。「一粥一飯當思來處不易」
・饒舌り過ぎぬ用意の筆答・「非工不食」・將卒統制
の要諦・眞正の共產主義に似而非共產主義者・三民
主義も世界主義か

私が初めて馮玉祥と相知つたのは、民國十三年の秋、彼が熱河より軍をかへし、北京クーデターを敢行して、曹錕大總統を幽閉し、直隸派の權力を一朝にして、顛覆した時のことである。クーデターの翌々日、即ち十月二十五日、私は馮玉祥を北苑の兵營に訪ひ、彼が班師回京を決行した眞意の那邊にあるかを叩いたのである。

私が二度目に馮玉祥を見たのは、十七年の夏、彼が西山碧雲寺における北伐完成報告式で、南口における陣没將士追悼會に列するため、無蓋車に乗つて、北京へ來た時のことである。七月十四日私は馮玉祥の招待を受けて、外交大樓における午餐會に臨み、彼と四年振りの握手を交はす機會を得た。

その後、三ヶ月ほど経て、私は長江漫遊の途次、南京に立ち寄つた機會に、三度目の馮玉祥訪問を試みた。

私はかくして三度馮玉祥と面晤した。そして私の彼から受けた印象は、不思議にも、三度も違ふのである。

民國十三年の秋、初めて相知つた時の馮玉祥は、北京クーデターでふ大芝居を打つた直後のことであつたにも係らず、彼は悠揚迫らず、いかにもゆつたりとした態度であつた。その容貌も、髯鬚

を奇麗に剃り落し、まるく太つた顔面は圓満そのもの、如く、聲を低くして、徐かに語るころなごは、まごごに支那で云ふ「大人の風」であつた。

然るに、十七年夏の馮玉祥は、全くこれに反して、滿面髯鬚をはやし、眼光爛として輝き、日にやけた赤黒い顔色、風をひいた後の錆味を帯びたしわかれ聲、それに兵卒と全く同じきたない破れ軍服、戰場からやつて来たばかりと云ふ殺氣立つた風貌は、人をしておぼえず恐れをなさしむるの概があつた。

最後に南京で會つた時の馮玉祥は、鼻下にハイカラなチャップリン髭を蓄へ、小さいな眼に微笑をた、え、まるい二つ頬を撫で乍ら、只管、自分は忠實なる國民黨員である、眞正なる三民主義者であると云ふ辯明につこめ、少しも鋒鋷らしいものを現はさず、眞に「爪をかくす鷹」の感あらしめた。

英雄は歴史の舞臺における名優であると云ふならば、馮玉祥はたしかにこの資格を十二分にそなへて居ると云はねばならぬ。彼が時ご場合によつて、その態度ご所作を使ひわけ、その都度對手に別個の印象を與へるところはたしかに見あげた手際である。

南京に於ける私の馮玉祥訪問は最近の出來事であり、且つ比較的長時間に亘つてゆつくり語ることを得たので、大体彼の抱懐するところを叩くことが出來た。私は特にこの訪問記を左に録して見

布施先生



Ma Kwong Co. 先英
KAINFENG 新英 紀念

馮玉祥敬贈

南京 一七二二四

やうと思ふ。

二

民國十七年十一月十四日の夕方……それはたしか馮玉祥が軍政部長に正式就任をなした翌日のことであつたと思ふ……私は彼を南京における國民政府軍政部に訪ねた。雨のそぼふる暗闇の中を、南京市の東北隅なる軍政部へ、自動車を駈つて、約束の時間の午後六時、同部へ着くこゝ早速應接室へ案内される。室内を一瞥するに、壁上にかけられたる對聯には

一

耘耨日正午。汗滴禾下土。誰知盤中餐。粒々皆辛苦。

二

公家一文錢。人民一滴汗。將汗來比錢。化錢容易。流汗難。

三

一粥一飯當思來處不易。

と書してある。いかにも馮玉祥式の標語である。主人公の出て来るのを待つてゐる間に、秘書役の趙亦雲氏が出て来て、先づ私の著書「ソウエート東方策」及び「レーニンのロシアと孫文の支那」について種々の質問を始めた。やがて馮總司令が来た……こゝ云ふふれがあるこゝ間もなく、大兵肥滿の馮

玉祥が私の前にあらはれ、私をその書齋に案内する。書齋は云ふもの、小さいな室の半分に、一脚の机をおき、他の半分は白布で仕切られ、そこに寢臺がおいてあるらしい。

書机を真ん中に差しはさんで、私は馮玉祥に向ひ合つて對座する。馮は自ら土瓶をこつて、私のために茶をついでくれる。そこで二人の間に問答が始まる……

馮玉祥はこの日何故か、平素の豪放振りに似ず、大事をこつて、軽々しく答辯をしない。そして質問が急所をついたり、答辯に面倒を感じるやうなところにあつたり、殊更らに口頭で答へることを避け、筆をこつて短かい、しかし極めて當意即妙の二三句を、私の持つて行つた原稿紙に書し、そして書き終る度毎に、或は莞爾と微笑み、或は呵々大笑し、私の質問の鋒先を巧みに逃けてしまふのである。しかし、この日の馮玉祥は極めて愉快さうに見えた。私は幾度か彼が筆をこつて私の質問に答へんこしてゐる様子を、ジツと見つめてみたが、彼の態度は恰かも小學校の生徒が習字を稽古してゐるかのやうである。時折難字難句の記憶を呼びおこさうとして、あたまをかしけるころなごは全く無邪氣なものである。短かく刈つたあの大きなまろい栗頭、大黒鼻の下に小さいなチャップリン髭、まんまるこ太つた二つのおご、それに象の目のやうな小さいな両眼がいつもニコ／＼笑ひをた、へてゐる。私はおぼえずこれがこの十年來支那の群雄をして心膽を寒からしめた馮玉祥か！一種異様の感に打たれざるを得なかつた。實際つひこの歳の春、北京の外交大樓で

會つた時の、あの眼を光らし、口角泡を飛ばして獅子吼した馮玉祥はまるで別人の感があつた。

私の質問は時事問題にふれず、主として、第一、馮玉祥の閱歴において從來疑問とされてゐた點第二、彼と孫文及び國民黨との關係、第三、ロシア及び共產黨に對する態度等について、説明を求めたものである。たゞ彼が前記の如く、巧みに質問の鋒先を逃けるので、彼を逐ひつめて、本音を吐かせんがためには、クドクはあるが、遠廻しにひつかけて見たり、急に問題をかへて不意打ちを試みたりしたのである。従つて私の質問は順序を追ふてゐない。また中には少々理窟つほいところもある。しらばくれたやうな點もあらう。しかし以下の問答は、よかれ、あしかれ、馮玉祥が自ら口頭及び筆をこつて答へたものである。馮玉祥のひま、なりを知るにおいて、たしかに一つの有力なる史料たるを失はないと信ずる。

【問】 民國十三年秋、總司令は班師回京、北京クーデターを決行された時、段祺瑞推戴運動と同時に、孫文氏に北上を促された。當時總司令意中の元首候補者は、段、孫孰れであつたか。

【答】 當時余等同志の目的は、孫文、段祺瑞その他の指導的人物を網羅した委員制政府を建設するにあつた。然るに事志と違ひ、張作霖等の運動によつて、段祺瑞獨裁の執政政府の出現を見るに至つたのは、民國のためにかへすがへすも不幸なことである。

【問】 民國十二年、總司令が南苑に駐屯されて居た頃、カラハン氏來訪し、街頭の電柱や、家屋

の壁上に貼布された「非工不食」の標語を發見し、「是れ全くソウエート・ロシアの政策を相同じうす」にて讚歎したと云ふ。總司令の此の標語は社會主義から出たものか、または基督教に根據を置くか。

【答】「非工不食」の標語は、予が民國七年常德に居た當時、吳稚暉が歐洲から歸つて發表した「臚盒客座談話」なる紀行文にこれを見出し、直ちにこれが實行を試みたのである。即ち余は配下の將卒に命じて、教練を終つた後、必らず一定の手工藝事をなさしめ、爾來づつこれを繼續して今日に及んでゐる。(こ語り終つて、秘書が持つて來た「吳稚暉文存」から「臚盒客座談話」の一篇を取り出し、その「非工不食」の一節を私に讀んで聞かせた)

【問】民國十五年、總司令は國民軍の指揮權を棄て、露國に赴かれた。中國の現状を觀るに、如何なる武將も指揮權放棄と同時に、その部下軍隊との關係が斷絶するを常とす。然るに半年の後、總司令、再び復職して、五原に誓師するや、舊部下四方より來集す。是れ眞に不可解の奇蹟事である。總司令の將卒指導訓練の要諦如何。

【答】余の本領はたゞ將卒の苦樂を共にするにある。部下將卒の身上に不幸あれば、これを慰め慶事あればこもにこれを祝ふ。余は手品師にあらず、従つて何等奇術を用ふることを知らない。

【問】民國十五年八月、總司令は國民軍南口及び張家口に大敗すこの報を手にするや、突如露國より歸國の途に就かれた。敗けた時は成るべく遠く逃けるが通常なるに、總司令は國民軍敗戦の絶頂において、再舉を決意された。是れ余の不可解とする第二問なり。當時總司令の胸中如何なる成算があつたか。

【答】余の既往の閱歴は、革命の遂行を以て終始一貫す。即ち民國元年灤州海陽鎮の役において、第八十團の第三營長であつた余は第七十九團の第二營長王金銘(字は子箴)、同團の第一營長施從雲(字は燮卿)とともに、灤州の獨立をはかつたが、王、施及び同志は王懷慶及び曹錕軍のために殺され、余は捕へられて食を絶たれ、保定に護送されたるを始め、民國四年には四川督軍陳宦(字は二菴)に迫つて、四川の獨立を宣言して、袁世凱との關係を脱離せしめ、民國六年張勳の復辟にあたりては、段祺瑞に先んずること二日、廊坊において討張通電を發し、復辟討伐の急先鋒となり、民國六年末より七年始めにかけ、武穴において、停兵通電を發し、段祺瑞に向ひ、何故の戦争かを詰問し、獨逸に宣戦して戦はず、國內に對して宣戦せずして戦ふの非なるを責め、民國十三年の北京クーデターにて、曹吳の政權を倒し、宣統廢帝を逐ひたる等、終始一貫して、革命の遂行に當つて來たのである。たゞ民國十五年の初め、打ち續く戦亂はてしなく、國民の痛苦忍ぶべからざるを思ひ、退いて干戈をおさむべく、余は露國に遊びたるが、その後の形勢益々險惡を加へ、汪兆銘、李石曾、徐謙、吳稚暉氏等から頻りに再起を促されたので、同年秋、革命

の宿志を果すべく、決然起つたのである。當時余は二つの主義を信念とした。それは(一)不成仁(二)便成功云ふのである。(三)語りつ、筆をこつて「殺身失敗則爲仁。戰而得勝則爲成功……第一大便宜千古未有之機會也……殺身以成仁」を書す。即ち一、仁を成さず、二、即ち功を成す。身を殺して失敗すれば即ち仁をなすべく、戰つて而して勝利を得れば成功をなさん……第一の大便宜をなすは身を殺して以て仁をなすにあるが、それは千古に未だなき機會である……云ふ意味で、民國十五年秋、ロシアより歸つた時は、その成否を問はず、身を殺して仁をなす絶好の機會なりとなし、決然起つたものである(こゝを説いた)

【問】 ボリシエウイキーに對する世界各國識者の觀測區々にして、一致せず。或者は彼等は破壊を知つて、建設を知らず云ひ、或者は云ふ、ボリシエウイキーは建設方面においても相當の能力を發揮しつゝ、ありき。(余は後説者の一人である)總司令の滯露半年間の印象如何。

【答】 ボリシエウイキーは破壊に最も巧みなるが、建設も亦拙ならず。たゞ彼等のやり方は亞細亞人の人情に合致せざるもの、如く思はる。

【問】 余は曾てレーニンと會談した。レーニンは余に日露親交の要を説き、是れがため、ソウエト政府は大なる犠牲(緩衝國の建設)を投ずる用意を有す云つた。總司令は滯露中、ボリシエウイキーに向つて「露國は日本と親しむよりも、中國の革命を援助すべきだ」を語られたさうである。

る。近頃説をなすものあり、曰く「寧ろ日支露三國の親善提携をはかるに如かず」云。現下の状態より觀て、總司令は孰れの策を採らるか。

【答】 (先づレーニンの緩衝政策を評して)國本未固時。或有此説。或借此緩和。以期能伸張其宣傳主義之手段亦有之事。(即ち「國本未固時」云、或はこの説あるべし。或はこの緩和によつて、その宣傳主義を伸張するの手段とするこゝもあらう)を書し、日露支三國の提携説については)只可有此説。不會有此事實。(即ち「この説あるも、この事實なし」を記して、巧みに質問の鋒先を逃ぐ)

【問】 孫文先生の平素抱懷して居られた大亞細亞主義は、我等日本國民も亦共鳴して居るこゝろ、又孫文先生の民族主義はボリシエウイキーの「萬國の被壓迫民族よ、團結せよ」を標榜するレーニンの民族政策と相一致す。余は數年前莫斯科にて、トロツキー氏とスターリン氏にボリシエウイキーの民族政策を、我等東洋人の「亞細亞人の亞細亞」主義との比較に就いて、意見を叩いたが、ト、ス両氏ともに「反對點もあるが一致點もある。亞細亞の天地から歐米帝國主義國の勢力を驅逐する點において全然相一致す」を答へた。思ふに反對點の衝突を避けて、一致點における協調提携をはかるが、經世家の正になすべき所。總司令の高見如何。

【答】 中山先生之三民主義實有世界性。(如天下爲公)博愛平等字樣均可見之。况亞細亞乎。但與

P 不同。因 C P 其口說均是。而所行均不是也。先生以爲如何。(ミ筆答す。即ち「中山先生の三民主義は實に世界的意義を有し(天下公たりの如き)博愛平等の文字において、均しくこれを知るべし。況んや亞細亞においてをや。但し共產黨は同じからず。共產黨は均しく是を説くも、その行均しく非であるからである。先生以て如何になす」にて私に意外な反問を差し向けて來た)

【問】 孫文先生は國家主義の革命家として身を起したが、革命の失敗を重ねる毎に左傾し、遂に聯露、容共、農工の三大政策を建てるに至つた。晩年の孫文先生はボリシエウイズムに甚だしく接近してゐたやうに思ふ。然るに今日の國民黨幹部の執りつゝある政策を觀るに、著しき右傾を示してゐる。これ孫文先生晩年の主義主張に反行するものではないか。

【答】 起初之說與現在事實毫無左右之分。請留意因中山先生之三民主意書。一個整的。非片面的。彼乃手段的一時的也。(ミ例の如く筆答す。その意は「最初の說は現在の事實を毫も左右の別なし請ふ中山先生の三民主義は整つた一つのものであつて、片面のものでなく、あの時の手段は、たゞ一時的であつたここに留意せんことを」云ふにあつて、孫文晩年の左傾説を肯定させやうとした私の質問にはつひに乗らなかつた)

【問】 孫文先生臨終の遺囑の中には、南支遷都について明確に言及して無い。然るに國民政府は孫文の遺囑によるに稱して、遷都を決行した。總司令は中國の首都として、何所を最適地と觀らる

、か。(ミ少々知らばくれて問へば)

【答】 中山先生以世界之目光定中國之首都有二。其一爲南京。其一爲蘭州。黨中諸友均知之也。(即ち「中山先生の世界的眼光を以て定めたる中國の首都は二つある。一つは南京で、他の一つは蘭州である。黨中の諸友はみなこれを知つてゐる」云筆答し、眞意南京遷都に反對か否かの肚裏はつひにこれを吐露しなかつた)

【問】 孫文先生臨終に際して「余の遺骸はレーニンの例によつて葬れ」云遺言した云ふ。レーニンの遺骸は莫斯科市の中央なる赤色廣場に、木造の小さいな廟中に納められてある。孫文先生の墓地は、南京市を距る十數支里の高き山頂に設けられつゝある。寧ろ首都市内、民衆參禮に便利な地點を選ぶべきではなかつたか。

【答】 未聞有此遺囑。(ミ一句書き下しただけで知らぬ顔ですます)

【問】 孫文先生と總司令と相知るに至つたのは何時頃からのことであるか。

【答】 余の孫文先生と始めて相知れるは民國元年のことである。當時余の直接親交をかわせる孫文先生の代表は、孫建生(孫科)、戴錫九及白雅雨の三氏である。白雅雨先生は濼州で死なれた。

【問】 今日の中國は歐米の帝國主義國との對抗上、數年前における土耳其と相似た状態にある。總司令はケマル・パシヤの採り來つた政策と行動の總てを是認する、や。

【答】吉馬耳之行爲。誠爲世界上有作爲之人物。不可不敬之佩之也。(即ち「ケマル」の行爲は誠に世界的であつて、その有爲の人物たるについては、これを敬佩せざるを得ぬのである)【筆答す】

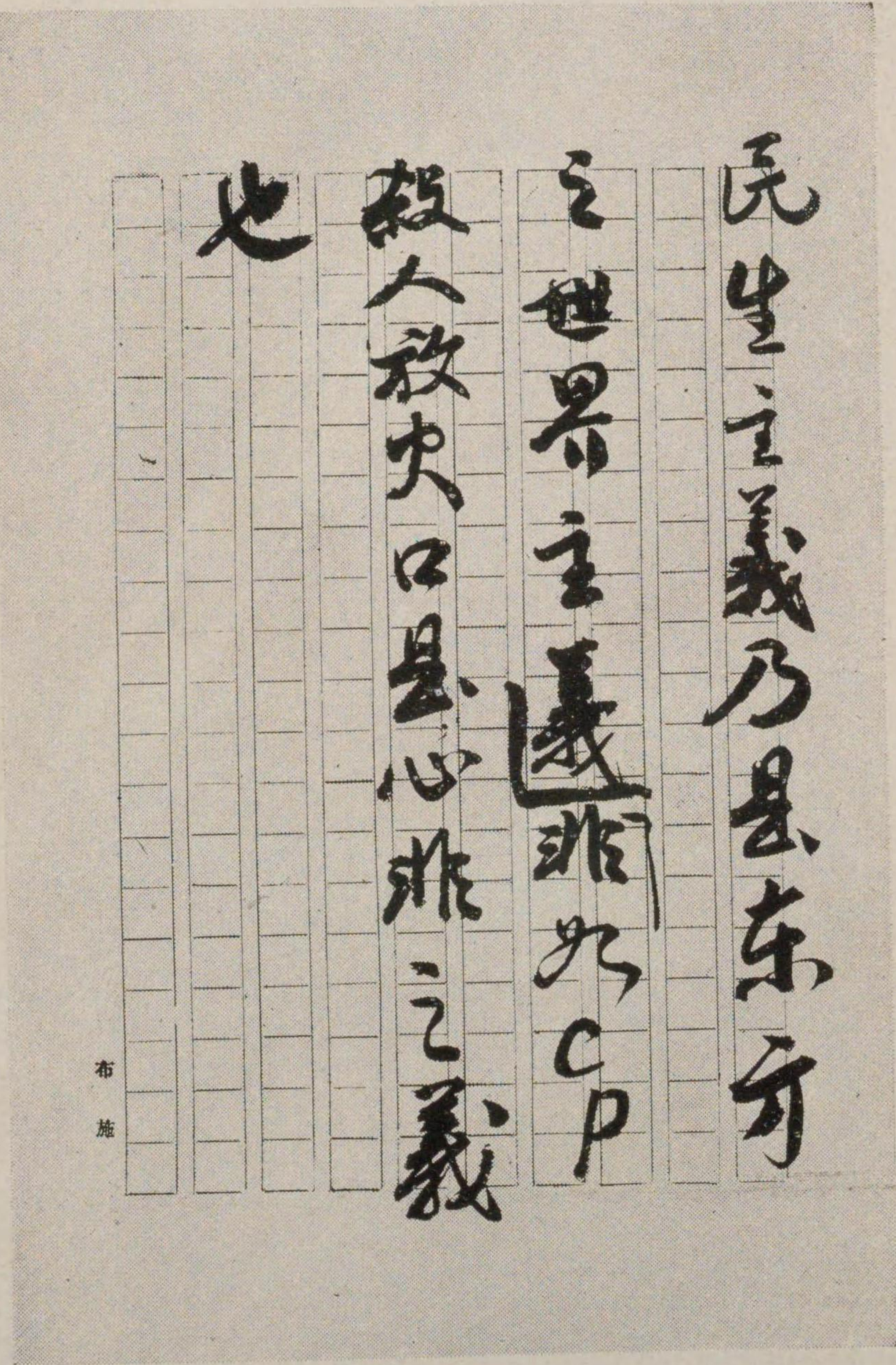
【問】總司令は世界一流の人物は總て尊敬する云はれたが、その中でも主義主張において、共鳴若しくは近似す認めらるゝは誰か。

【答】現代には完全に理想すべき人物が無い。(こ語りつゝ筆をこつて)華盛頓、林肯、吉林威耳、弗須、興登堡、乃木大將、諸葛亮、岳飛(の名を書き並べ乍ら「クロンウエル最もよし」こ獨語す)

【問】三民主義中の民生主義は孫文先生も「大同主義なり、共產主義なり」云はれた如く、共產主義と相通するものあるに似たり。總司令の民生主義に對する解釋如何。

【答】民生主義乃是東方之世界主義。非如CP殺人放火口是心非之義也。(即ち「民生主義は乃ち東方の世界主義である。共產黨の殺人放火、口に是を云ひ、心の非なるの義ではない」云筆答し、民生主義に對する左派の解釋を避けた)

【問】總司令は先頃日本議員團の質問に答へて「余は共產黨員たる資格がない。共產黨は余のこころを腐化した云つて非難してゐる」云はれたさうである。總司令は禁酒、禁煙、粗衣、粗食、早起晩寝、常に兵卒に困苦缺乏を共にして居られる。總司令が腐化した云ふは何所を指すので



あらう。

【答】 思想太老太舊、非腐化而何之。(即ち「思想甚だ老ひ、甚だ舊し。腐化に非ずして何ぞや」を書して、呵々々無邪氣に大笑し、更らに)老吾老以及人之老。幼吾幼以及人之幼。(この論語の一節を附記す)

【問】 總司令は基督教を信仰す。基督教と孫文主義と抵觸するところなきや。總司令の基督教信仰の動機如何。

【答】 行教之基督教、與口説之基督教不同一也。好的、於人類有益の行之。無益的去之之基督教也。(即ち「實行を主とする基督教と、口説の基督教とは同一でない。われ等の取るべきは人類のために有益なることを實行し、無益なることを取り除く基督教である」を書し、「マリヤや、ヨハネなど、偶像を拜むことは、余輩の關知せぬことだ」を啞やく)

【問】 總司令は墨子を愛讀して居られるに聞くと。墨子と三民主義と共通點あるか。

【答】 墨子有許多意思與救世的話相同。亦擇其善者而從之之意也。(「墨子には幾多の意思と、救世的説話の同じきものがある。その善なるものを選つて、これに従ふべしと云ふのである」を書し、附言して曰く「但し墨子の教義の中、迷信的なる點はこれを排除しなければならぬ」)

【問】 國民黨は左右兩派の外、更に極右派と極左派あり。斯かる内訌分裂の憂ひ多き政黨を以て、

中華民國の如き大國を統治し行けるであらうか。國民黨左右兩派中、孰れが孫文晩年の主義政策を繼承してゐるか。また國民政府の方針は「以黨治國」か、または「以黨義治國」か。

【答】 我們把眼鏡子擯去。(即ち「我等は眼鏡を外して見なければならぬ」)筆頭一句、巧みに逃ぐ)

【問】 軍政期間は既に終了したと見てよろしきや。訓政期間は何年間の豫定であるか。

【答】 何とも確答致し兼ねる。(と答へつゝ、頭をかしけて思案顔をする)

【問】 總司令は曾て「張作霖は敵なり、敵は和し得べし。吳佩孚は仇なり、仇は和すべからず」と云はれた。張作霖皇姑屯遭難の報を手にした時の總司令の感懐如何。

【答】 張作霖、吳佩孚均是三民主義的仇人。非我個人之仇人也。乃國民黨之敵人也。(即ち「張作霖と吳佩孚とは均しく三民主義の仇人であつて、わが個人の仇人でない。即ち國民黨の仇人である」と書し、更らに張作霖遭難當時の感想を記して曰く)彼時予頗代爲可惜、何以、因其莽早听予之忠告。萬無此事也。(即ち「あの時予は頗る彼のために惜んだ。何かなれば彼にしてみても余の忠告を早く容れたならば、今次の事なくして済んだであらうからである」と書し、私の携行せる「馮總司令墨蹟及照片」と云ふ冊子の中から、民國十四年十一月十一日付で、張作霖にあてた最後警告文を取り出し、その中の張作霖に對する勸告の一節を読みあげ「余が斯く熱誠を以て勸告したるに、張作霖はこれを容れず、遂にあのやうな最期を遂げた。余は衷心より彼のために惜しまざるを得ない」と語り、長歎息をもらす)

【問】 總司令の張作霖にあてた最後警告は郭松齡をして、民國十四年秋、反張計劃遂行の最後の決意をなさしめたのであると聞く。果して然るか。

【答】 郭松齡を始め、當時座にあつた奉軍將領八十餘名、余のこの手紙を読んで感激の涙を流したと聞く。

【問】 余は露國に在りし時、ボリシエウイキーの中に、レーニン派とトロツキー派の二派あるを知つた。前者は農民を尊重して、工人を制し、後者は工人萬能主義を採つて農民を輕んず。今中國に來て、總司令の各所における言論を聞くに「老百姓」の語頻々としてくりかへさる。總司令の標語「老百姓」と、國民の絶對多數を占むる農民の尊重主義と軌を同じうするものではあるまいか。

【答】 (圓形を畫き、その内輪に)商、學、工、農分開非是也(と書し、「商、學、農、工を別々にわけて言ふのでない」として、「百姓」は一般國民を指し、特に一つの階級に偏せざる趣旨を説く)

【問】 最後に問ふ。總司令は救國救民を志して奮闘し、二十餘年。總司令の救國救民終局の理想は何所にあるか。

【答】 完全的實現三民主義。不但中國好了。乃全世界人類均好了。然不過從中國開始作起頭耳。(即

ち「三民主義を完全に實現すれば、たゞに中國がよくなるばかりでなく、世界人類均しく好くなるであらう。たゞ中國卒先事を始めやうと云ふに過ぎない」を筆答し、その終局の理想が、支那一國に止まらず、その志の世界にあると大きく出た。

三

私が以上の問答に際し、特に力を入れて知らうと欲したのは、馮玉祥の思想傾向である。平たく云へば、彼の思想はここまで急進的であるか、表面急進的なるが如く見えて、その實保守的なのであるか、或はその反對であるかを、馮玉祥その人について聞かうとしたのである。

私が第一問において、馮玉祥が北京クーデターを決定した際、彼の意中の元首候補者は誰であつたかを尋ねたのは、この問題が彼の思想傾向に判断を下す上において、最も重要な鍵であることへたからである。もし北京クーデターの目的にして、曹錕に代うるに段祺瑞を以てするにあつたとするならば、馮玉祥はまさしく曹錕に對して寝返つたのみならず、民衆に對しても、裏切つたものと見なければならぬ。しかし、近頃國民軍筋から出た宣傳的文獻によれば、馮玉祥は最初から孫文かつぎあけの意圖であつたこと云ふ。もしこの説をこるませんか、あの當時馮玉祥が段祺瑞の許に幾度か人を派し、又最後に自ら天津に赴いて、その出處を促した事實を照し合せて、大なる矛盾を認めざるを得ない。私が馮玉祥の既往の閱歴を研究して最も大なる疑問としたのはこの點であつた。

完全的实现三民
主義我不但中国好
了乃全世界人类均
好了然不过程中国
开始做起头耳

而して今や、彼自身から最も明確なる説明を聞き、始めて、當時の真相を知ることが出来た。即ち北京クーデターの目的は、段祺瑞推戴でもなければ、孫文かつぎあけでもなく、彼の希望したのは、段や孫なきを加へた委員制政府の建設にあつた……云ふ極めて重大なる史實を、北京クーデターてふ史劇のたて役者馮玉祥その人から聞くことを得たのは、私の大いに愉快とするところである。

私はくりかへし、或は遠う廻しに、或は短刀直入的に、色々質問を發して、馮玉祥の共產主義に對する態度を叩いて見た。而して彼のこの問題に對する答辯は、故意か偶然か、甚だ矛盾したものであつた。即ち彼は一方において「ボリシエウイキ―は破壊に巧みであるが、建設にもまた拙ならず」余は共產黨員たる資格をもたぬ。何となれば思想老ひ、且つ舊く、所謂腐化してしまつたから……」なごご答へて、ボリシエウイズムを歎賞し、また共產主義をもつて、最も進歩した思想の如く讚歎し乍ら、他の一方では「共產黨は口には是を説くも、行均しく非である」「共產黨の殺人放火云々」なごご共產黨に對して毒々しい罵倒を浴せた。こゝにおいて馮玉祥は共產主義の禮讃者であるかのやうにも思はれ、また同時にその敵の如くにも考へられ、その孰れなるか、わからなくなつてしまつた。しかし、私は仔細に彼の答辯を検討して、そこには何等の矛盾なく、最も明瞭に彼の共產主義及び共產黨に對する態度を知ることが出来ると思ふた。

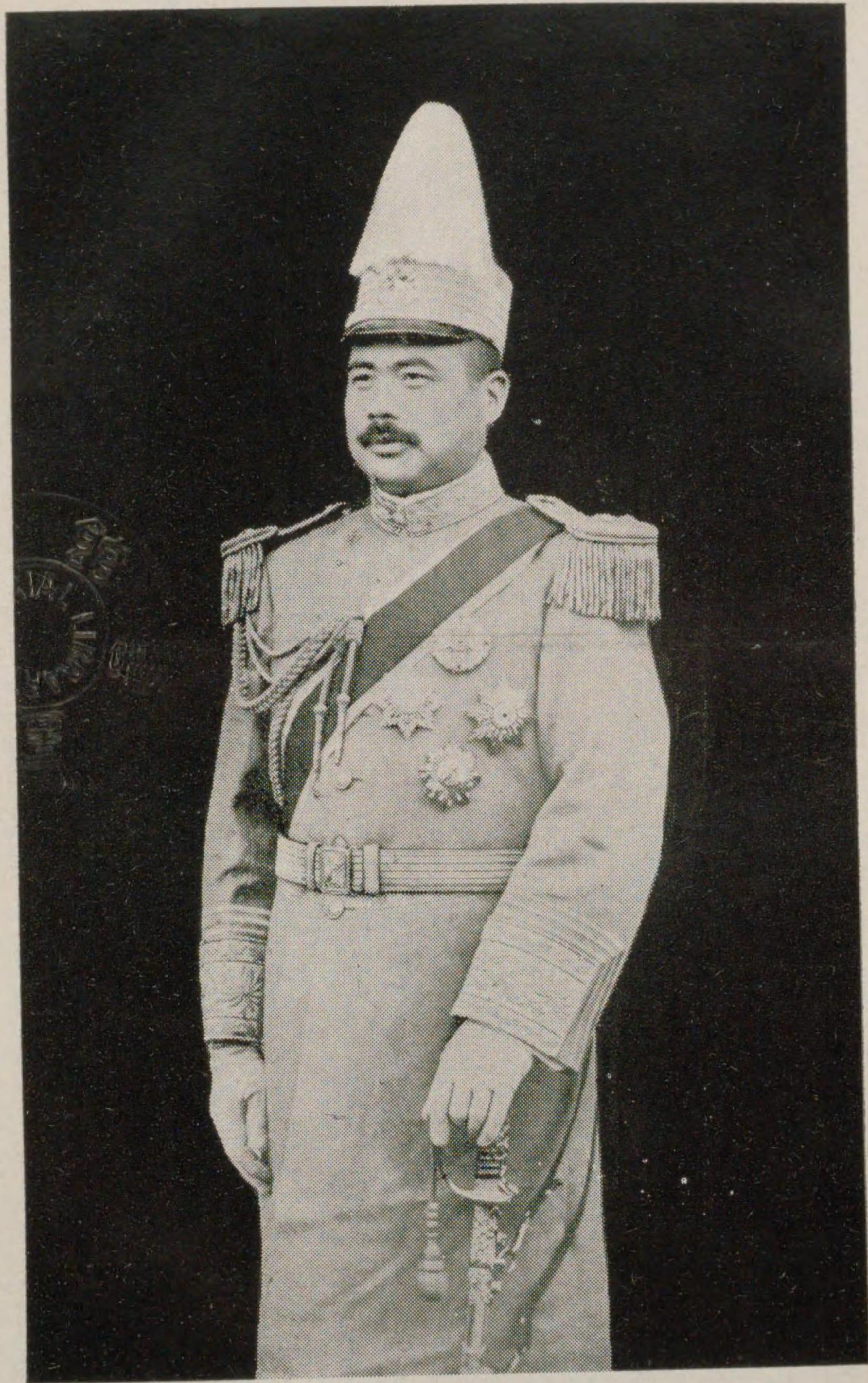
即ち馮玉祥は(一)真正なる共產主義、(二)共產主義をはき違へ、もしくはこの主義を利用せん

こし、または所謂小兒病に罹つた「似而非共產主義者」を全然二つに區別し、前者に對しては、敬意を拂ひ、後者に對しては手厳しくこれを非難してゐるのである。

馮玉祥は私の最後に出した「救國救民の終局の理想如何」の質問に對し、「三民主義を完全に實現すれば、たゞに中國がよくなるばかりでなく、世界人類均しく、好くなるであらう。たゞ中國率先事を始めやうと云ふのである」と答へた。これを換言すれば「終局の理想は支那を根據として三民主義により全世界を征服するにある」と云ふことになる。これは全くボリシエウイキが、ソウエート聯邦を以て「ソシアリズムの母國」となし「全世界の共產主義化」を以て終局の目的となすの原理をそのまま、支那にあてはめたものである。即ち共產主義の名をかへて三民主義と云ひ、ロシアに代うるに支那を以てしたゞけのことで、原理の根本においては少しも變らぬ。

馮玉祥は巧みに私の質問の鋒先を逃けた。容易にその肚の底を見せなかつた。しかし、私はこの最後の問答によつて、彼の思想は今如何なる過程にあるか、略々その見當をつけるこゝが出来たのである。

二 クリスチヤン・ヂエネラル



の代時ルラネエダ・ンヤチスリク

祥 玉 馮

名門の出か瓦工の子か・壁に光を藏して・「氣死學
生」・王社黨から革命黨へ・叙府の班師・復辟討伐
の先鋒・煩悶の極から信仰へ・武穴の唱和・變つた
督軍振り・「善政の暴行」・一省内に二人の英雄・
「大總統脚下の爆彈」

馮玉祥は安徽省巢縣人で、幼時から父母に伴はれて直隸省の保定に天津に居住した。一説によれば、安徽省巢縣はたゞ馮玉祥の原籍地であるだけで、彼の生れたのは直隸省の保定であることも云ふ。由來、支那人はその出身地によつて、閥をつくるを常とするが、馮玉祥は原籍故郷を、生れ故郷の「二つの故郷」を持つた關係からか、その所屬閥が甚だ曖昧である。馮玉祥は原籍故郷の關係において、當然安福系に屬すべきであつた。しかし彼は最初から安福派の巨頭段祺瑞を嫌ひ、また段の方からも信用されなかつた。従つて北洋軍閥の間に伍してゐた時代の馮玉祥は、さちらかき云へば、生れ故郷の緣故から、直隸派の色彩が濃厚であつた。

馮玉祥の出身について、いま一つ曖昧なのは、その両親の素性である。彼が金ピカの上將軍服を着けて得意がつた頃、即ち民國十一年の頃に出版された傳記を讀むと、「名門豪族の出身」である。しかし金ピカ服を脱ぎ捨て、ボロ／＼の兵卒服に着かへ「同志馮玉祥」を名乗つて、五原に奮闘した時の宣言には、冒頭において「余は瓦工の子だ」と書いてある。名門豪族の出身か、勞働者の子か、いづれもその時勢に適應して、巧みに自家宣傳をなした如くにも聞へるが、恐らく後説の方が事實であらう。一説には馮玉祥の父は軍人であつた。彼の体格の魁偉なもの、軍人を父にもつたからだ……こも云ふが、この説にはたしか根拠がないやうである。いづれにしても馮玉祥の生家の

貧乏であつたことだけは疑をいれない。即ち、彼は貧乏な家庭に育つたため、學校に入る餘裕もなく、十九歳の時に、一卒伍として武衛右軍に入營したときは、目に一丁字も讀めなかつたのである。然し、同じ兵卒の間に在つても、彼は最初から群を抜いて頭角をあらはした。特に衆目を惹いたのは、彼の巨大なる軀幹を、そしてその極めて熱心なる勉強振りであつた。彼はその体軀の巨大なのに似合はず、中々細かいことに氣が付き、又何事につけ敏感で、それだけ物事に熱中する傾向をもつてゐた。彼はある日年長兵から學問の必要を説かれて、感激發奮し、俄かに獨學自修を始め兵卒勤務の忙しい間にも、讀書を習字に専心した。馮玉祥の兵卒時代における勉強振りについて、左の如き逸話がある。

或る日、馮玉祥は營外で一人の焼餅賣りのお爺さんに出會ひ、色々世間話をしてゐるうちに、このお爺さんが、その青年時代、秀才であつたのが、中途にして失敗し、零落の揚句、焼餅賣りになつたものであることを知つた。そこで馮玉祥はこのお爺さんに、夜の商賣がすんでから、讀書を教へてもらひたいと懇願し、毎月二千文づつ、月謝を拂ふ約束でその承諾を得、こゝに昔は秀才、今は焼餅賣の先生について、更らに一層研學に精進した。營中では消燈が早かつたので、彼はそつこ起き、燈火をか、けて勉強した。營内で眠たい兵卒達は、彼の燈火を厭やがつて、屢々抗議を持ち込んだので、彼は一案を工夫し、そつこ泥壁に穴をあけ、その中に小さいな洋燈を隠し、その明りで勉強した。それ以來、光が外に漏れず、人にも迷惑をかけることなく、安心して勉強することが出来た。古人は「螢雪の功」と云ふが、兵卒時代の馮玉祥は壁に光りを藏して勉強したのである。

二

馮玉祥は兵營にある間に、保定の武備小學(幼年士官學校)に入學した。しかし、果してそれを卒業したか、ごうか。いづれにしても彼の初等教育は、極めて不正則なものであつた。彼は南第九鎮隊官であつた頃、一時講武學堂に入學し、更らに保定軍官學校に轉校し、漸やく高等の軍事教育を受けたと云ふが、それも聽講生ぐらひのところ、正則に進及卒業したのではなかつたらしい。しかし、その刻苦求學はやがて長官の認むるところとなり、逐次昇進の機會をつくつた。ある日、王士珍及び楊善徳が、馮玉祥の所屬部隊を檢閲したとき、馮の將來あるに着目し、特に彼を段祺瑞に推薦した。彼は段祺瑞を統領させる第三鎮に入り、小隊長に進んだ。馮玉祥がその出世の恩人たる陸建章に認められたのは、この時のことである。當時陸建章は第三鎮の協統であつたが、若き馮玉祥の魁偉なる體格、その圓く太つた如何にも福々しい風貌を見て、前途有望となし、その内姪を與へて娶らしめた。馮玉祥初年の立志は多く陸建章の知遇と推輓によつたものである。

宣統二年、馮玉祥は第三鎮第五標第十團第三營管帶にあけられ、漸やく五百人の部隊長となり、房山縣に駐屯してゐたが、久しからずして、また統領と合はず、改編處分を受けることとなつた

が、陸建章の庇護で、間もなく復職し、京畿憲兵營長に任ぜられた。

その後、馮玉祥は第二十鎮勤務に轉じ、滿洲の遼西に駐屯してゐた。その頃統制陳宦の監督下に、士官昇級の試験が行はれた。その際馮も亦之れに應募したが、受験者の多くは内外大學卒業生であつた。然るに試験の成績發表さなるや、學歴なき馮玉祥が第一番を占めた。陳宦は馮玉祥が正則の教育を受けなかつたにも係らず、好成绩をあけたのを歎賞し、特に手づから「氣死學生」の四字をその答案用紙に誌した。それより後、同僚の士官達は馮玉祥を呼んで「氣死學生」に綽名したものである。やがて馮玉祥は第八十標第三營管帶(大隊長)に進み、京奉線瀋州において演習中、辛亥革命勃發の警報に接した。

馮玉祥の兵卒時代は學問も淺く、環境が保守主義の空氣につままれてゐたので、彼は新らしい急進思想にふれる機會もなく、清朝に對しては、極めて純良忠誠なる兵卒であつた。

今日の馮玉祥から考へれば、甚だ不似合な話であるが、會つて光緒皇帝の崩御された時の如き、彼は二日二夜慟哭して哀悼した。また、ある同僚の一人が剃髮したと聞くや、彼はその同僚に向つて「貴公は親も君もないのか」と罵り、その不忠不孝を責めたこと云ふ話がある。

然るに、その後、馮玉祥が士官に昇進した頃から、北洋軍閥の中にも、そろ／＼革命の風が吹きそよぎ、青年士官の中には、ひそかに孫文や黃興等の同盟會なき氣脈を通ずるものがあり、馮玉

祥も亦いつしか革命思想にさらはれてしまつた。ある日、彼は同僚の王金銘と施從雲の二人から「楊州十日記」なる革命宣傳冊子の寄贈を受けてこれをくりかへし閱讀し、始めて滿清は漢族を征服したもものなることを知り、翻然清朝に忠良なる士官から、熱烈なる反清革命家に一變し、爾來ひそかに清朝打倒と民族革命を標榜して、同志とこもに相はかり他日の革命決行を期したのである。

宣統二年、馮玉祥は當時の新派將領王金銘、施從雲(民國十七年春、北伐完成の直後、北京中央公園社稷殿の前に建立された二つの銅像は王、施両氏の遺像である)白雅雨等の一味に加はり、武學研究會なるものを組織した。即ち武學研究を名として、同志相集り、革命遂行を議したものである。この會には、その頃から馮玉祥の配下にあつた張之江、張樹聲、李鳴鐘等も加入してゐた。

宣統三年秋、辛亥革命勃發するや、武學研究會を中心とする北方革命黨の同志は、遙かに武漢の革命軍に呼應せんとし、張紹會を介して、宣統帝に退位を勸告し、また一方武昌に通電を發して、南方と連絡をはかり、清帝の歸路を斷つべく陰謀を廻らし、灤州の獨立を宣言せんとしたが、事中途にして張建功なるもの、爲めに告發され、劃策つひに成らず、王、施、白等は王懷慶軍のために捕へられて銃殺に處せられ、馮も亦張之江、李鳴鐘、張樹聲とともに、職を解かれて、保定に護送された。これがそろ／＼馮玉祥の革命戦闘に足を踏み入れた第一歩で、彼は疑ひもなく、この時から北方保守派軍閥中の「危険分子」であつたのである。

宣統帝退位して、民國の時世となるや、馮玉祥は再び出でて京畿右路備補軍第二營營長に任ぜられた。民國元年、彼の所屬部隊は京畿軍左翼第一團に改編されて、その團長となり、次いで二年秋第十四旅に増編さるゝ。こゝにも、彼は旅長に昇進した。三年春剿匪總司令陸建章に従つて、河南及び陝西省における白狼匪の討伐にあつた。當時馮玉祥の率ゐた第十四旅は甘肅と陝西兩省を跨にかけて、白狼匪を逐ひまくつたが、その行軍頗る迅速にして、ある時は三日三晩晝夜兼行、六百餘支里を駈け通した。こゝもあつて、「飛行軍」と稱さるゝに至つた。國民軍が一日の行軍里程を平均百八十支里と定めたのも、こゝにその端を發してゐる。

民國三年秋、袁世凱は特に混成旅十個の編制を計劃して居た際で、馮玉祥はその部下を改編し、歩兵二團、砲兵一營をもつて、中央第十六混成旅となした。この第十六混成旅こそ、馮玉祥が武將としての勢力を築きあげた最初の礎石である。

第十六混成旅の改編後、旅長馮玉祥が軍隊改革の第一歩として實行したのは、兵卒の教育獎勵である。彼は先づ旅中文字を讀み得る兵卒百餘人を選抜して、模範連(模範中隊)を編制し、李鳴鐘をその連長に宋子揚、蔣鴻遇、劉郁芬、吳樹榮等を教官に任じ、以て第十六混成旅の基本となした。

同年冬馮玉祥は第十六混成旅を率ゐて、陝西南部の褒城に駐屯し、四川中部における兵變の防壓に當り、更らに四川北部蘇州一帯に出でて、土匪の平定に従事した。

民國四年夏、袁世凱の帝制運動起るや、王某なるもの袁世凱に勸めて、全國旅長以上の將官に、帝政贊成の署名を求め、その結果北洋系の旅長は悉くこれに賛同したが、馮玉祥は獨りその態度を明らかにしなかつた。間もなく、蔡鍔雲南にあつて、討袁軍を起すや、袁世凱は馮玉祥の第十六混成旅を前線にくり出し、雲南討伐に向はしめんとした。然るに最初から袁の帝制に反對であつた馮玉祥は容易に兵を動かさず。たゞ援川總司令曹錕や、四川將軍陳宦等恩顧を受けた先輩から、再三迫られて、漸やく敍府を發したが、中途にして、蔡鍔と妥協し、軍を成都に返した。彼は更らに陳宦に四川省の獨立を促し、打電する。こゝ二十餘通に及び、つひに陳をして四川獨立の宣言を發せしめた。陳宦は當時袁世凱の最も親任してゐた腹心の部下で、四川獨立の報道に接した袁世凱の憤懣と失望は一方でなかつた。袁をして帝政延期を決意せしめた有力なる動機の一つは四川の獨立であつた。こゝへ傳へられてゐる。

民國五年、袁世凱の帝制計劃に對する反對運動の急先鋒は云ふまでもなく蔡鍔である。しかし雲南起義をして成功に至らしめた。こゝについては、馮玉祥の行動も亦大いに與つて力あつたわけで、敍府の班帥は民國革命史上見のがすべからざる重大事件の一つと見なければならぬ。

袁世凱去つて洪憲終りを告げた民國五年の十月、馮玉祥は第十六混成旅を率ゐて北上した。當時安福派の牛耳をこつて、北方の實權を握つてゐた段祺瑞は、馮が安徽省の出身なるを聞いて、自派の人をなし、京津間の要地たる廊坊に駐在せしめた。その頃全國混成旅中、第十六混成旅は步騎砲工輜重の各部隊の外に、拳銃隊、炸彈隊、技術隊、地雷隊等を編入し、名義は一混成旅であつたが、實力は一師に當るの勢ひであつた。

當時恰かも袁世凱没落の直後に當り、中央と各省の間には、幾多の軋轢あり、四圍の形勢は頗る險惡であつた。段祺瑞がかゝる重要な時局に當面して、特に馮玉祥を選び、彼をして京津間の要地たる廊坊を扼守せしめたのは、云ふまでもなく、深く馮に信頼するところがあつたからである。然るに馮玉祥は少しも段氏の知遇に感激せず、却て事毎に命令に反抗し、その信頼に報ひやうしない。こゝにおいて、段祺瑞は大いに憤怒し、第十六混成旅に對して解散を命ぜんとしたが、かゝる場合、いつも馮玉祥のために庇護の役に當る陸建章が恰度北京に居合はせたので、早速段氏を訪ね「軍隊の解散は容易な事であるが、然しかく迄で整頓した有力なる混成旅を新たに建設するこゝは至難な事業である。むしろ旅長だけを更へて、旅はその儘存置しては如何。旅長の更迭については拙者が面倒の起らぬやう保證する」と建言し、馮の後任として嘗て第十六旅長であつた楊桂堂を推選した。段祺瑞は喜んで陸建章の建言を入れ、即日馮玉祥の第十六混成旅長を罷免し、楊桂堂を

その後任に任命した。而して命令發表さるゝや、陸建章は自ら楊桂堂を伴ひ、廊坊に赴いた。二人の廊坊驛に到着するや、一人の出迎人なく、陸は楊を徒歩で、旅團司令部に至つた。馮玉祥は一つは恩人陸建章の勸告もだし難かつたのこゝ、いま一つは年來第十六混成旅中に布植した自分の勢力は已に深く根をおろし、たゞ一時旅長の職を奪はれても、旅の將卒が自分のあゝについて來るこの強い自信があつたので、彼はたゞ「士卒は一人も移動せしめぬ」と云ふ一つの條件の下に、おこなく辭任を承諾した。翌日馮玉祥の廊坊を去らんとするや、全旅の將卒は擧つて驛前に集合し、前旅長の別れを惜しみ、いよく列車の出發間際に臨んで馮玉祥が車窓より一場の袂別辭を述べらるや、士卒の中には感激の餘り、泣く者さへあつた。以て馮玉祥の第十六混成旅内に布植した勢力の如何に深く、如何に根強いものであつたかを推すこゝが出来るのである。

馮玉祥は廊坊からひき先づ天津に去つたが、當時曹錕が直隸督軍として同地にあり、馮をあけて第七路(南路)邊防統領に任じた。民國六年春、馮玉祥は新任地正定に赴き、邊防隊の指揮をこつたが、その左遷を不平として、間もなく邊防隊をすて、天臺山に入り、ひそかに手を廻して、舊部下を操り、新旅長楊桂堂の不評判なるに乗じて、第十六混成旅取りかへしの計劃を廻らした。

民國六年夏、張勳の復辟事變おこるや、第十六混成旅の士卒は、代表を天臺山に派して、馮玉祥に復職を懇請した。こゝに於て馮は北京の寓居を抵當として、五千元を借り入れ、これを兵餉にあ

て、舊部下にふるまひ、又天津に赴き張紹曾、陸建章等の後援を請うて、ひそかに復職の手配を廻らした。當時馬廠にあつた段祺瑞は、復辟反對の旗をあげ、先づ北京に最も近き廊坊駐屯の第十六混成旅に電命して、復辟討伐軍の前衛をなし、楊桂堂を前敵總指揮に任じた。然るに楊は北京に在つて、旅團司令部に歸營せず、副官馬辨は段祺瑞の命令を携へて、北京にある楊の寓居を訪ねたが、楊氏は既に廊坊に歸つたあきだき聞いて、馬辨は直ちに廊坊に引返したが、楊は未だ歸つて居ない。馬辨は更らに天津にある楊氏の妾宅を探して見たが、そこにも居らず、非常の時に、旅長の所在が不明となつてしまつた。然るに張勳の復辟運動は急轉直下の勢を以て發展する。第十六混成旅出動の嚴命に對しては、旅長から復命の返電さへ來ない。段祺瑞は楊桂堂も亦張勳側についたのではないか案じ、矢つぎ早やに、數通の電報を打つて、出動を督促した。そこで參謀長はいよく好機至れりを見て、段祺瑞にあて、「旅長廊坊に在らず、指揮する人がない。舊旅長馮玉祥を總指揮に任せられんことを請ふ。全旅の士卒は擧つて舊旅長の指揮下に服する」この返電を送つた。當時の形勢は刻々險惡を加へ、段氏は人を選ぶの餘裕なく、直ちに第十六混成旅參謀長の建言を入れ、一旦くびにした馮玉祥を再びあけて、第十六混成旅の總指揮にあけた。勿論楊桂堂の所在が何時までも分らなかつたことや、參謀長の舊旅長かつぎ上げの電請なきには、馮玉祥の指金があつたことは云ふまでもない。

馮玉祥は段氏の命令に接して、再び廊坊に來たが、その時楊桂堂も亦歸營したので、第十六混成旅は馮、楊二人の共同統轄軍となつた。而して一切の公電も亦旅長楊桂堂と總指揮馮玉祥二人の連名で發表されたものである。その舊部下を手足の如く動かした巧妙なる操縦振り、競争對手の楊氏に對して、裏面からは烈しく排斥の手を廻はし乍ら、表面少しも争はず、共同して指揮に當つたところなき、馮玉祥の凄い手腕が遺憾なく發揮された。當時已に馮の非凡なる材幹、將來大事をなすの器は、知る人ぞ知つてゐたのである。

かくして民國六年七月、馮玉祥は楊桂堂と共に、第十六混成旅を率ゐ、李長泰の第八師と連携して、北京を衝いた。同月十二日、馮軍は右安門を陥落し、一舉に天壇の復辟軍を投降せしめ、張勳の復辟の計劃に對し、最初にして且つ致命的の打撃を與へた。

復辟討伐の大功勞者は云ふまでもなく段祺瑞その人に外ならぬが、北京攻略の實戰的武功に至つては馮玉祥をもつて第一人者に推さねばならぬ。やがて張勳逃亡し、復辟の一幕終りを告ぐるや、段祺瑞は論功行賞に當り、不本意乍ら楊桂堂を免職し、再び馮玉祥をあけて第十六混成旅長に任ぜざるを得なかつた。

五

これより先き馮玉祥が、まだ一營長であつた頃、その家庭に種々の事故が起り、流石の彼も懊惱

煩悶に苦しんだ。或る日、馮玉祥は煩悶のあまり、慰安を宗教に求めんとしてか、ふも北京のある基督教會にはいつて見る氣になつた。その時、恰度米國から北京にやつて來た萬國基督教青年會同盟總幹事ジョン・アール・モット師の説教最中であつた。そして同師の説教の中に、恰度、馮玉祥の苦惱しつゝ、あつた家庭の煩悶に對して、一大慰安を與ふべき教訓があつた。馮玉祥はこれを聞いて深刻なる感動に打たれ、その場ですつかり基督教に歸依してしまつた。爾來彼は極めて熱心なる教會參詣者となり、宣教師についてバイブルの講義を聞き、やがて有名なる牧師劉芳から、洗禮を受けて正式に基督教徒になつた。人生實に浮沈多し。馮玉祥の如き豪傑ですら、その一生の中に、煩悶の日があつた。煩悶の極、神に慰安を求むるの外ない時があつた。

馮玉祥はかくして自ら基督教徒となり、家庭の煩悶から脱却したが、彼はたゞに自己とその家庭に止まらず、同時に、これを部下軍隊の中にも傳道し、士官及び兵卒をして、バイブルを讀ませ、さかんに基督教會參詣を獎勵した。

間もなく、馮玉祥が第十六混成旅長となるや、士官の殆んど全部は旅長にならつて、洗禮を受け兵卒も亦多數基督教徒になつた。こゝに於て舊式な北洋軍中……軍歌の代りに讚美歌を歌ふ。點呼のラツパで、禮拜を始める。日曜日には説教、金曜日には祈禱會を行ひ、何百人かの兵卒をして、洗禮を受けさせる。旅長始め、士官は軍隊教練の餘暇毎に講演する。大隊以上の各部隊には牧師が



馮玉祥の軍隊

つき、日曜毎にバイブルを講義して聞かせる……こ云ふまことに一風變つた軍隊が出現した。

馮玉祥の軍隊内における基督教の傳道はその當初一般世間からは狂ひじみた行動と目され、世人の笑ひを買つたものであるが、しかし、軍隊の基督教化は、一面において、著しく第十六混成旅における士卒の操行を改善したと同時に、また、他の一面において、馮玉祥とその部下との間に、同じ信仰の下に立つこと云ふ關係において、切つても切れぬ精神的連鎖がつくられ、彼は一層部下の間に、その勢力を強うするの結果を招來した。馮玉祥が第十六混成旅長の職を去つて後、なほ同旅の士卒に慕はれ、つひに再び同旅長にあけられるに至つたについても、宗教上の關係が與つて力あつたものを見なければならぬ。馮玉祥が内外人の間にクリスチャン・ヂエネラルの聲名をあげ、當時北方軍閥の武將間に、異彩を放つに至つたのもその頃からのことである。民國十二年、馮玉祥は萬國基督教青年會同盟幹事に擧げられた。

馮玉祥はかくして「神の力」で家庭内の煩悶から救はれた。彼は更らに「信仰の力」をもつて、その部下を統制し、配下の士卒間に牢固として拔くべからざる勢力を扶植することに成功した。彼はコーランと劍を手にしてオットマン大帝國の覇權を打ちたたてたマホメットを夢見たのであらうか。クリスチャン・ヂエネラル馮玉祥は右手に劍、左手にバイブルをもつて、民國革命紛亂の舞臺に、その魁偉なる巨軀をあらはした。

六

民國六年冬、孫文が護法軍をおこし、陳炯明を派して、福建を攻むるや、福建督辦李厚基は段祺瑞にその急を告げ、援兵の派遣を請ふた。こゝにおいて、段祺瑞は馮玉祥に南征を命じ、馮は第十六混成旅を率ゐて京漢線より隴海、津浦兩線を経て南下した。然るに、彼は浦口に至るや、前進を停止し、同地に留まるこゝに二月に及んでなほ動かさず。漸やく、湖南軍の長沙及び岳州を攻陥して、傅良佐軍が北退するに至り、馮玉祥は第十六混成旅も長江を遡つた。然し、舟の武穴に至るや、こゝでも、兵を止めて進まず、却て七年二月二十四日、全國に通電を發して和平を唱道した。その段祺瑞に告ぐる和平通電に曰く

段氏は獨逸に對して宣戰しながら、これと戰はず。しかも、國人に對しては、宣戰せずして戰爭を實行してゐる。余の軍隊は外敵こそ、死戰を厭はざるも、國內の宗旨なき内争に参加し、以て同胞を慘殺するを欲せず云々

こ。然るに、當時の段祺瑞は銳意全支那の武力統一をはかり、その勢威はまさに北方の武將を威壓してゐた時で、一人として一旅長馮玉祥の通電に應ずるものがなかつた。

段祺瑞は馮玉祥の第十六混成旅長を再び褫奪するに同時に、これが討伐のため、兵を武穴に集めた。然し、武穴は要害の地にあつて、九旅の衆をもつて馬の一旅を包圍したるも、攻撃は捗々しい

効果をあげず、却つて一隅の地に數萬の大兵を集めたために、肝腎な討南計劃は非常の蹉跌に會した。但し、馮玉祥は結局衆寡敵せず、長く抵抗の不可能なるを知り、百方北京の各方面に運動し、七年冬漸やく湖南常德に遷され、そこに移駐するこゝを得た。爾後馮玉祥は武穴唱和の不用意を極め、あまりに輕卒な行爲であつたこゝを悔ひ、深く自ら輕舉妄動を戒めた。その後の馮玉祥が何事につけ「石橋を叩いて渡る」主義をこゝに至つたのも、恐らく武穴唱和の苦い經驗によつて教へられた結果であらう。然し、わづかに一旅長の身を以て、なほよく時局の大勢を左右し得たこゝは、たしかに彼が單純なる武人でなく、已に一方のリーダーシップを把握し得る材幹なるこゝを天下に實證したものと云はねばならぬ。馮玉祥が支那の内外をして、その存在を知らしめたのは、實にこの武穴唱和の時からである。

七

武穴唱和の事あつて以來、馮玉祥は益々段派に對して反感を抱き、その結果自然直隸派に接近し、民國九年夏の直皖戦争には、吳佩孚を助けて、直隸派のために盡すこゝろがあつた。直皖戦端開かれて、吳佩孚が衡州を撤し、張敬堯の長沙を放棄するや、馮玉祥も亦、湖南より津師、公安、右首に道をこつて北に歸つた。中途にして直鄂戦争勃發し、湖北督辦王占元より、急を告げて來たので武昌に引返したが、戦亂は已に平定し、馮玉祥は暫らく湛家磯に駐屯して居た。この時孫文は遙か

に徐謙を同地に派し、ひそかに馮と聯携を計らしめた。國民軍のある文献には、馮家磯の會商こそ、馮玉祥の國民黨と交渉を始めた最初の歩みであること記してあるが、馮玉祥は私の質問に對して「余の孫文先生と始めて相知れるは、民國元年のこゝである。當時余の直接親交をかはせる孫文先生の代表は孫建生(孫科)、戴錫九及び白雅雨の三氏である」と答へた。即ち馮玉祥と國民黨との最初の交渉は、民國元年馮が灤州にあつた時のこゝで、馮家磯のそれは孫馮交渉の第二回目であつたこと見なければならぬ。當時孫文が特に徐謙を派して、馮玉祥と會商せしめた所以は、云ふまでもなく、孫文が馮玉祥の武穴唱和において示した識見と手腕の非凡なるに感歎し、彼をもつて將來事をこもにすべき人物と見たからに外ならぬ。

九年秋、馮玉祥は信陽に移駐し、十年春、河南第一旅長成愼と呼應して、趙倜を討たんとしたが吳佩孚が中途にして計を變じ、趙に加擔して、成愼を攻めたので、馮は兵を引いて再び信陽に回つた。この時馮玉祥は任右民を廣東に派し、孫文と何事か商議するところがあつた。これ孫文と馮玉祥との交渉の第三回目である。

同年の夏、馮玉祥は閻相文に隨つて、陝西に入り、陳樹藩を攻下した功によつて、第十一師長に昇進し、咸陽に駐屯した。閻相文は陝西督軍就任後二ヶ月にして自殺し(一説には毒殺されたとも云ふ)馮は代つて陝西督軍となつた。

この一年、馮玉祥は僅かに數ヶ月の間に、旅長より師長に一躍し、更らに督軍の地位を占めた。彼は實に當時の武將中その昇進の速さにおいても、群を抜いたのである。

八

かくして入陝匆匆、旅長より師長に進み、更らに督軍の要職を勝ち得て得意満々の馮玉祥は、陝西の施政に當り、如何なる督軍振りを見せたか。云ふまでもなく、彼は先づ基督教によつて教へられた政政を布き、大いに平素抱懷してゐた理想を實現せんことを期した。新督軍の發布した最初の政令は左の禁烟令である。

禁烟は中國の要政にして森嚴侵す可からざるものである。然るに近年頻々として土匪蜂起するやその混亂に乗じ、各地の奸民はひそかに阿片の種を偷んで栽培してゐる。現在中央より禁烟委員派遣され、且つ外交、内務兩部よりも派員あり、已に陝西に到着し、不日南北各地に分派さるべく、關中においては已に嚴密検査が行はれてゐる。省民一般よく命に服し、面倒なる外交問題を惹起してはならぬ。

馮玉祥の施政方針は要するに從來その所屬軍隊内において勵行し來つた節儉主義と清教徒的生活をそのまゝ、全省の省民にも、適用するにあつた。彼は禁烟と同時に棉服の獎勵、飲酒の禁止、妓女の解放等の勵行にこりかゝり、また盛んに道路の修理、公園の開設、學校や、圖書館の増設等の

公共事業に力を入れ、大いにクリスチャン・ヂエネラルとしての新督軍振りを發揮したのである。

陝西督軍馮玉祥の治政は、前記の如く基督教を多量に加味し、西洋式にしては「善政」に相違なかつたが、しかし、他の一面無暗みに舊い慣習の打破に向つて猛進し、且つその勵行手段が過激に失し、また往々突飛に過ぎたために、省の當局者及び省民をして不安の念を抱かしめた。而してかゝる急激なる改革に猛進する馮玉祥の新督軍振りは、自然省民をして彼の信仰する基督教に對しても怪疑の念を深からしめた。馮玉祥が基督教徒なるが故に、かく「善政の暴行」をなすのであらう云はしめるに至つた。馮玉祥が特に左の如き信教自由の布告を發したのも、省民を慰撫し、クリスチャン・ヂエネラルの名に對する反感を和らげやうとしたものであらう。

信教の自由は法令の明かに示すところ、孔子、基督、佛教、道教等、その何れを問はず、何人にも雖も服従を強ふるの理はない。然るに近頃外間謠言蜚語を放ち、本督軍は基督教信者なるが故に他教を排斥するを傳うるものがある。實に奇怪至極の暴言云ふべし。本督軍は基督教を信ずるこそ、茲に十有餘年なるが、その教の眞理を守る點に於て、自ら慚愧に堪えざるものがある。自身斯くの如くにして、しかも他教を排斥するなき、到底あり得可らざることである。第十一師内の將卒にして、深く教義を明かにし、洗禮を受けた者は多數あるが、また宗旨を異にし、未だ洗禮を受けない者も少くない。すべて將卒にして愛國精神を有するものは、基督教を信ずるを否なきを問はず、本督軍は同一に待遇し、少しも、これに差別をつけるやうなことは無い。されば軍民共によくこの意を明かにし、共に時難の解決に努め、決して浮言を輕信し、徒らに惑ふことなきを望む、云々。



馮玉祥の陝西督軍就職後、間もないこと、ある日、西安廣濟街の南口で、白晝突如兵士二名現れ、ある商家の手代が大金を携へて行くを襲撃し、一人は金を攫ひ、他の一人はその場で手代を刺殺し、ともに姿をかくしてしまつた。省城目抜きで、馮玉祥はこれを聞かぬや、直ちに各當局者を督軍署に召集し、告げて曰く「今次省城の地において斯くの如き事件の發生したるは、お互ひ實に慚愧に堪えないことである。警備司令はまさに責任を以て犯人の逮捕につまむべく、關中道尹、警務署長、長安知事等はこれに一致協力されたい。萬一今後三日にして尙ほ犯人が擧がらぬ場合は、遺憾乍ら諸君に同座下獄を願はなければならぬ。そして自分は自ら手がせ足がせを持つて、三日間犯人捜査のために巡廻し、以て市民に謝する」云々。霹靂一聲、滿座色を失ひ、相見て無言のまゝ、點頭のみであつた。しかし、この威壓が効を奏して、二日目に警備司令部は鎮嵩軍の敗殘兵中に犯人を發見した。かくして全城を震駭した白晝の掠奪殺人事件も、新督軍の一喝によつて、直ちに逮捕

處分することが出来た。

九

民國十一年五月、第一次奉直戰爭の勃發するや、馮玉祥は最初から直隸派に加擔し、先づ左の宣言を發し、當時奉天軍に通じて、反直の兵を擧げた河南督軍趙倜を討つべく、陝西省を出た。一説によれば、當時吳佩孚と趙倜の間には、已に趙はたゞひ最初反直助奉の方針なるが如く見せても、適當の時機において、態度を一變し、吳軍を援助するの密約が成立してゐたのであつて馮玉祥の河南攻撃は直隸派にまつて、むしろ難有迷惑を恐るゝところであつたことも云ふ。或は馮玉祥もうすく吳趙の密約を知つてゐたかも知れぬ。しかし、奉直戰亂の機に乗じて、河南を手に入れんがためには、趙をして直隸派の敵たらしめ、これを討伐するの形式をつくらねばならぬ。即ち奉直戰端開かるや、馮玉祥は一、急いで援直反奉の旗をか、二、用意周到なる宣言通電を發し以て、三、趙を反直派となし、四、大いに河南侵入の大義名分を高唱した。この一事以て馮玉祥が如何に機會を捉へるに敏にして、事を決行するに迅速なるかを證するに足るであらう。馮玉祥の出關宣言に曰く

共和成立以來、國步艱難、志士形骸を晒らし、英傑の血山野に腥く、之れを言ふ、實に心を痛ましむるの極みである。即ち十年以來、紛亂未だ止まず、しかもその因たる、一は與賊（袁世凱）帝

制に心酔し、洪憲尊を稱し、一は張勳の奴賊復辟を圖りしによる。蔡松坡滇池に義を擧げ、段合肥馬廠に師を誓ひ、兩度の流血、千古に恨をのこした。國家の恥辱にして、國体を變更し、共和に背くより甚だしきはない。全國を糜爛に導き、また、必ず隣邦に、笑を貽すものである。此の度奉軍無法にも入關し、不義を敢てせるは、抑も國家を以て前提せざるや、或はまた個人の黨見を以て、その主旨をせざるや。國內時務を識るの士にまつては、言はずして自ら明かなるころであらう。かの張勳は復辟の巨魁にして、國人皆な齒牙にもかけざりしもの。しかも張作霖はこれを引いて腹心となし、屢々起用を請ふた。又梁士詒は帝制の禍首であり、また賣國の賊である。しかも、張作霖はこれが保護を通電し、庇護者となつた。張作霖の舉動を見るに、帝制の復活を希ふの跡は、歴然明瞭である。我等は身を軍籍に置き、護國の大義を明らかにせんとするもの。この度率師出關せるは、まさに共和國の軍人を以て、帝制派の軍閥に宣戰せんとするに外ならぬ。今次の戰爭を以て、單に奉直の關係をなし、その成敗を坐視せんか、惡人猖獗し、國家の滅亡近しと云ふも過言でなからう。われ等は思ふ、帝制復活の時鞭々として生を求めんよりは、共和のために死を效し、以て國人を慰め、士氣を作興するに如かず。向ふ所敢て水火も辭せざるの決心である。電に接して憤慨にたえず、諸士の明察を希ふ次第である。

また、その日の河南進兵の通電に曰く、

國內の紛亂茲に十年、民窮洗ふが如く、全國人民水深火熱の中に投ぜらる。しかも尙ほこの瀕死の黎民を驅つて糜爛せる戦火の巷に顛轉たらしむるは、實に忍びざるどころである。この度帝制の遺類は突如として京漢、津浦兩線の間を増兵し、無名の師を起し、大局を破壊し、國体を動搖せんとし、民命已に堪ふる所無きの有様である。玉祥命を奉じ、軍を率ひ、救援に赴き、洛陽方面に向つて、軍を集中し、曹吳兩氏の後に隨つて、國賊を進討するに決し、既に所部の第十一師全部及び中央第四混成旅、陝西臨時編成第一師及び第一、第二兩混成旅及び督軍署護衛隊各部は整備完成し、本月十九日出關の豫定である。省内の治安は省長劉鎮華に托した。茲に特に奉達して大方の鑒察を乞ふ。

當時馮玉祥の作戰方針は、一、趙倜を討滅し、二、京漢線北段における吳佩孚軍を援助するにあつた。馮玉祥は先づ張之江の率ゆる第二十二旅を派して、鄭州に進め、數倍の趙軍を討破し、間もなく同地を占領した。

その頃、吳佩孚軍は長驅北京に迫れるが、奉天軍はその兵數の多きを頼みとし、長辛店の線において、吳佩孚軍を三方より包圍するの勢を示した。威嚇の手ひこつて直隸派軍を壓倒せんとした。

この時、馮玉祥は李鳴鐘の率ゆる第二十一旅をして、急遽北上、奉天軍左翼の後方に進出せしめて、奇勝を博し、吳佩孚の率ゆる直隸派主力軍のため、有利なる戦局の打開に與つて力があつた。

第一次奉直戦争後、馮玉祥は戦功によつて、その豫期した如く河南督軍に轉じ、楊威將軍を授けられ、開封に駐在することゝなつた。馮玉祥の河南進出は吳張兩雄の争ひに乗じて、巧みに「漁夫の利」を占めたもの、彼は遺憾なくその非凡なる機略を發揮し、極めて巧妙に陝西の山奥から、河南の中原へ進出の野謀を成就した。

しかし、馮玉祥の河南督軍として開封着任に先きだち、吳佩孚は直魯豫巡閱使に任ぜられ、當時赫々の武名を馳せた第三師を率ゐ、洛陽に駐在した。かくして二人の巨頭が同時に同一省内、同一鐵道(隴海線)沿線に駐在することゝなつたが、兩雄並び立つ能はず。兩者の關係はその頃から急變惡化し、吳佩孚の馮玉祥に對する壓迫は日々に加はり、同時に張福來や、靳雲鶚等も亦さかんに排馮運動をおこすあり、河南督軍としての馮玉祥の地位は益々不安状態に陥つた。

吳馮の關係惡化の動機は、一、馮玉祥一流の「善政の暴行」二、その武力の膨脹であつた。

十

馮玉祥の河南督軍となるや、前年陝西督軍となつた時の如く、否なそれ以上に、彼一流の基督教を加味した「善政」を斷行した。

馮玉祥は河南督軍着任の劈頭、督軍署員に對する新任の挨拶において「名のみ官職に列ねて、俸給をむさほるものは一切免職するが、實務に従事し、これに精勵するものは決して他に移動せしめ

ない。余及び余の部下は久しく軍に従ひ、政務に暗い。故に余は決して自己の徒黨を引き入れるが如き私心を持たない」と聲明した。しかし開封着任後、間もなく財政所長には薛篤弼、警察所長には鹿鍾麟を任用し、督軍署の主要幹部を一新し、省政の上に、一大革新期を劃せんとした。

馮玉祥は先づ官紀肅振の標語として(一)早起の提唱、(二)時間の嚴守、(三)賭博の禁止、(四)職務に忠實精勵の四誡をか、け、また署内の下級役員は上長官の機嫌伺ひをしてはならぬ。拱手の禮を廢し、互ひに叩頭の禮に止むべしと命じ、更らに(一)喫烟を許さず、(二)賭博を許さず、(三)遊蕩を許さずこの三大法度を發布するなき、河南官界に對して、清教徒的生活を要求し、大いにクリスチャン督軍振りを發揮した。



馮玉祥の河南督軍時代、その施政方針として公布した治豫河南統治大綱十條なるものは、當時内外の注目をひいたところで、その大要に曰く

河南省は近時連年人民水火に苦しみ、生を樂まざるこゝ久しきに及んだ。この度趙倜故なくして兵を擧げ、爲めに村郭坵墟となり、死亡枕籍し、四民業を失ひ、兵匪縱横その暴を擅にし、これを言ふ、只だ惻然たらざるを得ない。本督軍は着任の初め、調査の及ぶこゝろ、滿目只だ痛ましき戦亂の瘡痕に蔽はれ、只管人民忍ぶ能はず、暴動の勃發せんこゝろを懼れた。現狀を管見し、憂慮殊に甚だしきを覺ゆるのである。今や茲に河南省の情況を体察して、左記治豫大綱十條を定むるこゝろを得た。余の素志は高遠の談を爲さず、只だ緊急辨せんこゝろを期するにある。特にこれを宣佈し、萬民をして普ねく知らしめ、廣く行ひ、一致凝議し、遠きに行くには、必らず近きよりの例にならはんこゝろ欲する。一人の精力には限りあり、凡そ豫中の老若何人を問はず、直言を以てわが過を正さんこゝろ、余の切望にたえぬこゝろである。

治豫河南統治大綱十條を列舉せば左の如し。

- (一)、戦區の災民を救卹して、その失ふ所を得せしむ。
- (二)、財政に各種租税を整理して、苛斂の撲滅を期す。
- (三)、戸口を調査して、郷を整頓し、以て匪賊の發生を防ぐ。
- (四)、巡察各隊を取締り、改編を行ふ。
- (五)、貪官汚吏を捕へ、以て良民を安んず。
- (六)、實業工場を設立し、以て遊民に職を與ふ。
- (七)、道路及び水利を整理し、以て交通を便にす。
- (八)、義務教育を實行し、以て智識を開く。
- (九)、喫烟、賭博、遊蕩等を嚴禁し、豫めその惡因の根絶をはかる。

(十)、斬髮、放足を勵行し、以て陋習を除く。

馮玉祥が河南着任匆々一日開封各學校の校長を招いて、一場の講話を試みたことも當時の世評に上つた話で、その講話の大意に曰く

此の度余は河南に来て、督軍の重任に就くこととなつたが、元來淺學不才、或はその職に堪えな
いかと恐れて居る次第である。さて現在の官吏を見るに、大半は主人を以て自任し、人民を客体
とみなし、その結果、倒行逆施、民意に反し、しかも自らその罪を覺らぬのである。たゞは人の
猫を養ふはも鼠を捕へしめんがため、犬を養ふは夜を守らしめんがためである。しかも猫にし
て鼠を捕へず、犬にして夜を守らざらんか、既に主人がこれを養育する主旨に反するのである。
更に若し主人の食物を盗み、又は主人に反噬するが如きことあらんか、この猫、この犬たる、全
く主人のために仇敵にも比すべきものである。人民はその膏血をしぼつて、官吏と兵士を養つて
ゐるのである。故に人民が主人であつて、官吏の行動はまさに人民視線の集る所に於てなさるべ
く、人民を摧殘し、その主權を奪ふが如きは、言語同斷と云はざるを得ない。またわが國人士は
談この事に及ぶや、人心已に死し、挽救道なしと云ふ。然し、余の觀るに、患ふべきは、道
なきにあらず、唯だ教育なきにある。此の度趙氏教をなし、余は敢てありて、兵九百餘を生擒
したが、その内五百七十三人は下に婦人の着物を着け、腕に腕輪をつけてゐた。その行爲知るべ
しである。河南は毎年の軍費數百萬元を算する。しかもその養ふところの兵皆な斯くの如くであ
る。余は河南の爲めに涙を揮ふ已に久し。而してこれみな無教育の致すところである。諸兄は學
界の領袖である。諸兄の兩省に擔ふ所、責任頗る重大である。省民の人格養成の急務は、一に諸
兄に依頼するところである。

馮玉祥の河南督軍時代における一日の起居は、朝四時起床、五時より六時迄で、春秋左傳を讀み、
六時より七時迄で、英文を學び、七時より八時迄で、公文書を閱し、八時より九時迄で、來訪客に
接見し、九時に朝食、十時より十二時迄で操練、十二時より一時迄で休息、一時より二時迄で、機
械工場に入つて工事をなし、二時より三時迄で操練、六時より七時迄で家族と團樂、七時より八
時まで、軍官を集めて講演、八時より九時まで公文書閱覽、九時軍隊檢閲、十時臥床。毎日この
日課を缺かさず繰返し、以て自ら省内文武官の師表として、大いにその精勵振りを發揮して見せ
た。

當時開封を訪へる人の感想談の一節に左記の如きものがある。當時の馮督軍の施政振りにおいて、

最も特色ある點をうかゞふに足る。

開封の停車場を下つて、南門から城内に入るに、門の上の額には「提起精神」の四字が書いてあり、門の左右にも、大字がある。左の方には「勞工勞農」あり、右の方には「自治自強」ある。門を入つて行くに、門洞から、大街小巷、苟も壁の空白のある所、大字の格言や、又は鉅幅の圖畫を寫してない所はなく、その多くは纏足廢止と禁烟禁酒を勸めるものである。また店の門首には何處でも、皆な小さい黒板を掲げて、數句の格言を記し、阿片は禁絶、娼妓は禁絶、辦子も嚴禁、全城殆んど一つの新式學校に化した感がある。城内に一つの舞臺があるが、舊式の演劇をやらず、主として教育活動寫眞を見せてゐる。夜の市は悉く朝の市に改まり、夜の十時には市中殆んど歩く人がない。督軍署の大門には左右に大字があつて、左に曰く「早起」右に曰く「奮闘」也。それから中の大堂へはいるに左には「民生之不易、禍至之無日、戒懼之不可以怠」右には「民生在勤、勤則不匱」あり、又後廊の壁上には「官吏軍人の食する所、皆な民の脂膏ならざるはなし、これに報ぜん」を心せよ」の意味の掲文がある。又曰く「督軍不可爲毒菌」也。蓋し督軍も毒菌、音相通するをこつて格言にしたものである……

當時の馮玉祥はまだソウエト・ロシアに接近するに至らず、従つてボリシエウイズムの感化を受けたこともない。しかもなほ彼は當時において、已に「勞工勞農」の標語を掲げ、また宣傳上手

のボリシエウイキーをして、三舎を避けしむるが如き目醒ましい宣傳術の技巧に凄腕を振るつた。

馮玉祥の河南督軍時代における「善政」の一つとして特筆すべきは趙倜の財産沒收であらう。今日で云へば「逆産沒收」云ふのであるが、その頃まだ共產主義も、はた三民主義も彼のあたまにはいつて居なかつた時である。しかもなほ且つ趙倜家産の沒收に於て驚くべき「赤い手腕」をふるつた。

即ち馮玉祥は趙軍を破つて、河南の實權を握るや、遺産整理處を設けて、趙氏家産の沒收に着手した。先づ學院門における趙倜の花園において、現金一百三十萬元を抑へ、次いで督軍署において十餘萬元、趙の私宅において、銀器その他時價千餘元の什器を取り上げ、その後更らに靈玉、汝南等の各地における趙家の私産を沒收した。而して沒收物の一部は開封及び鄭州等各地における戦争の被害民救助にあて、一部は各官廳の戦後における善後處置費に用ひ、他の一部を以て教育事業振興の經費に充當し、以て省民をして「新督軍快心の舉」にした、えしめたものである。

馮督軍の逸話の一つは吳佩孚の壽禮にサイダー水を贈つたことである。その頃洛陽にあつた吳佩孚は五十の壽を祝つた。始め吳佩孚は時節柄禮物の寄贈を辭退したのであるが、當時の吳佩孚はその勢威四方を壓し、飛ぶ鳥も落さんばかりであつたので、各方面の官吏や軍人は、競つて吳邸に參

じ、福録壽喜の四等に分ち、五百元、三百元、一百元より最少五十元に至る禮物を献じ、吳邸では専門の係員がその受付にあたる云ふさわざりであつた。もこ湖北財政所長魏聯芳の如きは、更らに六萬元を以て、黄金の壽星五尊を購ひ、吳佩孚のために壽を祝つた。總統代表袁熙のもたらした禮物は文房四寶であつたこのこ。王士珍は特に人を遣して、名馬一匹を贈り、駿足の逸物、以て驥才千里、前程無限の意を表した。然るにこの日馮玉祥の吳佩孚に贈つたところのものは何にか云へば、わづかにサイダー水一瓶以て酒に代へ、且つ、それに手紙を添へて「軍人禁酒」の希望を述べた。サイダー一瓶の壽禮はまことに未曾有のこ、これは云ふまでもなく彼が基督教徒として禁酒主義からやつたこであらうが、また同時にこの一事は彼がその頃已に吳佩孚の下風に立つを潔しこしなかつた證左こも見られる。當時の吳佩孚は酒を好み、行軍に際しても酒甕を携へたものである。従つて吳に對する「軍人禁酒」の勸告は、甚だしい皮肉こ見られたのである。

ある日、馮新督軍が開封市中を巡回した時一兵卒が巻煙草をくわへながら散歩するのを發見した。馮督軍は早速この兵卒をひきこめて「禁烟令を犯すは怪しからぬ」こ叱責したこ、兵卒は、「禁烟の命令なき聞いたこがありません」こ答へてそしらぬ顔であつた。平素嚴格な馮督軍のこ、この横柄なる兵卒に對して、如何なる嚴罰を加へるだらうかこ、隨員が固唾をのんで觀てるたこ

ろ、馮督軍は意外にも態度を軟らけ「命令の徹底せぬは督軍自身の罪である。今後は斷じて許さぬが、今お前がくわへてる烟草一本だけは仕方がない。それを喫ひ盡すまでこ、で待つてゐる……」こして、督軍自ら一兵卒が巻煙草一本喫ひ終るまではり番した。

馮督軍は着任の當初警察署長鹿鍾麟をして戒嚴司令張之江、開封知事任右民こ連名を以て、左の如き嚴刻なる布告を發せしめた。

無職の閑人、解散された軍兵は最も騷擾を起しやすい危険分子である。而して遊廓妓館は最も匪賊のひそみやすい場所である。故に特に嚴重にこれが驅逐掃除を行はざれば、地方を安んじ、風紀を保つこが出来ない。すべて武装を解除された兵、落伍逃亡兵等は二日以内に省外退去を命ずる。期限後捕へられたものは、一切訊問なく直ちに銃殺の刑に處す。娼妓及び無賴の徒は三日限り省境を退出すべく、徘徊を許さず。

まことに馮玉祥式の嚴しい命令である。その結果、開封の妓館第四巷、會館胡同の如きは重く門扉を鎖し、昨日まではなやかだつた花街も、今日は火の消えた様にさびれてしまふこ云ふありさまであつた。

馮玉祥はかくして、大いに禁烟、禁酒、妓女解放、綿服獎勵等の「消極的善政」を勵行したが、同時に「積極的善政」においても、目ざましい手腕を揮つた。即ち道路を修繕する。學校を増設する。圖書館を設ける。公園を開く。廣場や道路に樹木を植ゑる。馮玉祥の行くところ、都市村落すべてその面目を一新する云ふ勢ひであつた。かくして馮督軍の施政はすべて「善政」ならざるはない。しかしそのやり方があまりに急激に流れ、突飛に失したため、省内一般の慣習を打破し、また、經濟界に深刻な影響を及ぼした。殊に廢娼酒煙禁止の結果、町々の夜から紅燈が取り除かれる、村々の宵から笑聲が絶える。馮玉祥の善政治下は半面において不景氣を伴ふ。沈んだ氣分になる。火の消えたやうになる……云ふので、方々からクリスチャン・ヂエネラルに對して、不平の聲がおこつて來たのは當然のことである。

十一

當時、洛陽、即ち同じ河南省内に駐在してゐた吳佩孚は、日々その目の前に、馮玉祥の突飛きわる督軍振りを見せつけられた。元來保守主義で一貫し、舊い學問であたまをかためた吳佩孚のこゝろ、クリスチャン・ヂエネラルのやることは、すべて彼の氣に合ふ筈がない。殊に、馮玉祥が官紀肅振を名として、一時に八十餘名の縣知事を更迭したこゝろは、益々洛陽をして開封に對する反感を強うせしめた。而して民國十一年の夏、馮玉祥が二萬の新兵を募集して軍備擴張を企てたこゝろは、

吳佩孚をしてつひに馮玉祥逐出しの決意をなさしめるに至つた。同年の秋、鄭州において馮玉祥軍と張福來(吳佩孚の部下)軍とが對峙状態を呈し、河南省内の風雲はいよゝゝ急を告げた。一方吳佩孚は中央政府に向つて、頻りに馮玉祥の河南督軍免職を督促した。しかるに黎元洪總統は容易に同意を與へず、「余の任に在る間、斷じて應ぜぬ。強いてならば、吳氏自ら總統となつて、これを決行すべし」にて強硬に反對したが、當時吳佩孚の勢力に對しては何人も抗争することが出來ず、馮玉祥自身も亦、吳佩孚と對抗するの不利なるを察して、腰を折るこゝろなり、同年十一月一日、即ち馮玉祥の河南督軍就任後、僅かに半年にして、吳佩孚の要求通り、馮玉祥は陸軍檢閱使に祭り上げられ、同時に河南督軍職が裁撤され、張福來が河南督軍善後事宜にあけられた。

馮玉祥は大勢不利を見た場合、巧みに對手と衝突するを避け「長いものには巻かれる」の術を心得て居る。思ふに武穴唱和に際して、大膽にも段祺瑞にたてつき、一時非常に窮地に陥つた時の苦い經驗が、彼をして輕舉妄動を慎しませ、また、時に腰を屈し、恥を忍ぶの修養をつましましたのであらう。

陸軍檢閱使にまつりあけられた馮玉祥は河南を去るに當つて、毫も不平の色をあらはさず、却つて頗る滿悅の態で、省民慰安の布告を發し、また副官二名を鄭州に派して張福來歡迎の意を表するなき、大いに寛容の度量を見せた。

馮玉祥は十一月三日、開封を發し、北上の途次、保定に立ち寄つて、曹錕を訪ひ「自分はこれから北京の北苑に移駐し、専心練兵する外、他の職務には一切就かず、萬事貴下の命令に従ふ決心である」を告げて、あくまで謙讓の態度に出で、巧みに曹錕の感情を融和し、却て、彼をして馮の苦衷に同情せしめた。馮玉祥は直隸派の二大巨頭のうち、吳佩孚を敵にしても、曹錕を味方としておけば、また再び浮びあがる機會があらうを考へたのであらう。

十一月十日午前九時、陸軍檢閱使馮玉祥は北京の西站に着した。汽車から下りるや、出迎への友人に向つて「余は元來學識淺く、國家の大事に當る資格がない。この際、一時軍籍を去つて、三年ばかり米國に留學して見たい」と語り、どこまでも謙讓である。馮玉祥は失意の時に外遊を思ひ立つを常とする。民國十一年秋の米國留學はつひに事實ならなかつたけれども、これを以て當時の彼が如何に失意であつたかを推すことが出来るのである。

馮玉祥の北上に前後して、その配下の第十一師の北京移駐輸送が行はれたが、その際吳佩孚は馮の新募兵をその途中において抑留せんとしたことがある。しかし馮玉祥は豫めこれを察知し、新兵に舊兵の旗をたてさせて、先行北上せしめ、舊兵はそれに續かせ、漸やく全軍を保全して、北京に移駐するを得た。

馮玉祥の新たに任せられた陸軍檢閱使の職は、地位こそ高いが、何等の實權なく、且つその所屬

軍隊の軍費を絞り出すべき地盤を奪はれたことは、馮玉祥にまつて、何より大なる打撃であつた。然るに吳佩孚の馮に對する壓迫の手は、その北京に來てから後もゆるまず。中央政府からは馮軍に對し、武器、軍費、糧食、衣服等の補給を出し溢り、手をかへ、品をかへて對馮壓迫を續けた。要するに當時の曹錕や吳佩孚等の意圖は、馮玉祥を陸軍檢閱使の空位にまつりあげ、その軍隊の補給口を塞ぎ、以てその實力の自然消滅をはかつたものである。しかし馮玉祥が窮すれば窮するほど、不滿を抱く、陰謀を企てるは、必然の勢で、一師三旅の兵力を有し乍ら、その地盤を奪はれ、補給の道を失つた馮玉祥は帝都の中央における最も危険なる武力、即ち「大總統脚下の爆彈」になつた。果然この「爆彈」は先づ黎元洪を威嚇し、つひに黎をして都落ちの末路に會せしむるに至つた。

民國十二年の春から、夏にかけて、直隸派は大總統黎元洪驅逐運動を始め、六月に入り、北京の軍警及び暴民を操縦し、總統府に向つて、種々の難題を持ちかけさせた。六月九日、北京巡警は保安隊を除き、全部黎總統に對し、未拂給料を要求して、同盟罷業し、十日更らに直隸派の狩り集めた公民團を稱する苦力の一團數百名は黎總統の私邸に押寄せ、その退位を迫り、十一日王懷慶が即日軍警の經費支給を要求するに至り、市中の形勢は刻々緊張して來た。この危局に直面して最初中立の態度をとり、徐かに潮時を見てゐた馮玉祥は、十三日愈々機熟すこなし、決然立つて黎總統に、即時北京退去を迫り、聽かずば直ちに兵を率ゐて、入城すべしを威嚇した。

當時北京の周圍において最も有力なる軍隊をもつてゐたのは馮玉祥である。北京の治安は主として彼の掌中にあつたのである。然るに馮軍自ら起つて、大總統驅逐の急先鋒となつたのである。それまで大總統の椅子にかざりつゝいてゐた黎元洪も、こゝに至つて、形勢の非なるを悟り、同日午後一時二十分、臨時列車で、急遽天津に落ちた。

馮玉祥はいつでもその事をあぐるに當り、必らず、一、最初は態度を曖昧にし、以て、二、對手をして油断せしめ、三、潮時を見て起ち、四、一度起つや疾風迅雷の勢を以て動き、以て一舉に、五、對手の死命を制する。民國十二年六月の黎元洪驅逐は馮玉祥が最もその筋書通りにその役割を演じた政變幕の一つである。

十二

黎元洪放逐の直後、曹錕が賄選によつて大總統となつたこゝから、黎を逐へる馮玉祥は必然賄選にも關係があつたこと見られてゐる。しかし馮は事件の後、頗りにこの事を氣にかけ、人をして當時の事情を左の如く説明せしめ、自分は黎元洪の放逐にも、また曹錕賄選にも直接關係をもたなかつたこと云ふてゐる。即ち、當時の事情説明なるものによるに

事件の主謀者は徐世昌である。徐は先づ當時北京警察司令であつた王懷慶をして馮玉祥に對し、「軍隊警察ともに糧食及び給料の支給を受けることが出来ない。この際よろしく軍警聯合會を組

織して、聯合勢力により、軍費の支給を要求するに如かず」この相談をもちかけさせたのが、そもく事の發端であつた。當時馮玉祥配下の軍隊は、警察以上に窮乏を極めてゐたので、馮玉祥はまんま徐世昌の悪計にのせられ、王懷慶の提議に應じ、蔣鴻遇をして他の軍警代表もこゝに總統府に入つて黎元洪に謁し、軍隊及び警察の苦境を面述せしめた。然るに、何ぞ知らん、王懷慶は既に事前に黎元洪を訪ねて「今次のこゝは全く馮玉祥の計るこゝで、彼は軍費要求を名にして、實は不軌を企てつゝあるのである。王自身は馮等と何等の關係をもたない」を密告し、ひそり馮玉祥をわるものにしてしまつた。こゝにおいて、黎元洪は軍警代表を引見するや、机を拍いて蔣を指し「余は已に貴下等が余を逐ひ出すために來たこゝを知つてゐる」を痛罵した。蔣は恐懼して引き下り、歸つてこのこゝを馮玉祥に報告した。馮玉祥は始めて王懷慶の爲めにのせられたことを知つて大いに憤慨し、その滯京の兵士を悉く南苑に移し、自分もこゝに南苑に引つこもり再び北京に來なかつた。こゝにおいて曹錕一派の直隸派策士は無賴漢を駈り出して公府を圍み、交通を遮断し、大總統を逐ひ、印章を奪ひ、しかも馮玉祥の名を通電に連ね、馮をして無實の罪を蒙らしめた。徐世昌はこれを「一計三賢を害ふ」を名づけ、一舉にして黎、曹、馮の三人を同じ穴に陥したのである……………

こゝ云ふのである。しかし、馮玉祥が故意か無意識か、いづれにしても、黎元洪放逐の幕における第一

の役者であつたことは、否まれぬ事實である。しかし黎に代つて大總統となつた曹錕は、馮に最もよからぬ吳佩孚の親分である。曹錕大總統の下における馮玉祥は益々不平多く、従つて彼は大總統更迭の後も依然「大總統脚下の爆弾」ミして残つたのである。

▲馮玉祥の誕生日？▼

馮玉祥は本年四十八歳であるが、その生れた日は誰れも知つてゐない。それは彼が舊官僚の悪習打破を唱へ、嘗つて誕生祝をしたことがないからである。

三 北京クーデター

吳佩孚・馮玉祥・班師回京的一幕・兩統幽閉の悲劇
・段祺瑞擁戴か孫文擔ぎあけか・委員制政府建設の
秘計・老段の出蘆・奉軍の京畿侵入・油揚鳶にさら
はる・孫文の北上より臨終まで・民國革命の新エポ
ーク

民國十三年七月末、私は、支那革命の新らしき展開に對し、多大の興味を抱いて北京に來た。そして私が北京到着の直後、匆忙にこりまぎれて未だ行李を解かぬ中に、第二次奉直戰爭が勃發し、間もなく、直隸派の總帥吳佩孚は洛陽より、北京に入り、その配下の全軍に動員を命じた。吳佩孚は十三年九月十七日、自ら討逆軍總司令となり、第一軍は彭壽華、第二軍は王懷慶、第三軍は馮玉祥、これを率ゐる、第一軍は山海關に向ひ、第二軍及び第三軍は熱河方面に進發することゝなつた。私は吳佩孚の到京匆匆その本營を訪ふたが、將軍の意氣頗る軒昂、恰かも戦はずして奉天軍を呑むの概があつた。この日私に吳佩孚との會見記は翌二十一日の大毎紙上に掲載された。これを摘録するに左の如くである。

× × × × × × ×

民國十三年九月二十日午前七時余は吳佩孚氏の本營を訪問した。本營は國務院内奥まつた一大堂屋四照堂にあり、到るころ警備兵が嚴然として警戒線を張り、少年兵が所在に奔走せるが特に目立つ。屋内に入れば參謀將校も露營式板床を用ひ、戦時氣分澎湃としてゐる。番兵の立てる門を潜るこゝ十度で總司令官室に案内された。室内を眺むれば粗末なテーブルの上には赤丸を付けた地圖がある。參謀官居並び、吳氏は大將服を着けたるも、その袖口は破れ、ちつとも邊幅を飾らず、自

ら筆を執りながら、軍令に署名し、又戦線より来る幾多の電報を閲讀して朝まだきから多忙を極めつゝあるところへ、余は飛び込んだのである。吳氏は頗る好機嫌で始終ニコニコ微笑を湛へつゝ、余の質問に答ふ。余は先づ兵馬控億軍務多忙の折柄であるが、以下六個の質問を許され度しこ切り出した。

【問】 余は久しく露國にあり、革命後の露國政變を一々目撃した。思ふにソウエート政府の基礎鞏固なるを得たるものは主としてレーニンの行つた徹底せる中央集權政策の結果である。將軍今北京に來る。その使命多々あるならんも、その主なる目的は蓋し支那四百余州の統一にあらん。

【答】 地方分權もまた必要の場合あり。國政の大綱はこれを中央に集中すべきも、督軍省長等の權限はある程度において、地方自治に任すを便す。要は國政の本末區別を誤らず、その運用の圓滑をはかるにある。

吳氏の返答が軍參謀によつて通譯される間、吳氏は筆を執つて、軍令に署名し、報告を読み、寸暇なし。しかも通譯が終るに、直ちに微笑をたへつゝ、極めて軟らかな語調で語る。

【問】 國家の難局を打開するの人は將軍を措いて他になしは十目の見て疑はざるころ。然るに將軍はこの危急の秋に際して悠悠洛陽にありて動かさず。大總統の督促三度に及んで初めて入京された。北京の一新聞は將軍の入京の遲きを痛歎した。將軍は何故今少し早く入京され、時局の紛



四 照 堂 吳 佩 孚 照 像

糾を未然に防止するの決断に出でられざりしや。

【答】 余は時機少しもおくれたと思はぬ。もし余り早く入京せば、世人はそれがため動亂が起つたといふであらう。余は實に時機の熱せるを見て來たのである。近く和平解決の曉に、人は余の北上のため、動亂が平定したといふであらう。

【問】 勞農露國巨頭レーニン嘗つて余に、新らしき家を建てるものは、先づ古い家を根底より破壊しなければならぬと語つたことがある。將軍今や新民國を建設されんす。そは舊支那を修理して改造されるのか、或は先づ舊支那を根底から破壊して、然る後別個の新支那を建設されるか。

【答】 (將軍は余の第三問に對し、筆を執つて白紙に「舊慣に依つて而してこれを修理す」の論語の一節を書して余に與へ) 支那の歴史に照して見るに、新文化は常に舊來の文化を基礎とし、周は殷、殷は夏の文化を採つたものである。支那の建設は三百年毎に改めるを常として來たけれども、その間にも幾千年變らず終始一貫した支那文化の本體が有る。破壊すべきものは破壊するも、貽してもつて新らしき建設に用ふべきものは總てこれを保存し、利用しなければならぬ。禮、義、仁、智の四本はその最も大切なるものである。

【問】 世界大戦争終つて既に六年、歐洲における列強争議も最近のロンドン會議にて一段落を告げた。ここにおいて歐米列強は近くその爪牙を遠く東洋の天地に伸ばさんとする勢歴然たるものが

ある。かゝる際東洋隨一の大國たる貴國が内亂状態にあるはあたかも列國のために東洋干涉の好機會を與へるものにあらざるか。われ等日本人の最も深く憂慮するところはこの點である。將來の歐米列強對策は如何。

【答】 中央政府は國內和平の維持のために百方努力したのであるが、逆徒等横暴にしてつひに今日の事態を見るに至つた。しかし余は日ならずして、動亂を平定し、列強干涉の余地なからしめんことを期してゐるものである。

【問】 將軍千軍萬馬陣頭にあつて彈丸飛雨の間を馳驅されること多年。將軍陣中生死の間に處しての信念如何。

【答】 余の信念は孔子の教へたる意を正しうするにある。然らば何を恐れん。余の宗教は各宗教の眞體を合せて包含するも、何れの宗教にも遍するものではない。

【問】 戰爭終熄し、内亂平定した曉、日支善隣の好誼愈々密にして、通商關係の益々發展せんことを希望してやまない。將軍の高見如何。

【答】 (將軍頗る眞摯なる態度で)東三省を平定した曉、滿洲在住日本人の生命財産の保護のために最善の努力を盡すであらう。十九日芳澤公使も話した通り、東三省はこれを民國四五年頃の舊状態に恢復せしむる考である。日本にしても馬賊の類を談するよりも士大夫と士大夫との間に

おいて談するを得策とするであらう。われ等は日本人が支那において、合理的經濟協力の精神をもつて、富源の開拓にあたらんことを希望してやまない。

會談四十分、將軍に送られて、室を出づれば、向ふ側の應接室には内外の訪客參集し、幕を張れる隣室には參謀官等が軍議作戰に餘念がない。

吳佩孚は風格高くして清廉、操守堅くして剛直、まことに支那近代稀れに見る武將である。この點彼の味方も敵も認めて疑はない。しかし惜しいことには、倨傲自尊のあまり、敵を侮る癖がある。當時馮玉祥の態度の怪しかったことは吳佩孚もまたよく知つてゐたところである。またそれについて色々吳に注進するものも少なくなかつた。然るに傲岸なる彼は、地盤を奪はれた馮玉祥は、爪をこられた鷹の如く、もはや寝がへりを打つ力もなしと見くびり、曾て「馮玉祥は軀幹巨大なれども膽豆の如し、余曾て彼を最前線に任命したことなし」と傲語したこともあり、馮に對しては警戒甚だ不用意を極めた。然るに四萬の兵を擁せる馮玉祥に對し、これを養ふべき地盤を與へずして、北京に移駐せしめたことは、結局國都の城下に飢えたる鷹を放ちたるが如きもの、また「大總統脚下の爆彈」云はれたのも、そこにあつたのである。直隸派は黎元洪逐ひ出しの幕には、巧みにこの「爆彈」を利用し得たが、第二奉直戰爭に際しては自らこの「爆彈」のために自滅の運命に陥つた。

第二次奉直戦争の當初、馮玉祥は密かに、親書を曹錕と吳佩孚に送り、干戈を動かすの非なるを陳べたことがあつた。然るに計らずも原封送り返へされ、親書の上には吳の自筆で、「言葉を慎め（小説話）」の三字が認めてあつた。馮の憤悶想ふべきである。その後吳佩孚自ら洛陽より入京するや、頻りに馮玉祥に向つてその出動を督促し、且つ密かに胡景翼をして、馮軍の監視に當らしめ、特に胡を援軍第二路司令に任じ、且つ彼に鞏縣兵工廠製の機關銃五十挺を給し、「貴下はこの機關銃五十挺をもつて、張作霖討伐に従ひ、討ち終つたならば、その儘手許に残して置かれよ。いま一度役に立つところがあるから」この内命を下した。之れ、即ち孔明が馬岱を留め置き、以て魏延を斬るの錦囊の妙計に外ならなかつたのである。

吳佩孚は不用意にも胡景翼の一軍をもつてこれに備ふれば、馮玉祥は到底事を擧げ得ないごなし十月十日の双十節を卜して、自ら總豫備隊を率ゐ、山海關正面に向つて出征した。然るに何ぞ知らん、胡は元來同盟會の革命黨員である。且つ先年馮玉祥に隨ひ、陝西より關を出で、轉戦し、舊交淺からず。即ち胡は吳の言を一々馮に告げた。馮はこゝに於て自衛の上からも、戈を倒にして吳佩孚に當らねばならぬ羽目に陥つたのである。

かくして馮玉祥は密かに直隸派倒潰の計劃を廻らし、その機會を待つてゐた。たゞ細心なる彼は大事をこつて容易に事を發せず。先づ單獨行動の危險なるを顧慮して、ひそかに直隸派の武將中に

その反直運動の味方を物色し、つひに前記の胡景翼をかたらひ、また北京警備司令孫岳を説いて、味方になすを得た。この二人はともに同盟會の革命黨員であつて、兩者と馮との提携には、國民黨の策動も亦與つて力があつたものご考へられる。而してこれと同時に馮玉祥の反直計劃に對しては安福派の策士も響應し、また彼等は段祺瑞を仲介者におしたて、馮玉祥と張作霖との默契をつけるごにも成功した。

かくして馮玉祥は大總統の膝元にあつて、北京治安の重任にある警備司令孫岳及び北京の郊外に有力なる部隊を率ゐてゐた胡景翼を味方に抱き込み、更らに敵側なる奉天派ごも、わたりをつけるごが出来た。加ふるに山海關の戰機甜にて、吳佩孚はその信賴する兵力の全部をあけて、この正面に集中し、後顧の餘裕を有せぬ。好機は到來した。萬端の手配はぬかりなく整つた。

馮玉祥はこゝに決然洞ヶ峠を下り、突如戈を逆にして、馬首を回らし、熱河より班師回京を決行した。

二

十月の半頃、山海關方面の戦局はいよく決戦期に入つた。吳佩孚は馮玉祥に向つて、速かに側面より奉天軍牽制の行動を起さんごを要求したが、馮は毫も吳の命令に服従する模様がない。これがために山海關における直軍の戦況漸やく不利に傾いた。こゝにおいて吳佩孚は大勢のいよく

非なるを察し、十月十八日、曹錕大總統にあて、この際一時總退却を行ひ、先づ馮玉祥を處分して、然る後に後圖を策せんことを電請した。しかし、この直隸派の存亡に關する吳佩孚の急電は大總統周圍のものが抑へて、これを曹錕に見せず、吳佩孚は許可の返電がないので、やむなく山海關方面の攻撃を續けてゐた。

かくして直軍の形勢益々非なるを觀てゐた馮玉祥は、いよく機會の熟せるを見てつひに意を決し、十月二十二日、熱河の灤平から、晝夜兼行の強行軍で南下し、北苑にその主力を集中し、同地において胡景翼、孫岳、米振標等一切の手筈を定め、夜半より行動をおこし、二十三日未明安定門より軍を入れ、已に城内に潜入せしめておいた蔣鴻遇の手兵及び孫岳の一族と協同し、北京占領の行動に着手した。

馮玉祥にこの計劃ありこの消息は、その前々日私の耳にもはいつた。外國人すらこれを探知してゐたにも係らず、大總統曹錕は、少しもこれに氣づかず、たゞ吳佩孚から捷報の到るを待つてゐた……云ふはまことに驚ろくべきことである。

いよく二十三日がその日……この豫報を握つた私は未明、自動車をかつて、北京市内を駆け廻つた。六時頃からさうこよりさなく左腕に「死を誓つて國を救ふ。民を擾さず、眞に民を愛す」と書せる圓き白布をぬひつけた武裝兵が現はれ、先づ朝陽門と西直門を閉鎖し、城壁に大砲を引揚げ、各

停車場、電信局、電話局等を占領し、やがて大總統府を包圍した。大通りの辻々には左の布告がはりつけられてゐる。

(布告の一) 民國十有三年、干戈擾亂一再ならずして士農工商各業の受くる損害は甚大である。しかもその禍の源は何人の爲す所ぞ。殊に本年は干害に繼ぐに水災を以てし、各家疲弊して、十室九空の慘狀を呈せるに際し、無辜の同胞をして再び兵災に罹らしめんとは何事ぞ。余はここに和平停戦を唱道し、部下を率ゐて北京に歸り、國內の賢豪を推して共に内争の解決に盡さん。市中の商民は各安堵して驚くの要なく、外人の生命財産は一層安全に保護すべし。若し謠言を捏造し事端を發生する如きものあらば、逮捕嚴罰すべし。ここに布告を發し、商民の敬聽を佈ぐ。

(布告の二) 民國九年以來、無名の内亂屢々おこり、今又東南及び東北に亂あり。全國動搖し、萬骨枯る。加ふるに本年は水害旱魃あり、天災人禍、一時に到る。玉祥等日夜泣いて、これを憂ひ停戦を主張せん。今日決然兵を北京にかへした。われ等一味の各軍はここに聯合して、別に中華國民軍を組織し、國家の爲めに盡さんことを誓ふ。もし戰を好み、國をそこなふものあれば本軍は戦期短縮のため、戈をこつてたつべし。全軍は北京に集中を命ずる。北京は各友邦の使館のあるところ、その秩序の維持は余その責を負ふ。政治善後の問題については、全國の賢達之士

において、直ちに立つて補救の道を講じ、更新の局を開かんことを請ふ。

第二の布告には馮玉祥の外、胡景翼、孫岳、米振標、岳維峻、李紀才、鄧寶之、李虎臣、李鳴鐘、張之江、鹿鍾麟、劉郁芳、宋哲元、孫連仲、孫良臣、蔣鴻遇が連署してゐる。

市民は布告の前に集まつて、色々の噂をたてゝゐる。曰く、布告中の「賢豪」は段祺瑞を指したものであらう。曰く、孫岳が加擔してゐるからには、曹錕の身邊には危険があるまい……

やがて總統府の周圍、その他各要所には土囊が高く築きあげられ、機關銃が据え付けられる……晝頃に至つて、城内の國民軍はいよく増加し、前夜來、入城せるもの二旅一連、これに警備司令孫岳軍が加はつたので、總統府の衛兵一個旅は難なく、武装を解かれ、曹錕は監禁状態におかれた。やがて馮玉祥はその參謀長石敬亭をして、總督府に入り、曹錕に向つて、一、停戦令を發すべし。二、人を派して戦線の諸隊を收束すべし。三、黨派系統の別を問はず、全國大會を召集して、國是を決すべし……この三大要求を提出せしめた。これに對し、曹錕は馮玉祥にあて、左の親書を送り、只管その苦衷を訴へ一日も早く監禁状態から脱して下野引退せんことを願つた。

弟(馮)は軍を回し、停戦を主張す。賛歎にたえず。余は軍務に従ふこと三十年。各地方を督すること三十年。曩に保定に退いて餘生を樂しまんじしたが、昨年黎元洪退くに及んで、總統たらんことを勧められた。然し、吳佩孚一人頼りに之に反對したが、弟は王承斌と共に、切に勧めたので余はつひに就任した。今秋盧永祥の兵を起すや、余は先づ弟に計り、弟が彼を以て、叛逆者となり、直ちに討伐を主張したので、余は決然討伐令を下した。その後間もなく張作霖起つとの報至るや、弟は奮然色を變へ、この佞奸を亡ぼすに非らざれば不可なり云ひ、吳佩孚も亦これに賛同したので、余は始めて奉天討伐令を下した。余は當時から和平主義であつた。今弟の停戦主張を聞く。勿論異議なし。余は昨年弟の招來によつて入京せり。今又弟に送られて出京せんことを弟の寸意如何。

苟も大總統ともあらうもの、また何たる苦しい弱音を吐いたものであらう。但しこの信書の眞偽については種々の説があつて、一説には吳佩孚派が曹錕の苦衷を察し、反馮宣傳のために捏造したものだとも傳へられた。或はさうかも知れぬ。

曹錕はその日から中海懷仁堂の奥深くに幽閉の身となつた。

この日馮玉祥は鹿鍾麟を京畿警備總司令に任じ、外交團主席に向つて、和平運動の趣旨を通告し外人生命財産の保護を聲約した。

かくして、北京の占領を終るや、馮玉祥は正式に國民軍を組織し、自らその總司令となり、胡景翼を副司令に任じた。次いで警備總司令鹿鍾麟に命じて所謂「君側の奸」を稱する高凌蔚、顧維鈞、王毓芝、吳毓麟、李彥青、周夢賢、張志譚、王克敏、曹銳、師景雲等の行動を監視し、李

計劃があつたか否か、私は事變の當初からこれを大なる疑問としてゐた。

十月二十五日、即ちクーデターの翌々日、私は幾多の警戒線をくぐり、北苑の兵舎に馮玉祥を訪ふた。それは云ふまでもなく馮の班師回京の目的の那邊にあるかを叩くためであつた。この日の訪問は私の馮玉祥に會つた最初の機會である。北苑兵舎の一隅で彼はその肥滿せる巨軀をおこして握手を交はし、私の質問に對して、左の如く答へた。

【問】 今回の事を舉ぐるに當り、張作霖を諒解ありしや。

【答】 絶對になし。もし、張作霖を諒解があつたならば、始めから出征しなかつた筈である。已に出征して、熱河の奥に入つたが、將卒衣食足らず、天寒くして士氣沮喪し、戰意全くなかつたので已むを得ず、こゝに和平を主張するに至つたのである。

【問】 貴下の和平提唱の賛成者は誰か。

【答】 米振標、王承斌、胡景翼等先づ賛成し、ついで孫岳も加はり、王懷慶は熱河にあつて、われ等と聯絡をこつてゐる。

【問】 貴下の布告中、「賢達之士」とあるは段祺瑞を指すか。

【答】 特に一個人を指したものでない。存朝在野のいづれを問はず、政治に經驗ある諸先輩を總括的に指したのである。

【問】 天津に使者を派したと云ふは事實か。

【答】 特に正式の使者は出してない。

【問】 段祺瑞にして、もし北京に來らば、彼をして曹錕に代らしめるか。

【答】 段氏はしかく速急には入京しないであらう。曹錕の地位は國民會議によつて決すべく、國民會議に列する者は段一人ではない。従つて、今後のことは未だ何も豫斷を下し難い。

【問】 通電の反響如何。山西の閻錫山、山東の鄭士琦から賛成の電をよせたと云ふは事實か。

【答】 電信不通にて、地方の態度はまだ不明である。但し山西、山東、陝西、湖南、廣東、廣西、雲南、貴州各省の北京駐在代表は已に賛意を表した。湖北、河南、江蘇、浙江、福建、四川、江西からはまだ返答に接しない。

【問】 奉天より態度表示の來電ありしや。

【答】 まだない。

【問】 國民軍の目的如何。

【答】 國民軍は和を主とし、戰を排する軍である。吳佩孚も張作霖も戰を主とすれば國民軍は兩者を討つべく、もしわれ等に賛成すれば、ともに友軍として遇するであらう。

【問】 吳佩孚の態度如何。

【答】 何とも云へぬ。

【問】 吳佩孚の前途如何。

【答】 吳佩孚の配下には戦闘力を有する兵力五六萬人ある。吳にして余等に反対せんか、奉軍は極力攻撃を續くべく、背後には國民軍あり、吳は没落の外なからう。

【問】 大總統の地位はこれを支持する考か、或は別個の元首を推戴するか。

【答】 當然大總統を支持する。

【問】 曹錕の態度如何。

【答】 さきに異議をはさみしも、今余等に賛成し、和平令を下した。總統府と國民軍の間にはも早や何等意見の衝突なし。

【問】 曹錕の衛兵は如何にせしや。

【答】 武装を解除した。

【問】 國會、國憲、内閣、總統府等中央機關の處置如何。

【答】 國民會議の決をまつて決せん。なほ余は今明中に入京する考である。

北京クーデターの目的が、最初から單に段祺瑞の推戴にありしや、否や。この問題に對する馮玉祥の答辯は、以上の如く、頗る曖昧なものであつた。むしろいづれか云へば否定的であつた。こ

れによつて察するも、段祺瑞は決して馮玉祥意中の元首候補者でなかつたことが明瞭である。然らば彼は曹錕に代へるに何人を以てせんとしたか。最近に至つて國民軍方面から發表された種々の資料を見るに、馮玉祥はあの當時、已に孫文を迎へて、革命の大成を期したのであると云ふ。然しこの説をこるゝすれば、馮玉祥が何のために、人を段祺瑞の許に派して、その出處を求めたか、わからなくなる。私は第一章において記せる如く、この問題を重要視し、親しく馮玉祥に會ふて、「民國十三年秋、總司令は班師回京、北京クーデターを執行された時、段祺瑞推戴運動と同時に、孫文氏に北上を促された。當時總司令意中の元首候補者は段、孫孰れであつたか」と尋ねて見た。而して馮玉祥はこれに對し「當時余等同志の目的は、孫文、段祺瑞その他の指導的人物を網羅した委員制政府を建設するにあつた。然るに事志違ひ、張作霖等の運動によつて、段祺瑞獨裁の執政政府の出現を見るに至つたのは、民國のためにかへすゝも不幸なことである」との明確なる答を與へ、北京クーデターの目的に關する一切の疑義に對して、一大斷定を下した。

四

クーデターの直後成立した新政府、即ち黃郛を總理とする攝行内閣は主として國民軍の武力に倚り、馮玉祥の勢力を背景としてたつたものである。従つてこの内閣の施政方針は、必然馮玉祥の政策をそのまゝ反映するものであらねばならなかつた。然らば黃郛内閣の施政は如何なる方針に向つ

て進んだか。

黄郛内閣はその成立の劈頭から極めて濃厚なる左傾色彩を發揮した。同内閣の大立物たる王正廷は外交總長就任の数日前、私が一日その寓居に訪ねて時局觀を問ふたのに對し、彼は「今回の内亂は新舊思想の衝突、即ち中央集權主義と地方分權主義との對抗で、民國初年來の政争の連續に外ならぬ。換言すれば私利に走る舊官僚を排して、義務觀念を主とする新人物がこつて變らんとする運動の結果である。吳佩孚は短所もあれど長所も亦多く、勇氣あり、信念強く、熱烈なる愛國者である。余は將軍を從來親しみ深い關係にあるが、しかし將軍の中央集權主義には、絶對に反對である。即ち余も亦馮玉祥の地方分權主義のために立つたのである」と答へた。しかしいよいよ政權を握つた後の黄郛や王正廷等は地方分權主義なき云ふなまぬるい政策にこまらうとせず、一足飛びに「赤化」革命の行程に向はんとした。而してその第一歩としてされる具体政策は清室追放である。民國十三年十一月五日、攝行内閣は清室優待條件修正令を發布した。その大要は左の如くである。

第一條 大清宣統皇帝は即日から永遠に皇帝の尊號を廢し、中華民國々民として、法律上の權利義務を享有す。

第二條 本條件修正後、民國政府は毎年清室のために五十萬元を支出し、また北京貧民工場を設立して滿洲旗族及び貧民を收容す。

第三條 清室は即日紫禁城を出で、自由に住所を撰擇することを得。但し、民國政府は充分保護の責を負ふ。

第四條 清室社稷の祭祀は民國政府法を設けて處置す。

第五條 清室の私産は完全に享有し得るも、一切の公産は政府においてこれを沒收す。

攝行内閣が前記の條令を發した當日、鹿鐘麟の率ゆる國民軍の一隊は紫禁城を包圍し、先づ守衛兵の武裝解除を行ひ、次いで宣統廢帝に向つて、皇城退去を要求した。辛亥革命以來十三年間、滿清朝廷三百年の名残をわづかに紫禁城の一隅にこめてゐた宣統廢帝溥儀氏、及びこれをこりまく清室の舊臣は、同日午後四時、國民軍の威嚇の下に、住みなれた皇城を脱け出し、ひき先づ攝政王府(醇親王邸)に逃れた。警察當局は市民に布告して、清室追放により、民國革命完成を告ぐとて、五色旗の掲揚を命じた。この宣統追放は前記曹錕總統の幽閉をあはせてこれを「兩統打倒」と稱し國民軍及び國民黨は國民革命のために凱歌を奏したのである。

當時國民軍及び攝行内閣は宣統帝追放の理由として「宣統廢帝は民國となつて後、なほ依然として皇帝の稱號を稱へ、國璽を有し、宮中の官吏を任命し、共和國の首都にあつて皇帝の存在を續けて來た。斯くの如きは不合理極まることであるのみならず、政變の起るたび毎に、滿清の遺臣や、時代錯誤の政治家が復辟の愚擧を思ひつくは、主として宣統廢帝を云ふ偶像があるからである。共

に民衆の生活を脅すものである」云ひ、十一月五日午前十時、即ち紫禁城包圍の直前、

- 一 即日宣統皇帝の稱號を廢すること。
- 一 紫禁城及び國璽は即刻國民軍の手に引渡すこと。
- 一 國民軍の命に従ふ時は尙ほ優遇を與へ、國民としての保護を與ふ。

以上の清室壓迫は云ふまでもなく新政府の左傾色彩を露骨に具体化したものであつた。而してこの突飛極まる暴舉は、外交團にも強き刺戟を與へ、それまでクーデターの成行を傍觀してゐた列國公使は、この事件に會して俄然その消極的態度を一變し、時局の推移に對して、警戒の眼をみはつた。殊に清室優遇條令は、前英國公使ジョルダンが主となり、列國公使も、もに袁世凱を説きふせて作らせた云ふ關係があるので、逸早く日英蘭三國公使から、外交部に向つて「民國危急の時に際し、清帝の自由を束縛する如き舉に出でたるは、まことに人道に反し、民國の名譽を毀損し、世界の同情を失ふものである。新政府のためにごらない」この警告を發し、以て支那政局の極端なる過激化を未然に防止しやうとした。

これよりさき十一月二十九日朝、私は宣統廢帝をその暫しの隠れ家たる十刹海裏の醇王府（父君醇親王の邸）に訪うた。折柄服の輕裝で、黒眼鏡を掛けた廢帝は、老臣鄭孝胥を従へて、私をそ

の居室に引見し、左の如く語られた。

余は久しい前から宮殿生活を厭ふて居た。清室優待條令の如きも、夙くから廢棄してもらいたい希望を持つて居た。なぜならば已に帝位を去つた者が、依然として宮殿裡に住むことは、共和政體の本義に反するのみならず、共和政治の運用に障害となるからである。

優待條令は今迄でのところ全く空文であつて、何等の實質を伴はなかつたものではあるが、しかしこれを條文通りに實行するにおいては、國民の負擔を加へることは甚だ少くないので、むしろその廢棄を希望してゐた次第である。

余は平素常に今迄のやうな重くしい環境の支配を受けることを心よく思はなかつた。この度の宮城退出も、實は余にまつて一大好機會であつたのである。こゝも（醇王府を指す）決して満足なところではない。余としてはもつと明るい世界に住みたいのである。事態が一段落を遂げたならば、總ての羈絆を脱却して、ひき先づ奉天に赴き、更に海外に留學する決心である。そして聖のやうな學徒の生涯を迎へたいと思ふてゐる。

この度馮將軍の余に對してまつた行動、たゞへば三時間内に出宮せよなき、武力を以て要求せる如きは、あまりに迫害強制的のものであつた。また優待條令の削減なき、如何なる手續をまつたものか、法律に違反した行動ではなからうか。但し、それ等の問題は余の問ふところではない。

寶物の處置に就いても民國政府の處置に一切を委ねる……

余は民國十二年四庫全書を上海で復版し、支那五千年來の文化を内外に宣傳しやうと考へたが、當時の内務總長程克の反對に會し、余の計劃は根本から破壊された。今度はまた馮玉祥の軍隊がこゝ、(醇王府)をこりまき、余の自由を束縛し、更らに余の老臣や師傅の住宅なども監視してゐる。余は馮玉祥の心事を解するに苦しむものである。

私が廢帝の居室を辭して、醇王府を出やうとした時、二三の老人がデヨンストーン(廢帝の英人家庭教師)と共に、あはたしく外から入つて來た。それは二十九日の正午頃のこゝであつた。而してその日の午後四時、廢帝は突如として醇王府を脱け出し、胡砂吹く蒙古風を切つて、籐のステッキを打ち振りつゝ、交民巷なる我が駐屯軍の兵營に、その日の朝と同じ黒眼鏡と獵服の輕裝姿をあらはされ、芳澤公使にしほしの假の宿を懇請された。いふまでもなく國民軍の廢帝に對する壓迫は日と共に險惡を加へ、いつ如何なる突發的迫害の手が加はるや、はかられず、折柄種々の不穩な謠言が傳はつたので、廢帝にまつては醇王府も亦不安が感ぜられ、こゝに絶体安全なかくれ場を公使館區域に求められたのである。翌三十日芳澤公使は在京記者團に向つて、宣統廢帝の隠匿に關して、わが公使館の立場を釋明するため、次の如く語つた。

宣統帝が日本公使館に身を投ぜられたその日の午後三時頃、某氏は突然余を訪ねて、「宣統帝が今



日本公使館廢帝避難の中

獨逸病院に入られて居るが、そこはたゞ一時身を寄せられたのみで、實は日本公使館に當分かくまつて貰ひたいのである。是非とも何分の配慮を願ひたい」この相談を持ち込んで來た。そこで余は取り敢えず、二三時間考慮の餘裕を與へんことを求めたが、二十分も経つか經たぬうちに、

宣統帝は既に日本兵營に來られ、余に面會を求めて居られるこの知らせに接した。早速斯く意外の速やさで事件が展開したので、余は躊躇するいさもなく、ここに斷然意を決し、早速日本兵營に宣統帝を訪ね、官邸にお連れ申して、樓上の三室を明け、廢帝の居間にお分けすることにした。そして同時に書記官を外交部に派して、事件の徑緯を通告し、また英蘭兩國公使を訪ねて、その諒解を求めた。余の兩國公使を訪問せるは宣統帝の宮城退出事件の際、即ち十一月五日、英蘭二公使と共に、外交部に警告を與へた關係に因つたものである。

五

黃郛内閣の左傾政策は清室の放逐てふ大芝居によつてその幕を切つておこしたので、各方面に對し、殊更ら強い刺戟を與へた。當時これを以て、ロシア十月革命の當初ボリシエウイキヤが、先づペトログラードでは冬宮、モスクワではクレムリン宮を襲撃した手を學んだものだ（事情は勿論甚だしく違ふが）と云ひ、一時馮玉祥の北京クーデターは「支那におけるソウエート革命の序幕」であるを評したのもあつた。

當時新外交總長王正廷は新聞記者から「清帝追放は段祺瑞と張作霖の承諾を得て決行したものか」この質問を受けた時、「清帝追放は國民全般の希望によつたもので、政府は個々の人の承諾を求めざる義務を持たない」と答へ、また「清帝追放は復辟運動防壓の目的でやつたものか」この質問に對しては「その方面の運動はなかつたやうだ」と答へた。これによつて見るも、清室壓迫は馮派獨斷の舉であつたこと、その目的が積極的左傾政策の遂行にあつたことが窺はれる。

已に辛亥革命によつて、その政治的生命を奪はれ、一切の實力を失つた清室に對して、今更らものしく壓迫を加へることは、一見無意義のこのやうにも考へられるが、しかし民國成立以後、十有三年紫禁城内に居住し、清朝の帝號、年號、封爵、朝儀、衣冠等の威容を存續し、屢々復辟運動の中心をなした宣統廢帝に向つて、放逐の暴行を決行したことは、最も露骨に黃郛内閣の「赤化」傾向を實證したもので、當時北京にあつた吳稚暉や李石曾等の民黨首領は、革命の見地から見て、北京クーデターの結果として、宣統帝の追放は、直隸派勢力の倒潰よりも、遙かにより重大なる出來事となし、さかんにこれを讚歎したものである。これによつて察するも、馮玉祥のクーデターの目的が那邊にあつたか、その背後の運動に加はつたものは何であるか、それは即ち國民黨及び左傾派の勢力であつたことが想像されるのである。

清室追放の翌々日、即ち五月七日、ソウエート大使館に於て催うされた露支懇親の大宴會は時局

柄大いに内外の注目を引いた。同日カラハン大使は黃郛、王正廷、李書城その他の攝行内閣員、支那共產黨の首領李大釗を筆頭とする北京大學急進派教授を始め、支那官民の有力者をソウエート大使館に迎へ、露支親善のために一大盛宴を張り、席上「新内閣の出現は中華民國を救ふものである。この機を利用し、民國の主權を侵すが如き在來の不平等條約は直ちに廢棄すべきである。露支協定は將來支那外交の綱領となるであらう……」さて大氣焔を上げ、黃郛總理は「速かに露支細目協定を作製し、露支協調の實を擧げん」と答へ、列國還視の交民巷内で、大いに新らしき露支兩國の親善振りを發揮した。

攝行内閣の出現にも、國民黨及び左傾各派は、急進思想の搖籃たる北京大學の學生間に宣傳し、天津會議並びに段祺瑞出盧前において、過激思想の濃厚なる雰圍氣の裡に政局過渡期の北京を支配せんことをはかり、先づ北京學生聯合會をして、その第一聲を發せしめた。同會の宣言は「今次の北京政變は國民の自由を解放のために奮起すべき絶好の機會を與へたものである」と冒頭し

- 一、國會を解散し、賣國借款を結べる安福、直隸、奉天各系の政客を懲罰に付すべし。
- 二、元老會議に反對す。全國教員會、學生聯合會、商工農各方面の代表をもつて、國民會議を組織し、國是を解決すべし。

- 三、自由運動に關する治安警察法を取消し、集會、結社、言論、出版の絶体自由を與へよ。

等の要求個條を羅列し、また海關回收運動、國民外交の確立、教育經費の獨立、曰く何、曰く何々
と並べたて、最後に「不法なる外國借款を改訂し、帝國主義の一切の妥協を排す」と切言し、ま
た「孫文が天津會議に臨むは革命領袖の情落なり」として、その北上に反對し、「同志は全力を擧げて
これを沮止すべし」と主張し、「本會はこの機會に際し、自由運動の先驅たらんことを期す」と結
んだ。

斯くして、黃郛内閣の左傾政策は、北京大學を中心とする急進思想の宣傳、その他の運動と相俟
つて、北京政界の空氣をして益々左傾的色彩を濃厚ならしめた。而して攝行内閣及び國民軍當局の
間に、委員制政府新設説の頻りに傳へられたのも、この時のことである。但し當時、この委員制政
府の新設案はたゞ左傾派政客のみの間に計劃されたもの、如く考へられてゐたが、しかし前記馮玉
祥の私に語つたところによつて、明白となつた如く、實に馮玉祥自身の計劃でもあつたのである。
即ち彼は當時なるべく速やかに、委員制政府を手盛りして、一方張作霖の先手を打つて、その關内
侵入を防止し、他方段の入京前に、委員制政府の出現を既成の事實と爲し、段のために政權獨占の
機會なからしめんことを考へられる。

馮玉祥が北京クーデターの直後、先づ左傾色彩の極めて濃厚なる黃郛内閣をおこすと同時に、遙
かに廣東にある孫文に向つて頻りに電信を飛ばし、その北上を促したのは、要するに、委員制政府

建設の機運促進をはかつたものに外ならぬ。馮玉祥は北京クーデターの一段落を告ぐるや、先づ國
民軍の名を以て、孫文にあて、

辛亥革命未だ功ならず。先生の政策施すに由なし。今や首都平定す。一切の建國方畧については
先生の指示を仰ぎ度く、速かに北上されんことを望む。

この電信を送つた。しかし、當時の孫文はおいそれと北上するところか出来なかつた。第一、その足
許の廣東がおだやかでない。第二、北京の形勢が判然しない。馮玉祥その人に對してもここまで信
頼してよいかわからぬ。かりに馮を信するとしても、馮以外の勢力、段派及び奉天派の態度がわか
らぬ。即ち孫文は最初北京クーデターの報に接した時は、直ちに馮玉祥、胡景翼、孫岳等にあて、
「今次の快舉、まことに贊嘆にたえない。余は即日北上して國家大計の建設に參劃する」との電報を
よせて來たが、しかし、その後十一月の初め、馮玉祥から北上催促の電報に接した時、

陳炯明との和議未だ成らず。廣東政府の内部にも、整理を要する問題あるので、これを至急片附
けて然る後、北上しやう、それまでは孫科を以て代表せしめる。

この返電をよせ、暫らく北上を延期し、いよく廣東を出發して後も、先づ上海に赴き、更らに日
本を経て、わざと迂廻路をとり、以て豫め北方の形勢をよく探索し、然る後徐ろに北京に入る計劃
をたてた。

かくして、馮玉祥は北京クーデターの決行後、先づ黃郛内閣をおこして、左傾政策の小手調べをなし、孫文の北上をまつて、委員制政府を樹立し、その中に段祺瑞の如き守舊派老政治家をも、抱き込んで、大いに革命政局の展開をはからうとした。

さり乍ら、當時の紛局は到底黃郛内閣の如き微力な政府の一時たりとも支へ得べきところではなく、また委員制政府の出現を見るまでには準備が出来てゐなかつた。孫文如何に偉大なる經世家であつても、南方から獨手空拳、風來坊の如き飛び入りの身を以てしては、到底收拾し得べくもなかつたのである。

北方の實力者は馮玉祥の外に、張作霖がある。山海關を突破し、なだれの如く關内に侵入せる奉天軍は勝ちに乗じて、京津一帯を呑まんとするの概があつた。クーデターの幕だけは巧みに打つたが「寢返り」「背信」の非難を内外から受け、また十月末、戦線からひつかへし、虚勢を擁して北京の奪還戦を擬した吳佩孚に對しても、一時手古摺つた。やがて十一月に入るや、國民軍はそろ／＼奉天軍のために抑へられんとするの形勢となつた。

この秋に當つて、天津における段派の策士は頻りに奉天派の實力を利用して、北京入りの策を廻らした。張作霖は、表面擁段を装うて、内實擁孫方針をこつた馮玉祥とは違つて、最初から正直に

段祺瑞推戴の方針をもつて起つたのである。張作霖の政策には表裏がなかつた。彼は眞つ直ぐ擁段方針をもつて邁進した。

かくして十一月の初旬から中旬にかけ、政局の中心は、いつしか北京から天津に移り、肚に一物ある馮玉祥も亦段祺瑞の許にくりかへし人を派して、その御機嫌を伺はねばならぬ事態となつた。

馮玉祥はたゞに、國民軍の正式代表として賈德耀、國務院代表として袁良、その他二三の要路者を天津に派したのみならず、その最も信頼する薛篤弼を、自身の代理として、段を訪はしめ、隔意なき談合を遂げんとした。然るにその頃已に國民軍の立場を見抜いた段祺瑞は、馮玉祥に對してはあたまつから上長官の威容を持し、薛氏に對しても、容易に接見を許さず、てんから取合はふしなかつた。こゝにおいて段の態度を氣づかつた馮玉祥は自ら天津に赴いた。

馮玉祥の天津行きはその途中已に不穩の謠言をひき起し、北京では「馮氏刺客のために刺された」この説さへ傳へられた。當時大部隊の奉天軍が天津に到着し、同地における國民軍は影をひそめてゐたのである。馮玉祥と前後して張作霖も亦天津に入り、こゝに天津會議てふ重要なる一幕が開かれた。

天津會議は段邸において開かれ、これには段、張、馮の三巨頭の外、吳光新、揚宇霆、盧永祥、王揖唐、梁鴻志等段派及び奉天派の巨頭連が參列し、會議の大勢は明らかに張作霖の勢力を背景と

した段派がこれを支配した。こゝにおいて馮玉祥は形勢いよく國民軍に不利を見て「萬事老段の分寸に一任する」にて謙讓の態度を示し、終始黙々として語らなかつた。

七

恰かも天津會議の進行中、南方から頻りに警報が飛來した。即ち曰く、十一月三日塘沽より海に出でたる吳佩孚は芝罘、上海、南京を経て、十七日漢口に來たり、更らに同地から北上して、再びもこの古巢、即ち河南の洛陽に入つた。また曰く、吳佩孚、齊燮元、肅耀南、その他直隸派の各省督軍二十一名は、連署を以て武昌に護憲政府を打ちたて、張馮の逆軍討伐を宣した……。

長江一帯の反北機運は、必然天津會議にも強き刺戟を與へた。而してその結果は段派と張派に有利であつた。それだけ馮派のために不利であつた。即ち段派は張派をたきつけて、この際北方は一刻も早く段祺瑞を推戴して、政局の安定をはからねばならぬ。叫び、その間に乘じて、グングン關内に奉天軍をひき入れ、京畿一帯の大勢を支配しやうとした。

やがて天津會議は段祺瑞の出慮、執政々府建設の議を一決し、同時に吳佩孚の護憲軍政府討伐のため、馮玉祥を京漢線方面軍總司令とし、胡景翼及び孫岳兩軍を派して、湖北に向はしめ、盧永祥を津浦線方面軍總司令に任じ、張宗昌及び吳光新軍をして、浙江討伐に當らしめることに決定した。

この決議は同時に國民軍と奉天軍との地盤問題を劃定したものであつた。而してその結果當時馮軍の最も垂涎してゐた天津は津浦線方面を擔當した奉天派の勢力範圍に歸したのである。

天津會議において段祺瑞からはあたまを抑へられ、張作霖からは武力をもつて威壓され、天津を奉天派に委し、散々の目にあつた馮玉祥は會議終了後十一月二十二日、段祺瑞と前後して北京に引揚けた。不平滿々の馮玉祥は北京に歸來するや否や、直ちに部下の高級軍官を集めて、會議を開き「國民軍の使命は既に完成し、段祺瑞によつて時局は收拾されることゝなつた。余は近く國民軍總司令を辭し、所屬軍隊は陸軍部の直轄に移す考へである。諸士これを諒察せよ」と訓示し、また辭職が許され次第、明春を期して、歐米漫遊の途に上るこの意圖をもらし、また吳佩孚に電信をよせて「國家のため、戰禍を防止し、余と同時に野に下つて歐米に留學してはどうか」との勸告を試みた。但し、これは馮玉祥がかゝる不平の場合に演ずる彼一流の手で、段派及び奉天派に對して大いにすねて見せたもので、肚から辭任し、また外遊の途に上らうとしたものではなかつたらしい。しかし如何に馮玉祥がすねた風を見せても、もはや大勢を動かすことが出來ない。安福派の中央政局乗つ取り計劃はグングン進展した。

八

民國十三年十一月二十二日、即ち北京クーデター後、恰度一ヶ月目の日に、段祺瑞は中央收拾の

ため、天津から北京に入城した。彼の乗れる特別列車は同日午後二時四十分、正陽門驛に到着した。プラットホームに下りた段祺瑞は、念佛七年の生活で、見違ふばかり頭は白くなり、背はかみ、國務總理として大いに威を振つた昔日の潑刺たる元氣がなくなつたが、それだけ角がこれ、如何にも圓熟した老政治家の風貌がそなはつて來た。やがてプラットホームに横づけされた自動車に乗り、嚴重な警戒裡に王府井大街を通つて吉兆胡同の自邸に入り、即日全國各長官に對して、左の通電を發した。

共和政体を布いてから、已に十三年、戰禍相次いで寧歲なく、一國の元首の如きも收賄に依つて選舉され、道德頹廢、法律弛廢を極む。余は已むを得ずしてこゝに入京し、臨時政府を組織し、國憲を制定し、省憲を促成し、軍制を改定し、邊境を開墾し、交通を備へ、民生を救濟し、各省の代表を招いて

- 一、善後會議を召集し、時局の紛糾を解決し。
- 二、一ヶ月内に、國民會議を召集し、根本の大法を決定し。
- 三、國民會議の議案は善後會議によつて制定せんす。

會議成立の日は、即ち余の野に下る日である。

この日、段祺瑞は新たに執政内閣を組織し、次いで、二十四日、執政就任式をあげ、極めて手輕に

中央政府を確立した。殊に内閣員の任命に當り、段派の人材と民黨の有力者を挙げ、馮系たる前攝行内閣員からは一名もこらず、また同時に張作霖系の奉天派からも、閣員をこらなかつたことは流石に老段だけあるこゝ、内外をして讚歎せしめた。

然し乍ら、執政府は本來奉天軍と國民軍との水火相和せざる二つの勢力の上に建設されたものである。老段の威望を以てしても二頭の悍馬を抑へ、これを一つの鞭で駕御することは容易のこゝでない。

段祺瑞入京の二三日前から、奉天軍の有力なる部隊が續々入京し、先づ天安門その他の要所を警戒し、大部分は西苑に駐屯するこゝ、なつた。こゝにおいて左腕に赤帶を卷いた國民軍はいつの間にかその影をひそめ、左腕に黒布を巻き、水色の外套に、毛皮の帽子をかぶつた奉天軍が大手をふつて、市中を濶歩し、昨日まで國民軍に迎合して赤帶を卷いて居た巡警まで、今日は一齊に腕章を取りはずすこゝ云ふ有様である。

十一月の末に至り、郭松齡の率ゆる奉天軍の精銳は天津より通州街道を行軍入都し、その數實に二萬に達し、馮玉祥の國民軍はいよゝゝ奉軍に壓倒され、北京は全く「奉軍の天下」になつたかの觀があつた。

奉軍の入京こゝも國民軍の對奉反感は益々強烈を加へ、所々に兩軍兵卒間の小競合なきあり、

この反目がどこまで熱するか、憂ふべき形勢となつた。段祺瑞は執政就任匆々張馮の軋轢に會して心痛一方ならず、百方これが和解に努め、執政令にて馮の辭職を慰留し、また一方張作霖も事態の悪化を慮れ、張學良と楊宇霆をして馮を西山に訪はしめ、慰留を試みた。しかし張作霖の馮玉祥に對する威壓的態度は、馮派の少壯士官を憤激せしめ、一時彼等の間に張作霖暗殺の計劃が密議されたことさへある。馮玉祥が辭表提出にもその姿を北京からかくし、西山に引込んだのも、實は張作霖暗殺の計劃に關聯した行動だとも傳へられた程である。こゝにおいて張作霖も俄かにその身邊の危険を感じ、十二月二日突然北京を去つて天津に赴いた。

張作霖の退京によつて形勢はやゝ緩和された如く見へたが、しかしそれは單に張馮の衝突を一時延期したに過ぎない。兩者間の溝渠は日にも益々深刻を加へ、馮玉祥が張家口に去り、張作霖が奉天に引揚げてから、奉國兩軍の葛藤はいよいよその本幕に入つた。

九

この歳十一月末、孫文は廣東を發して、北上の途についた。彼の北上は云ふまでもなく、馮玉祥及び北方における國民黨の要請に應じたものであるが、同時に段祺瑞及び張作霖も、多少の諒解があつた。但し保守一天張りの北方軍閥も、急進主義の孫文は到底心をゆるす迄の諒解が遂げられる筈がない。段張の孫文を一脈を通せんとしたのは、たゞ一つは直隸派の勢力を倒さんために

反直各派の大同團結を必要としたこと、今一つは馮玉祥及國民黨に對する懷柔政策上、甚だ本意乍ら孫文との握手をなすに至つたものである。

十一月二十七日、即ち執政府成立の三日目に、私は段執政をその邸に訪ひ、當面の時局問題を質問した時、彼も孫文との諒解問題について、左の如き説明を得た。

孫文がなほ廣東にあつた時、余は天津にあつて、遙かに音信を交はし、治國理政について諒解を進めた。孫文來京の任務は、第一、支那の統一を促成し、南北の分裂を避けること。第二、各國の不平等條約廢棄の方法を講ずること。第三、孫氏は北京滞在數日の後、各國遊説の途に上ることの三つである。余は已に孫氏歡迎のため、許世英を天津に派した。

右の説明によつても明白なる如く、段祺瑞にまつては孫文はまことに厄介なる客であつたのである。滯京數日の後、不平等條約撤廢遊説の名の下に外國へ追拂ふ考へであつたらしい。果して北京に到着せる孫文は國民會議問題で段祺瑞とその意見を異にした。段は國民會議を開く前に、先づ善後會議を開催せんことを主張し、また善後及び國民兩會議の議員資格をなるべく狭い範圍に限らんとしたが、孫文はそれと反對に即時極めて廣い範圍の國民會議開催を主張した。

孫文の北上と前後して、幾多國民黨の領袖連も來京した。彼等は馮玉祥及び黃郛、王正廷その他の前攝行内閣系と提携し、段派の保守的政策に對抗の陣容をこゝのへるべく、奔走しつゝあつた。

國民黨は多年抱懐せる建國策を提けて來るべき善後、國民の二大會議に臨み、言論戰において、段派の政客を壓倒し、政局の前途を支配せんご敦圀き、徐謙、張繼等はこれが劃策に奔走し、反段各派の大同團結に盡力した。

由來國民黨には口舌の勇者が多い。段派の策士も、辯論にかけては國民黨にはかなはぬ。善後及び國民の兩大會議における口舌戰を目前に控えた執政府は中々安心が出来ない。こゝにおいて段派の中でも王揖唐、曹汝霖等の在津派は、早くもこの政局裏面の潮流を洞察し、段派の危機を憂ひ、段を動かして各派の不滿分子、攝行内閣員の反感を和らけ、反段運動の緩和策をめぐらし、また彼等の中には孫文をあげて善後會議の議長にまつりあげ、その反段氣勢を殺ぐべしとの説を唱へるものもあつた。段派はふりかゝらんごする難局を如何に打開するか。孫文來京後の國民黨の活躍は當時の北京政局を極度に緊張せしめた。

然るに、北上せる孫文は不幸にも、その途中において持病の痼疾をやみ、北京到着ごこもに、病床の人ごなつた。而して病苦になやまさる、ごご三ヶ月、つひに偉大なる支那革命の巨人孫逸仙は、民國十四年三月十二日

余致力國民革命凡四十年、其目的在求中國之自由平等、積四十年之經驗、深知欲達到此目的、必須喚起民眾及聯合世界上以平等待我之民族共同奮闘、現在革命尚未成功、凡我同志務須依照余所

著建國方略大綱三民主義及第一次全國代表大會宣言、繼續努力以求貫徹、最近主張開國民會議及廢棄不平等條約、尤須於最短期間促其實現、是所至囑 孫文

この遺囑をのこして忽焉永眠した。段祺瑞は孫文の病臥三ヶ月の間、つひに一度も自らその病床を見舞つたごこなく、また孫文の死後、葬儀にも列しなかつた。この一事を以てしても段祺瑞の孫文に對する態度が推される。しかし、如何に主義政策の敵であつたごは云へ、佛を學べるごの段氏が孫氏の葬儀に代理を派して、自ら列しなかつたごは當時識者のひそかに老段のために惜しんだごこころである。

十

これを要するに、民國十三年の北京クーデターは、目指す敵手の直隸派を打ち倒した點においてこそ、馮玉祥はまごこに作戰の巧妙を極め、たしかに見事な政變的一幕を打つたのであるが、クーデターの直後における政局收拾の段に至り、徹頭徹尾失敗に終つた。蓋し、民國十三年における馮玉祥の政治的失敗は、おもふに馮自身においてその責を負はねばならぬ。即ち第一、彼れ自らまだ十分赤く染まぬうちに、「赤い役者」をつごめやうごした。第二、彼は民黨ごの連絡、諒解、ごもに徹底するに至らぬうちに、民黨を背景ごした芝居を打たうごした。その失敗に終れるは當然の數である。

當時の馮玉祥は思想上の修養において、なほ甚だ幼稚であつた。三民主義にせよ、またボリシエ
ウイズムにせよ、當年の馮玉祥はたゞその「いろは」を書き習つた程度に過ぎなかつたのである。ま
た國民黨の提携に至つては、前章所述の如く、民國元年馮玉祥が灤州にあつた時、孫文の代表孫
科、戴錫九等の遊説を受け、九年夏、漢口の下游湛家磯碇泊中、孫文の代表徐謙の來訪に接し、次
いで翌十年春、信陽駐屯當時任右民を廣東に派して、孫文と商議せしめ、爾後三度にわたつて、交
渉を重ねたことは云ふものゝ、その關係は甚だ淺いものであつた。然るに彼は十三年のクーデターを
決行するや、いきなり黃郛その他の民黨政治家をして、攝行内閣をつくらしめ、また左傾各派の力
をかりて、さかんに急進思想の宣傳を試みた。馮玉祥はこれによつて、北方軍閥の反動勢力を抑へ
以て委員制政府建設の機運をつくらうとしたのであるが、それは當時の馮玉祥にまつて、甚だ無理
な芝居であつた。結局直隸派の手から奪ひ取つた中央の政權は、間もなく安福及び奉天の兩派のた
めに、さらはれてしまふことゝなつた。即ち北京クーデターはその一面において、段派及び奉天軍
閥の保守派の勢力をして、中央の實權を握らしめ、馮玉祥の初志を全く相反する結果を招來したが
しかしまた他の一面において、第一、孫文に北上の機會を與へた。第二、國民黨の勢力をして黃河
以北に伸張せしめた。第三、馮玉祥の國民黨と孫文の國民黨との提携をかためた。第四、首都北京
における國民運動を自由ならしめた。第五、反帝國主義運動大聯盟や、全國學生聯合會等の各種團

体の勢力増進を促した。第六、「帝國主義反對」「不平等條約撤廢」等の宣傳を全国的に行はしめた。
そして第七、ロシアの勢力侵入の好機會となつた……等の點において、まことに民國革命のため
に、極めて重大なる出來事と云ふべく、曾て芳澤前駐支公使が「北京クーデターは支那革命に一新
紀元を劃したものである。このクーデター以後、支那の事態は全く一變した」と喝破したのは、芳
澤氏の得意とする歴史眼より下したまことに穿ち得た批判と云はなければならぬ。然り、民國十三
年の北京クーデターは、たしかに支那の革命を深刻化した。民國革命はこの時からして、明らかに
軍閥革命から民衆革命に移つた。ロシアのソウエート革命が影響して、支那革命に「赤味」の加はつ
たのも、この時からのことである。

北京クーデターの直後、孫文その人は死んだが、孫文主義は鬱然として興り、グン／＼北洋軍閥
の勢力範圍に浸漸して來た。十四年、馮玉祥は張家口に引込み、西北邊防督辦におさまつたが、彼
の武力を背景とする新人の中央舞臺における活躍は目醒ましいものがあつた。

馮玉祥が張家口及び包頭に去つて後、李烈鈞、柏文蔚、陳公博、邵力子、于右任等の國民黨領袖は常
に馮の帷幄裡にあつた。たしか馮が包頭に居た時のこと、ある日本人が彼を訪ふた時、午餐の折、同
席してゐた李烈鈞は「國民黨は民衆指導の原理を建國の政綱をもつてゐる。然しわれ等に武力をも
つたリーダーがない。これ國民黨が馮先生を擁し、革命の指導者に擧げんとする所以である」と語

つた。その時馮玉祥は黙して答へなかつたが莞爾として微笑をたゝえ、心中頗る得意の様子であつた。云ふことである。その頃の國民黨は、廣東の一隅に閉息し、武力なく、首領なく、萎微して振はなかつた。當時李烈鈞、田桐の一派は馮玉祥をして孫文の後を襲がしめ、彼を以て國民黨の總理に推戴せんとし、ひそかに各方面に奔走し、また馮玉祥自身も心算かに孫文の後継者を以て自ら任じてゐた……云はれたが、あながち憶測説のみはとられない。

▲曹吳打倒布告▼

民國十有三載	干戈擾攘疊經	士農工商各業	所受損失非輕
推厥致禍之由	果爲何人作俑	本年旱乾水溢	幾至十室九空
嗟我無辜同胞	何堪再罹兵戎	用特主和停戰	班師回駐燕京
推重國內賢豪	共同解決內爭	軍人不干政治	義惟絕對服從
凡我父老兄弟	定必悉表贊同	所有市塵商民	其各安堵勿驚
外人生命財產	更當保護安寧	倘有造謠生事	定行拿辦重懲
爲此剴切佈告	仰爾商民敬聽		

中華民國十三年十月二十三日

馮玉祥

四國奉戰爭

失意時の處生術—實力涵養・争ひの林檎—關稅會議
・張作霖に最後警告・郭松齡の叛逆・「昨の敵は今
の味方」・恩人の仇討—徐樹錚暗殺・京津より緩遠
へ・不平時の韜晦策—下野外遊・軍閥の赤白分野

一
民國十三年十二月二日、張作霖が逃ぐるが如く突如北京を去れる。前後して、北京城の内外に駐屯してゐた奉天軍は續々退京し、總司令郭松齡も亦天津に去り、北京はいつの間にか、再び國民軍の勢力範圍となつた。然し張作霖は北京滯在中、段祺瑞に向つて、今回の反直戦争に當り、その火蓋を切つた功勞者盧永祥のために、地位を與へんことを要請し、ついに執政府をして、盧の直隸督軍任命を發せしむることに成功し、その結果、天津はいよいよ確實に奉天派の手に歸した。

國民軍は北京に止まることだけは出來たが、北京にこつて海への出口として、最も重要な天津を、奉天軍の手に奪はれたことは、國民軍のために非常な痛手であつたのである。盧永祥の直隸督軍任命を聞いて、馮玉祥は再び辭表を段執政の前に投げつけた。十二月四日、執政府秘書長梁鴻志は執政邸を訪へる私に這般の事情を釋明して「張作霖の出京については種々の流説が傳へられてゐるけれども、別にたいした内幕問題があつた譯ではない。張は只だ盧永祥の地位を要求したゞけであつたが、今は盧は直隸督軍に任ぜられ、奉天に執政府との間には何等の確執なく、張作霖は最早や北京に長逗留の必要もなくなり、盧永祥の任命決定と同時に出京したのである」と語り、何事もなきを裝ふたが、段、張、馮の三角關係は、この頃から、益々緊張状態に陥つたのである。

馮玉祥はかくして、西山に引きこもり、三度辭表を投げつけ、來春を期して、外遊の途に上るな

ごみ、すね續けてゐたが、張作霖退京し、ついで孫文の來京するに及び、やゝその態度を緩和した而してその邊の機微を捉へるに抜目なき執政府當局は、一月四日左の執政令を發し、馮玉祥より入れの一石を投じた。

陸軍檢閱使の職は虚設に等しきを以て、同職はこれを裁撤に決す。馮玉祥は軍を治めて功あり、勳績素より著し。必ず能く疆圍を綏靖して益々遠猷に懋せん。仍ち督辦西北邊防事宜に著して、即日銷暇職に就かしむ。

これについて執政府は張作霖に對しても、その東三省巡閱使辭任の請願を容れ、一月七日新たに彼を任ずるに東北邊防屯墾事宜を以てした。執政府はかくして常に張作霖と馮玉祥とを同列に待遇し兩者をあはせて駕御しやうとしたのである。その間の用意と技巧とは、まことに至れり盡せりの感があつた。然し張馮兩者に對する同等の待遇は、同時に二人をして、益々競争の立場に導き、對抗反目の状態を誘致したのも、また必然の結果であつたのである。

奉天軍閥は直隸省の大部分、及び山東全省をその掌中におさめ、更らに江蘇省に入つて、長江に進出した。

これと同時に馮玉祥の國民軍は、直隸省の一部(北京)、河南全省、察哈爾、熱河、綏遠の三特別區、陝西、甘肅を合せて七省區にその勢力を伸ばした。(因に十四年八月馮玉祥は甘肅督辦兼任を

命ぜられた)

二

十四年年頭、馮玉祥は北京を去つて、張家口に移り、西北邊防督辦の職に就いた。彼は失意の時、外に對して、消極的態度をとり、内において實力の養成に専心するを常とする。武穴唱和の後、常德に移された時も、また河南から逐はれて陸軍檢閱使に祭り上げられ、北京の南苑にあつた時も、失意の馮玉祥は沈黙して、何等對外的發表をなさず、たゞ銳意熱心、その部下將卒の訓練と軍隊の擴張に向つて驚くべき努力を傾倒した。北京クーデターが所期に反した結果を生み、滿腔の不平を抱いて張家口に移つた時の彼もまた黙々として實力涵養に専心した。

馮玉祥の兵を練るの要諦は、實踐射行にある。彼は自ら兵卒と同じ服を着け、同じ食物を食ひ、兵營にひこしき粗末な家屋に住み、以て將卒の師表となる。

當時張家口に馮督辦を訪ふたものは必らず、先づその邸宅の粗末なのに驚かされた。即ち、張家口市街の東方に構へた二町四方もある督辦公署……云へば、さぞたいした邸宅であらうと思つて行つて見るに、實は兵卒の手で造られた土造の平長屋で、その邊の貧乏な民家と少しも異らぬのである。この土造長屋の中に、夏なれば白の詰襟、冬なれば、木綿の綿襖を着て、夜はランプの油煙鼻をつくところに、馮督辦が寢起してゐるのである。食物は兵卒の常食たる麥粉づくりの饅頭、但

し、大男の彼は普通の人が一つ喰べれば充分なのを、三つ位平ける。お茶も云つても兵士が飲むものと同様、甚だ粗末なものである。要するに彼は文字通り、兵士に寢食をこもにし、以て國民軍の訓練養成に懸命の努力を傾倒し、徐ろに時局展開の機會を待つてゐたのである。

三

民國十四年春の支那は老段の治下に、一時小康を保つたが、夏に入るや、北方に於ける馮玉祥と張作霖の二大勢力の關係日毎に緊張を加へ來つた。同時に、中部及び南部支那でも、そろ／＼戰雲がみなぎつて來た。奉天軍の長江進出に對して反抗的に蹶起せる孫傳芳の對奉宣戰がその一つ。孫傳芳の旗擧げに次いで湖北湖南の兩省に據つて、同じく奉天軍閥の倒潰を目標として起てる吳佩孚の捲土重來がその二つ。而してその第三は南支の一角に再び北伐の旗幟をあげた廣東軍の出動それである。

同年秋に至り、これ等南北各派をして必然衝突せしむべき幾多の導火的出來事が起つた。その第一は民國十四年、秋を期して開催に決した關稅會議である。この會議の結果として生ずべき關稅の増收こそ、所謂「争ひの林檎」になつたのである。この林檎を壟斷せんとして、各地の群雄は相競ふて中央乘取りを急ぎ出した。第二はソヴェート・ロシアの勢力東漸である。ボリシエウイキヤは所謂世界革命の迂迴作戰として、東洋の被壓迫民族援助を標榜し、遠く支那革命のために援助の手

を延べた。この二つの出來事こそ、南北各派をして、つひに戰端相開かしめ、支那を投じて全國的大動亂に陥れた最も有力なる近因であつたのである。

民國十四年十月十六日、孫傳芳は張作霖に向つて宣戰の通電を發し、反奉戰爭の火蓋を切つた。一度長江筋まで手を伸べた奉天軍はこれがため、その鼻先を挫かれ、先づ上海を引揚げ、ついで陳調元の南京において獨立を宣言するに至り、江蘇督軍新任勾々の楊宇霆は身を以て南京を脱し、二十一日天津を経て奉天に歸來した。而してその前日孫傳芳軍は早くも南京に入城した。

江浙開戦につれて長江一帯の直隸派は再び擡頭し、湖北督軍蕭耀南は吳佩孚を討逆聯合軍の總司令に擧げ、吳は十月十九日付を以て「佩孚は江湖に退去して、この儘平穩に日を送るつもりであつたが、奉天軍深く中原に乘出し來つて以來、政治は日に非にして、争亂益々烈しく、人民の困難、國家の危機は刻々迫つて來た。義憤の激する所、如何にも抑へ難く、且つ最近抗州の孫傳芳は、徐州に進んで一戰を試みんとして、余の出馬を促し、また福建の周陰人よりも、今次討奉の戰役に同心戮力せんことを懇望して來た。更らに湖北の蕭耀南及び湖北將領も亦擧つて余の出山を求め、其他の數省からも余を聯合軍總帥に推擧して止まない。余は茲に起つて國を救ひ、奸を除く決心を固めた。余の目的は救國以外何物もない」この通電を發するにこもに、二十一日漢口に着し、討逆聯合軍總帥の職についた。

この時に當り、西北に據つて、奉直兩派の中間に根據を占めた馮玉祥が、如何なる態度を以て、この新局面に臨むかは、實に内外の最も注目したところである。馮玉祥にまつては、吳佩孚が仇であると同様、張作霖も亦敵である。しかし孫傳芳は已に反奉作戰上の默契があつた。彼は孫の力を以て奉天軍に打撃を加へ、自ら勞せずして敵を討つ計を廻らしたのである。こゝにおいて馮はかゝる場合その常套政略たる傍觀政策をとり、わざと甘肅督辦就任を名として、十月七日張家口を去り、包頭鎮に移つた。包頭鎮は京綏線の北端であつて、蒙古境邊の僻村である。彼が東南風雲の急を告げんことを秋に當つて、かゝる僻陬の地に引退せるは、全く中原に野心なきを裝ひ、對手をして油断せしめんことをの策に外ならなかつたのである。

江浙の戰端開かれ、長江における直隸派巨頭の擡頭するや、段執政は事態の重大なるに驚愕狼狽し、馮玉祥に向つて、張孫間の調停を依頼したが、已に孫と默契あり、且つ熟柿の落ちて來るを待たうとする腹黒き彼は蒙古境邊の僻村にかくれて、なか／＼出て來やうとしない。

斯くする中に、孫傳芳軍は津浦線に沿ふて北進し、同方面における奉軍の旗色振はず、張作霖は頗りに馮玉祥の態度を顧慮し、再三使者を包頭に派してその様子を伺はしめた。然し、腹に一物ある馮は、張が弱く出れば出るほど、益々その傍觀政策を深め、西へ西へ引つこんだ。
馮玉祥は當時の駐京代表薛篤弼をして「馮督辦は今次の時局に對して中立を嚴守することに決定

した」ことを表明せしめ、また奉天派の代表郭瀛洲が包頭に來るや「昨年十月、軍を北京に回した時、張作霖は一兵をも關内に入れざることを約した。然るにその後、奉軍はさし／＼入關したのみならず、山東、直隸の兩省をあけて自家の掌中に入れんとした。余の和平政策をすて、また外遊の志を斷念するに至つた原因もこゝに外ならぬ。しかし余の今日の立場としては、直隸派に加擔するこゝも出來ねば、奉天派と聯合して直隸派を攻めるこゝも出來ない。余はたゞ中立を嚴守するのみである」ことを語り「中立聲明」をくりかへし、以て奉天軍をして後顧の憂なく、直隸派との戰爭に一步／＼と深入りせしめんことをはかつた。當時張作霖と馮玉祥との間に交された左の電文はこの間の消息を最もよく傳へてゐる。

即ち張作霖は十月二十四日附を以て馮玉祥に宛て、「今次蘇浙の争は孫傳芳首先發難せるもの。奉軍は數萬の衆を有し乍ら、一槍も放たずして撤退した。上海の撤兵の如き、孫傳芳軍の出勤以前にこれを決行した。作霖の和平を尊重する苦心は、中外人士の見るところ、誰が戎首であるかは事實具さに、これを證明す。孫傳芳の倒行逆施は別に作用あり。即ち國人が關稅會議の成立を希望して已まざるに、彼等はその不成立を唱へ、國人が中國代表の合議參列を欲するに、彼等は其の不開會を利用せんことを。國人は兵禍の將さに至らんとして饑餓の苦痛を恐るゝに、彼等は故意に兵禍を惹起し、以てわが民を苦しむ。名は對奉宣戰なるも、實は國に仇をなすものである。今曲直是非

は姑らく論ぜざるも、しかも孫既に難を前に發し、吳蕭後に響應し、師を興し、衆を動かすは、適々關稅會議將さに開かれんことを時にあり。禍國の中、實に賣國の意を含む。蛛絲馬跡線索尋ぬべく、また諸公洞鑑の中を逃れぬであらう。作霖半生戎馬にあり、已に憂患に飽きぬ。唯だ國に利するを期せば、事として犠牲に投ぜざるなく、事として容忍せざるはなし。本日煥帥(馮玉祥の)の來人に對して、たゞ一線の和平を望むべきなれば、委曲全を求めざるはなく、彼即ち再び一步を進めば、作霖は國家の計のために、亦三舍を退避すべしと傳へておいた。昨年討吳の役には戰事傷亡の慘に鑒み、吳に對して窮追せず。並びに私財を放賑すること四百餘萬元、敵を視ること友の如く、民を視ること傷の如しとの宗旨に對しても愧ぢなかつた。たゞ吳佩孚天性亂を好む。歷年の戰爭は皆な吳佩孚一人の發動するところである。この度、報復を倡言するも、別に用心ありて、金錢の役使を受け、他人の傀儡となつてゐる。恐らくは空言の能く制止する所にあらざらん。敬んで公裁を乞ひ、明教を侍候す」と誠意を披瀝して諒解を求めたが、これに對し、馮玉祥は左の如きあたまつから知らばくれた返電を送つた。

貴電の趣き委細承知した。大局斯くの如くであれば人民の苦痛測るべからざるものがある。余は平和を熱愛するもので、民を救ふこと以外、何ものも念頭がない。余は包頭に到着後數日になる大体用事が片づいたから、更に西へ行く考へである。中原の事はあけてこれを貴殿にお委せする

若し北京にある余の部下にして、貴下のお役に立つ者があつたならば何卒、勝手に使つていたが、きたい。

まことに人を喰つた返電であつた。しかし、張作霖もさるもの、よく馮玉祥の意圖を洞察し、その手に乗らうとしない。當時馮玉祥としては奉天軍を衝くにこれ程有利な機會がなかつたこと同程度に、奉天軍にまつてはその南進に當つて、北京から腹背をつかれるほご、危険なるはなかつた。ことにおいて張作霖は孫軍撃退のため、その主力を南下せしめると同時に、北京と天津の間にも、有力なる部隊を集中した。一方北京において、執政府當局の仲介の下に、張馮兩軍の代表が集つて平和交渉を進めつ、あると同時に、他の一方、双方とも晝夜兼行で戦備を急いだ。

十月末、京津一帯に集中された奉天軍は廊坊を最前線とし、楊村、馬廠、天津附近並に軍糧城に五個師、寶坻に騎兵一旅を駐屯せしめた。保定と大名にも二個師配備されたが、これは河南軍の北上に備へたものらしい。これに對し國民軍は鹿鍾麟に屬する二個師(暫編第一師と表面名のない一師の兵)の外、南苑の第十一師、西苑の暫編第二師、この外京綏沿線に二個師を配置し、奉天軍の五師一旅に對し、國民軍は約六師を以て對抗したかたちであつた。

十一月に入つて、奉軍は徐州方面においても敗退した。然しこの正面の戦局不利になればなる程奉軍はその側面に對する國民軍の脅威を顧慮し、益々京津間の兵力を増加し、京東、京南、京西の

三方面から、北京に迫らんこし、兵火は何時北京を見舞ふや、測られざる状態となり、人心恟々、早くも北京から天津に避難する人もあつたが、十一月中旬に至り、執政府の有力者が頻りに張馮兩派の調停に斡旋し、一方包頭なる馮玉祥に、他方當時天津にあつた張學良に説き、その結果奉國兩軍の間に、一定の勢力範圍を定め、國民軍は京兆及び京漢線全部を擔任し、奉天軍は津浦線の警護に當るこし、し、京漢沿線及び京兆内に入れる奉天軍をして撤退せしめ、兩者共同して南方の侵入軍に當るこし、なり、奉國兩軍は同時に北京及びその近郊から撤退を始め、北京の危機はために一時緩和された如く見へた。

しかし、馮玉祥の對奉妥協に應ぜるは、たゞ自ら戦はずして勝つゝの作戰の運用上、一時衝突を避けたのみである。當時彼の計劃では北京も放棄するつもりであつた。所謂「空城計」を以つて奉軍を北京に誘き入れんこしたこも云ふ。その頃頻りに北京において、過激分子を煽動して、種々の紛擾をひきおこしたのも、所謂「赤化」の都に奉軍を引き入れて、ぬきさしならぬやうにしてやらうこしたのだこ云ふ説さへあつた。彼に妥協の誠意のなかつたこは、妥協成立の三日前、即ち十一月十一日、包頭から同地に使せる許蘭洲に託して張作霖に送つた次項の信書によつても明白に推知するこし出来る。

四

馮玉祥の張作霖にあてた十四年十一月十一日付信書は、馮氏自ら筆をこつて書いたもので、國民軍ではこれをもつて、馮玉祥の張作霖に對する「最後の警告」こ名づけてゐる。即ちこれを譯すれば左の如くである。

雨亭大兄。患難を共にして以來、國のため死を共にせんこを期した。料らざりき、わが兄徒らに権力利慾に迷ひ、却て人のために誤られんこは。孝伯(王承斌)を直隸より逐ひ、同志をして心膽を寒からしめ、鄭温卿(鄭士琦)を山東より驅つて、軍界の人心を離叛せしむ。一堂(王揖唐)に出走を逼りて、安徽省を得、嘉師(盧永祥)に辭去を強ひて、江蘇を劫奪す。同志に對するかくの如く、而して患難を共にせるものに對して亦かくの如し。多年の舊友、軍長を以て軍長を制し、今に至るも微權だに得ず。豈河を過ぎて橋を毀つゝの類に非ずや。新進の少年(楊宇霆を指す)は口舌をよくすこ雖も、その怯懦たるや言語に絶す。然るにこれに罪を加へずして、尙ほ且つ大權を握らしむ。わが兄、何ぞかくの如き顛倒を敢てなすや。芝老(段祺瑞)の傅良佐に對する、彼が湖南をすて、逃ぐこ雖も、なほこれに與へるに將軍の銜職を以てし、賞罰當を失するや、一敗して起つ能はず。わが兄親しくこれを目睹せるに非ずや。今來電を閱するに余に宣言を逼る。余は去年、和平救國の役に宣言をなせり。わが兄以てこれを推さざりしや。余は吳こ並立し能はず

わが兄未だこれを思はざるや。宣言は果して眞に効力あるものなるや否や、わが兄これを知れるや。顛倒も此に到りて極はまる。誠に余の料及し能はぬところである。

京畿に數萬を増兵し、余に宣言を迫まる。余は斷じて宣言の逼迫を受けざるに決す。兄も共同動作を貫徹するは權利の攘奪に非らず、異己の排除に非らず、見新厭舊に非らず、花天酒地、己の慾を縦にするに非らず、乃ち生命を犠牲とし、國家の爲め、人民の爲めになすのである。

若し我兄が弟を認めて合作の必要ありせば援助の必要あり。弟は來りて合作援助をするであらう。然らざればたゞ武裝解除を靜待するのみ。たゞ兄に望むは平心靜氣人民の爲めに千思萬考されたい事である。京城は首都にして、外交の係る所、最も念及されんことを望む。

この親書はその内容から推しても、たしかに馮玉祥の張作霖に對する「最後警告」を見なければならぬ。石橋を叩いて渡るてい、の用心深い馮が、如何にしてか、大膽なる態度に出でたか。蓋しそれは彼に對奉必勝の秘策が成つたからである。即ちその頃、郭松齡をして叛起せしめる計劃が成立したからである。

一説によれば、馮玉祥はこの親書を張作霖に送るに先きだち、豫めこれを郭松齡に内示した。而してこれを再讀三讀した郭松齡は大いに動かされ、こゝに始めて反張作霖の旗を翻へす決意をなしたのであると云ふ。しかし今まで長い年月、その部下にして從屬してゐたものが、たゞ一通の手紙

を見たゞけで、しかく無雜作に鉾を逆さになし得るものでない。この親書の内示前、馮と郭との間には已に通ふりの反張作霖の諒解がついてゐたものと見なければならぬ。但し、郭をしていよいよ最後の肚をきめしめたについては、この親書が與つて力があつたものと考へられる。

第一章にも記せる如く馮玉祥は私の南京訪問の折、親しく私の質問に答へて、この信書に言及し「郭松齡を始め、當時座にあつた奉軍將領八十餘名は、余のこの書信を讀んで、感激の涙を流したさうだ」と語り、またその一部を讀みかへし「張作霖にしてもあの時余の勸告を容れたならば、皇姑屯の悲劇も免れ得たであらうに。余は彼のために追惜の情にたえない」として長歎息を洩らした。

馮玉祥が右の最後警告を發してから、十二日を過ぎて後、即ち包頭からの發信が恰度奉天なる張作霖の手許についた頃、郭松齡は反奉天の旗をあけた。今から顧みて、それが馮玉祥の張作霖に對する郭松齡叛起の豫告ではなかつたであらうか。少くも馮の胸中には敵の内訌を利用し、自ら戦はずして勝つての成算已に成れりとして、傲然張作霖を見下してゐた様子があり／＼と窺はれるのである。

五

民國十四年十一月二十二日、郭松齡は灤州の司令部において、平和主張の名の下に、張作霖に對

し、叛旗を翻へし、張作霖に向つて下野要求の通電を發した。この通電は文章家を以て知られた黎元洪の秘書饒漢祥の手に成つたもので、その原文は左の如き天下の名文である。

張上將軍鈞鑒。松齡溼承殊遇。擢長兼師。職在服從。義當報稱。虎頭食肉。萬里不辭。馬革裹屍。死而無悔。何敢苟求免難。不恤孤恩。顧仰體鈞座偃武之衷。俯察遼民被兵之禍。治亂決無二命。仁勇不可兩全。畏罪不言。負心更甚。竊爲鈞座披瀝陳之。連歲興戎。現金告匱。錢鈔亂發。價額日虧。外幣潛乘。寔省殆遍。倚其調劑。轉與維持。刮我方輸。曷人廢紙。血枯見骨。身沒及顧。運轉不靈。彌縫益困。推行所極。必至無財。士兵苦戰。將帥專圻。至於一卒。儼折二緡。名爲增鈔。實同罰俸。年豐母餒。歲暖兒寒。戰骨已枯。卹金尙格。膺宗殄絕。嫠媛流離。釐鐘舍牛。藏蓋埋犬。此猶不若。抑復何辜。死無義名。生有顯戮。推行所極。必至無兵。軍旅疊興。賦歛日重。邑無倉筥。家無蓄藏。強募人夫。兼括驢馬。僵尸盈道。稿革載途。桀者通逃。騷擾剽掠。宵憂盜難。晝懼官刑。哀我窮閭。甯有唯類。推行所極。必至無民。藐茲三省。介處二鄆。寶鏡託盧森林卉服。僑民滿落。牧馬成屯。陸軌分張。海航密接。朝登平壤。夕薄遼城。交道不周。責言猝至。入關競逐。蔽墓必朽。盜黨生中。敵兵勵北。彼若自衛。甯復我疆。推行所極。必至無省。東省果失。北京必危。列強交爭。共管立定。馬甸腥臊。堯封塗炭。誰爲禍始。馴至國亡。去歲曹氏叛國。浙省擄兵。已蒙傷心。唇亡迫齒。鈞座甫正氣之不申。驅遼人之將盡。驅漢所盡。樂豆成

趨。假使振旅出關。安民保境。陽樊不參。有衛無侵。豈不渣滓七雄。糝糠五霸。顧乃勉循下意。違拂前衷。列陣淮流。耀兵江浦。比閭望燧而憂。列鎮聞風而警。將欲憑陵勁旅。混一寰區耶。建國以來。雄才何限。一敗不振。屢試皆然。或乃託命善身。自娛暮晚。或乃託身聯省。暫庇危機。人方改絃。我猶蹈轍。微論人才既寡。圻勢復偏。強控長鞭。終成末弩。且天方厭禍。民久苦兵。上者固回百姓之與能。下者亦刻六王之均勢。必欲鯨吞西北。暨食東南。方詎說之不勝。豈謳歌之可望。試問遼陽鶴返。寄慨何如。魯國鷓來。銜哀奚若。欲致平成。寧非夢想。將欲多據畿圻。取償軍費耶。異族相爭。何事不忍。然日俄之講。稿幣未聞。德法之盟。載書終改。況此子遺。孰非胞與。謂取之於鄰省。則赤地久荒。謂取之於京師。則白藏早竭。甚或藉爲口實。鬻我宗邦。所沾不過玉斗之餘。所累已勝銅山之重。狐緣虎視。龜代犯亡。人盜其賞。我負其咎。此其失計。豈待申言。滬釁甫開。蘇師先潰。皖旣風靡。魯復土崩。伏機發於群方。防線延於數省。夫大蛇巨於修路。則首尾難援。巨象蹙於狹途。則腹背皆困。政府未令討伐。反唱調和。旣屬無名之師。復居難勝之數。鈞座深慮顛危。力持鎮定。不謂曳兵之將。猶懷捲土之心。必欲驅市從戎。傾巢赴敵。夷田廬於榛藪。殮部伍於沙場。松齡銅劍常鳴。鐵衣未解。萬里之鶴。猶蘊雄心。八尺之龍。久無汗血。方重圍之無懼。欲一勝以何難。第是孤軍卷甲。長路饋糧。民有譴言。士無鬥志。設使前途堅壁。後遇奇兵。流馬難輸。懸車莫渡。鞞修之頭。方僵起帳。伍員之肉。豈慰楚軍。鈞座揚縣蔡之稜

威。立沿吳之偉績。十年錯節。詎利器之易成。三載臥薪。猶痛心之未定。萬一項王歌帳。李主愁臺。破竹之勢思成。絕株之慮將見。興言及此。爲憤何窮。松齡親當戎路。熟察敵情。鈞座委以節旄。鄉人託以子弟。收骨之悲。生何以對輻叔。納肝之慘。死何以見懿公。蓋自受命以來。無日不迴腸欲斷也。昔者祁奚請老。內不避親。曹瑋代興。下皆效命。傳之青史。播爲美譚。漢卿軍長。英年辟厲。識量宏深。國倚金湯。家珍玉樹。干風雲而直上。曆雷雨而弗迷。松齡素同袍澤。久炙光儀。竊願遵命匡襄。竭誠翊佐。更張省政。總制遼疆。收毀濫鈔。豁除興孔。嚴刀以除苛莠。厚廩以養士兵。實行文治。以息強藩。優遇勞工。以消激黨。爰舍矢於普及。寶藏期於盡宣。三省富強。四鄰和睦。鈞座婆娑歲月。賞玩煙霞。全主父之令名。享令公之樂事。果箕裘而盡善。曾酒脫以何妨。夫市朝不改。則農夫無輟耒之憂。堂構相承。則部屬無倒戈之罪。塗膏之士。蹈白刃而復蘇。稿項之民。臨黃泉而更甦。松齡上酬推解。下拯創夷。博采群言。更無諛策。謹當負荆東返。席橐上求。非得領頤。寧甘碎骨。先軫直言。早抱歸元之志。鬻拳強諫。詎辭肘足之刑。鈞座幸勿輕信讓言。重誣義士也。等語。合行奏聞。伏希指示。

郭松齡軍は先づ山海關における張作霖の軍隊に對して軍事行動をおこした。十一月二十三日山海關に兵變起るこの報道は、當時張作霖は勿論内外一般に對しても、非常の衝動を興へ、眞に青天霹靂の感があつた。郭松齡の奉天軍にあるや、最初張學良の師匠役に當り、その關係から張學良

の信任を受け、その配下に屬せる奉軍主力の實權を握るに至つた。第二奉直戰爭には張學良軍即ち奉軍の主力を率ゐて山海關九門口の要地を拒し、敵將吳佩孚の親しく指揮せる直隸軍の精銳を戰つて、大いに戰功をたて、益々張學良の信任を厚くし、第二奉直戰爭の段落を告げて後、張學良軍は殆んど全部郭の指揮下におかれることゝなつた。

當時張學良は或は北京、或は天津、或は奉天等、各地を飛び廻り、軍隊からはなれて、政治方面に奔走し、またスポーツやダンス等の遊びに没頭してゐたので、奉軍主力の指揮權は事實上、郭松齡の掌中にあつた。加うるに、當時張作霖が馮玉祥の國民軍を對手に一戦を試みんとして、武器彈藥のあるだけを郭軍に送つた時であるので、同軍は殆んど張作霖の精銳の全部を集中したやうなものであつた。されば郭軍叛起すこの報傳はるや、張作霖始め奉天派の巨頭は愕然としてなすところを知らず。楊宇霆の如きは眞つ先に大連に逃げ、張作霖もまた一時逃げ仕度をしたほごである。

郭松齡軍は前記の如く山海關の對直戰爭において、大いに戰功をたて、十三年十一月末張作霖の入京直前に、北京に入り、馮玉祥に對して、一大威嚇を加へた奉天軍の精銳である。然るに、何ぞ圖らん、この軍隊が一年の後、戈を逆にして、馮の味方となり、張に對して叛逆を企てんことは。

郭松齡の叛亂は蓋し馮玉祥の張作霖に加へた最初の打撃であつた。自ら手を下さず、敵の内部に食ひ込んで、叛亂をひきおこさせた手並みはまことに凄いものであつた。まさにわが當面の敵手こ

して一戦を交ふべかりし郭松齡軍を、その開戦間際に一轉して、これをわが味方となし、目指す強敵張作霖に向つて寝がへりを打たせたことは、實に馮玉祥一代の大傑作と云はねばならぬ。

當時奉天軍の精銳を握つてゐた郭松齡の叛起は、張作霖にまつて、致命的打撃たらざるを得なかつた。さしも時めいた張作霖の權勢も全く風前の燈火であつた。流石の豪傑張作霖もこの時は何等の勝算なく、全く途方にくれたのである。

郭松齡の叛亂については幾多疑問の點がある。多くの資料が郭松齡の敗北戦死にともなひ、滅却されてしまつたので、その叛起の動機と徑路については幾多不明の點があるが、これまで判明したところによつてこれを検討するに、大体の徑路は左の如くである。

第一、郭松齡は直隸派打倒の戦功行賞に對して不平を抱いた一人である。彼は山海關の激戦に於て援群の殊勳をたてたにも拘らず、天津會議に於ても、また北京交渉に於ても、何等の行賞にあつてからず。天津の地盤は最初盧永祥に奪はれ、次いで李景林のものとなり、張宗昌は山東省を得、格別目立つた戦功もたてなかつた楊宇霆さへ江蘇督軍に榮轉した。而して彼は何物をも與へられざるのみならず、その部下の軍隊を率ゐて、更らに國民軍と戦はねばならぬ責任を負はされ、抑へがたき不平に苦悶を續けてゐた。

第二、民國十四年秋、郭松齡は奉天軍の代表として、日本の陸軍大演習を參觀し、日本の軍事その

他文化の進歩を觀て、深く感ずるところあり。頑迷な保守主義でかたまり、時代の進歩、思潮の趨勢なきについて、一向没交渉なる張作霖及びその周圍の守舊派に對して、漸やく反感を抱くに至つた。

第三、恰かもその頃、馮玉祥から或は國民軍の代表、或は國民黨の新人を介して、郭松齡に接近を求め、さにも「新しき支那」の建設に當らんことを勧めて來た。

かくして、不平と野謀を胸一つばい抱いた郭松齡は天津にあつて、病氣を稱し、某國病院に入つて病臥を装ひ、容易に部下軍隊の指揮をこらうとしない。恰かも十四年の秋、内外の視線が關稅會議に集注されてゐた當時、北京と天津との間を來往せる馮派の策士は、郭松齡をその「病床」に訪ふて、こゝに反張陰謀の具體計劃を打ち立てることとなつたのである。

十一月の中旬、馮玉祥と郭松齡の代表者間に締結された協定は左の如くで、馮は二十日、郭は二十四日これに署名調印した。

- 一 郭松齡は張作霖に下野勸告を通電すること。
- 二 李景林にしてみれば郭松齡を攻撃するにおいては、馮玉祥は李景林討伐の兵を出すこと。
- 三 李景林もし中立を嚴守するにおいては、戦後李に熱河都統の地位を與へること。
- 四 國民第一軍は直隸及び京漢全線をその勢力範圍におさむること。

五 東三省のことは、一切これを擧げて、郭松齡の處理に一任すること。

六

郭松齡の叛起については、前記の如く、論功行賞に洩れたことが、動機の一つであつたことは、云ふ迄でもないが、然しその根本の原因に遠く遡つて、これを検討するに、奉天派内訌の眞の禍根は、むしろ同派内部における新舊兩派の軌躑にあつたことしなければならぬ。

張作霖は由來綠林に生ひ立ち、俠氣を以て幾多の乾兒を悅服せしめ、權謀を以て敵手を陥穽し、逐次地盤を開拓して、あれだけの權勢を張つたのである。従つて彼の腹心の部下は舊式の武將ばかりである。

張作霖と張景惠は、綠林時代、彼と兄弟の契を結んだ間柄である。湯玉麟もその出身を同じうしかつて一度争つて拒けたのを再び採用したものである。張作霖の勢力の根底は實にこれ等舊式武將にあつた。彼等は張作霖の采配下に親分乾兒の關係をもつて、相より相扶け、理窟や打算を超越した所謂「綠林道」をもつてその結束をかためたのである。

然るに、奉天軍閥の勢力の増大につれ、地盤が擴張され、兵力また逐年増加するに至つて、張作霖は、もはや舊式の武將のみによるこゝが出来なくなつた。第一、新式の武器が必要になつて來た第二、新式戰術の智識を求めなければならぬ。即ち新式の教育ある士官を必要とする時代となつた

やがて張作霖の周圍には、舊式武將の外に「新派の武將」なるものが集つて來た。楊宇霆、張學良、韓麟春、郭松齡等は即ち後者の筆頭である。

晩年の張作霖は、各々その傾向を異にし、互ひに反撥をこゝし、する新舊兩派の武將によつて圍繞されてゐた。彼は實に同時に「二つの異つた椅子」の上に座したのである。彼の地位の安定を缺くに至つたのは當然の勢である。

民國十四年の郭松齡事變は決して郭松齡たゞ一人の反張戦争を見るべきでない。あきらかに新派對舊派の大叛亂であつたのである。郭松齡の一度事を山海關にあぐるや、同じく新派の巨頭たる楊宇霆は眞つ先きに大連に逃げ、張學良は旅順から秦皇島に赴いて、郭松齡との妥協をはからんことを。その他の新派將士は殆んど悉く郭の指揮下にあつて、反張の旗幟を翻した。而してこの間終始一貫、張作霖のために奮戦したのは主として舊派の武將であつた。山海關から奉天に直進せんことを郭軍の先鋒を抑へ、郭軍作戰の第一歩に一大齟齬を來たさしたのは張作霖軍であつた。遼河々西の決戦で、白旗堡の郭軍總司令部に向つて、勇敢なる奇襲を決行し、郭軍潰亂の因をつくつたのは吳俊陞軍であつた。

張作霖は吉林省、吳俊陞は黑龍江省において、それら鞏固な地盤をかため、獨立の地位を築きあげ、敢て張作霖のためにあれまで義理をつくし、忠勤をぬきんで、死生をこもにしないで、支

那軍閥一流の遊泳術を以てすれば、立派に立つてゆける立場……云ふよりは、むしろ張作霖にまつて代はるぐらゐの野心をおこしさうな地位にあつた。しかも一朝有事のとき、彼等はいつも張作霖の麾下に馳せ参じ、その命令の下に動く。張作霖はこれ等舊派武將の人心を收攬するにおいて實に妙を得てゐた。彼はいつも親分肌の度胸も、恩威併行を以て乾兒をなでつけ、巧みに俠氣も、機智で群雄を駕御して來たのである。しかし新派の武將に對しては張作霖はてんから理解をもたなかつた。新派の武將の多くは思想的に南方かぶれをしてゐる。しかし新思想の何物たるかを解せぬ張作霖にまつては、これにかぶれた新派武將の心事を洞察するの明をもたなかつた。張作霖の馮玉祥や閻錫山に比して、遠く及ばなかつたのはこの點である。張作霖は郭松齡等がいつの間にも南方にかぶれ、また如何に舊派に對して不平を抱くに至つたか、その叛亂の勃發する時迄で、全く氣づかずに居た。のみならず、彼は實にわが子學良も亦、郭松齡等もその方向を一つにしてゐたことさへ知らずにするたのである。

郭松齡事變の翌年、私は滿洲に遊び、この事變の真相について、最も信すべき筋から、左の如き興味深い機微の消息を耳にするこゝを得た。

郭松齡叛起の直後、張學良は旅順を経て、秦皇島に赴き、同地で郭松齡の代表も、何事か交渉を重ねた後、再び旅順に來た。彼は直ちにわが兒玉關東長官を訪ひ「今回の事、非は父作霖側にある

ます。郭松齡の方が正しいのです。私はこれから奉天へ歸つて父に下野を勸告します」とこの意外なる決意を表示した。これを聞いた兒玉伯は「子にして親に叛くが如きは東洋道德の許すべからざるこゝろである」と言下に面罵し、嚴しく彼を叱責した。張學良は兒玉伯の威壓に萎縮し、一夜考慮の末、翌日に至り「それではこれから奉天へ歸つて父も私も郭軍を討ちます。郭軍討滅の後、再び御目にかゝりませう」との挨拶を残して、旅順を去つた。然し張學良は奉天へ歸つた後も、遠巡躊躇、容易に出陣を肯んじなかつた云ふこゝろである。

わが當局は、張學良が父作霖のために危急存亡の秋に當つて、叛亂者郭松齡の側を正當とし、「父をして下野せしめんした」と云ふ意外なる事實から推して、いよく郭松齡の叛亂が、郭一個の出來心からおこつたものでなく、その裡面に深刻なる思想的根底のあるこゝろを、推知したのであらうか。やがて、わが滿洲駐屯軍は増兵され、白川關東軍司令官は滿鐵沿線二十支里内侵入禁止の布告を發した……間もなく張作霖は遼河々西に郭松齡軍を邀撃し、不思議にも最後の一戦で、奉天王國の危急を救ふこゝろが出來た。

七

郭松齡叛起の直後における李景林の態度は頗る不明瞭であつた。彼が十一月二十五日付を以て、張作霖に下野勸告の電を送り、また内外に對して和平主張、保境安民の消極方針を表示したこゝろ

から推して、彼はたしかに奉郭戦争に對して、中立を守るものを見られてゐた。しかるに十二月に入つて、國民軍の野心の明らかに直隸全省を掌握せんとするにあるを看破した李景林は、自家の地位擁護の目的からしても、起たざるを得ない形勢となつた。

馮玉祥は、十一月二十四日、即ち郭松齡の旗揚の翌日、新局面に對する國民軍の行動を指揮すべく包頭を發して、張家口に來た。一方郭松齡は十一月三十日、山海關において、その配下の軍を改編して、東北國民軍をなすの通電を發し、いよく馮玉祥との同盟をかたくし、西北國民軍と同じ旗幟の下に立つことを表明した。茲に於て、國民各軍は益々勢ひを得、第二及び第三軍は己に山東省及び直隸省の南部において行動をおこし、京津一帶の形勢は漸やく逼迫を告げ、李景林はやむなくつひに意を決し、十二月三日、郭松齡軍に對して攻撃に轉じ、同時に國民全軍に對して宣戰を布告した。

こゝに於て、西北國民軍總司令馮玉祥は十二月六日、李景林討伐を決し、張之江を第一軍正司令、鄭金聲を同軍副司令、鄧寶珊を第二軍正司令、徐永昌を同軍副司令に任命し、第一軍をして天津以北の正面、第二軍をして天津以南の正面を分擔せしめ、兩軍を以て、天津を挾攻せしむるの作戰をたてた。

張之江は十二月三日張家口を發し、司令部を廊坊にすゝめた。これと同時に鄧寶珊及び徐永昌は

馬廠の南方に、その軍を集中し、十二月六、七日いよく李景林軍に向つて攻撃に移つた。最初國民軍側では、無援孤立、しかも西と南から同時に挾撃を受けた李景林軍はたゞ國民軍の陣容を見ただけで、士氣衰へ、何等の抵抗なくして投降するものゝたか、をくつてゐたのであるが、李景林は流石に千軍萬馬の歴戰將軍のこゝで、中々投降するどころか、その手兵を携けて、自ら京津線正面に出陣し、楊村、北倉の役において逆襲し、國民軍に對して多大の損害を與へた。たゞ衆寡敵せず、十二月の中旬に至り、漸やく天津の郊外近くに逐ひつめられ、十二月二十二日つひに李景林は天津をすて、山東に敗走し、張之江は同日午後五時、李鳴鐘ももに天津に入ることを得た。かくして國民軍は漸やく李景林軍を破つて天津を占領し、馮玉祥はこれより、郭松齡軍を援助すべく滿洲に向つて進軍を命ぜらるが、この時已に遅く、必勝を期して滿洲に入れる郭松齡軍は國民軍の天津に入れる翌日、即ち十二月二十六日巨流河の一戦に於て脆くも大敗し、自ら悲惨なる最期を遂ぐるこゝとなつた。その後張作霖の勢力はまた、く間に恢復し、民國十五年春匆々奉天軍は再び關内に侵入し、同時に山東省に據れる張宗昌軍は天津より逃れた李景林軍ももに直魯聯合軍を組織し德州方面から、直隸省を窺はんこし、一旦天津を奪取した國民軍はやがて逆に南北から挾撃を受くるの形勢となつた。

最初馮玉祥の胸中には、郭松齡の叛起によつて張作霖を倒せば、北支那の天下はおのづから我が

物たるべしをなし、自ら戦はずして勝つるの秘計が廻らされて居たのである。然るにその後の變局は悉く當初の豫想を裏切り、第一、必勝を確信して居た郭松齡軍は全敗し、第二、豫期せざる李景林軍の反抗に會し、楊村附近の激戦において、莫大なる損害を蒙つた。第三、しかも天津奪取後、部下將士の行賞に就いて、種々の爭議が起つた。第四、加ふるに郭松齡の叛亂後、意外にも吳佩孚は張作霖の手を握り、兩者聯合して馮玉祥に當らんとするの由々しき事態を現出するに至つた。

八

國民軍が京津線において李景林軍と相對峙しつゝ、あつた當時、張之江の司令部所在地たる廊坊において、一つの慘劇がおこつた。それは安福派の智將にして、段祺瑞の片腕と云はれた徐樹錚が暗殺の凶刃に倒れたことである。

民國十四年の暮、徐樹錚は日本及び歐米視察の途から歸來し、その報告かたぐい北京に來り、久し振りで親分の段祺瑞に面晤し、今後の行動劃策について密議するところがあつた。世界を觀て來た徐樹錚は如何なる經綸を老段に建築したかは知る由もないが、段氏は政權を握つたこと云ふもの、安福派には實力なく、何事も奉天及び國民軍の制肘を受け居る刻下の形勢は、到底徐樹錚の活躍をゆるさずをなし、徐に勸むるに、暫らく京畿を去つて上海に赴き、徐るに時の到るを待つべきを以てした。徐樹錚は老段の命ずるがまゝに、十二月二十九日午後六時北京を辭し、京奉線で天津に向

つたが、同日午後八時半、彼をのせた列車の廊坊に着するや、突如數十名の兵が列車内に闖入し、徐氏を車外に引出し、驛の裏手に誘ひ、拳銃をもつて射殺した。この事起るや、國民軍側から、徐樹錚を殺したのは民國七年、天津で徐樹錚のために暗殺された陸建章の長子陸承武で、彼は國民第一軍の士官で、廊坊に駐屯し、徐樹錚の同地通過を好機として、父の仇を復讐したのであるこの報道が、いかにもまことしやかに傳へられた。同時に陸承武の名を以て、各方面に大要左の通電が發せられた。

徐樹錚は性來陰險にして常に内亂を助成し、害毒を全國に及ぼして來た。余の父建章は嘗て徐に睨まれ、つひに一命を落すに至つた。余は爾來隱忍自重すること七九年、片時も懷中から刀をばなさず、報復の念をすてなかつた。幸にも先考の靈の引き合せか、二十九日はからずも徐の廊坊に出會ひ、初めて不倶戴天の怨を晴らすことが出來た。

しかし徐樹錚暗殺の下手人は果して陸承武であつたか。事件の直後勿々その眞偽について大なる疑問がおこつた。即ち陸承武は國民軍の軍籍になく、且つ事件の當時廊坊に居なかつたこと云ふことが證言され、また陸承武は極めておこなしい、いづれか云へば柔弱な青年で、人を殺すやうな男でなく、彼の知人にまつては、彼が自ら手を下して徐樹錚を殺さうなごゝは思ひもよらぬことであつた。やがて疑問は解けて世評の一般は徐を殺したものは陸承武でなくて馮玉祥である馮が廊

坊の司令部にゐた國民軍總司令張之江に命を下して、やらせたものである云ふことに定まつてしまつたのである。但し馮の徐を殺したのも、矢張り陸建章の仇を討つたものであることは云ふまでもない。陸建章は馮の大人である。卒伍の間から馮を抜擢して、彼のために立志の途をひらいてくれたものは陸建章である。陸建章は馮玉祥の青年士官時代、あらゆる機會において馮を庇護し、馮を救助し、またその姪をして馮に嫁かしめ、陸家と馮家は姻戚關係を結ぶに至つた。然るにこの大人陸建章は民國七年徐樹錚のために無殘な最期を遂げた。馮玉祥はその時から徐樹錚をもつて恩人の仇をなし、ひそかに復讐の機會を狙らつてゐたのである。馮が段祺瑞及び陸建章と同じ安徽の出身である關係から、當然安福派に入るべきであるのに、却て直隸派に傾いたのも、要するに安福派の徐樹錚を怨んだからである云へ云はれたものである。

徐樹錚も恐らく馮玉祥につけ狙はれてゐたことを知つてゐたであらう。然るに傲岸不屈の彼は大膽云ふよりは無謀にも赤手空拳で、國民軍の勢力圏内に大手をふつて入つて來た。尤も馮玉祥は徐の入京前頻りに人を徐の許に派して、歡迎の意を表した云ふことであるが、それは勿論馮の徐を誘ふ「手」であつたに相違ない、然りこそすれば、徐は實に馮の「手」に乗つたのである。徐樹錚もあらうものが、如何にしてかく無難作に馮玉祥の術策にのせられたのであらう。千慮の一失はまさしくこのことを指さねばならぬが、しかしまた一面敵陣の中へ大手をふつて入つて來たところに

放膽傲腹なる徐樹錚の面目が躍如として忍ばれるのである。

徐樹錚は近代支那の生んだ傑物の一人である。馮玉祥としては、徐をもつて恩人陸建章の暗殺者として讐敵視したことの外に、いま一つ徐をもつて將來天下取りの競争者を見たかも知れぬ。徐樹錚暗殺の直後、私はある支那の學者から、次ぎの如き、まことに穿つた説を聞いたことがある。即ちこの學者の曰く「支那の歴史を讀むに、古來の天下取りは必らず、一、自分より偉らしいものはこれを暗らがりにつつてこつそり片付けてしまふが、二、自分より偉らくないものは互ひに争はせて最後に双方併せて征服してしまふ云ふ二つの機略に長じてゐる、漢の高祖の如き、その最も顯著な例證である。而して馮玉祥も亦實にこの天下取りたるべき二つの素質を十分に具備してゐる。馮は徐樹錚をもつて自分よりも偉らしい見たのであらう。そこで馮は巧みに徐を誘つて北京に入れ武装なく護衛なき彼を捕へて、暗らりに連れ行き、こつそり片付けてしまつた……」云。

徐樹錚の暗殺は極めて巧みに企てられ、また極めて巧みに遂行された。たゞにその目的を完全に達したばかりでなく、陸建章の子陸承武が親の仇討をやつたかの如く芝居を仕組み、馮自らはそ知らぬ顔をしてゐたところなきはまことに凄腕云はねばならぬ。これがもし仇討を讚美した昔であつたならば、恩人の仇を討ち、しかもその功名を恩人の子に譲つた馮玉祥は直ちに美談の主人公なつたであらう。然るに支那ですら復讐を罪惡みなす現代に會した馮玉祥は徐樹錚暗殺によつて、た

一般にいよく、凄い、恐ろしい、油断ならぬ馮玉祥……云ふ印象を與へ、當時内外の同情はむしろ徐樹錚に集まつたのである。

九

これよりさき、張作霖が郭松齡叛亂のために、殆んど致命的打撃を受け、さすがに全盛を極めた奉天軍閥も、いよくこれで没落の運命に近づいたものと思はれた……いは、張作霖王國にまつての危急存亡の秋に當り、彼は不思議にも、幾多の武將中、つひ一年前まで、鎬を削つて戦つた直隸軍閥の巨頭吳佩孚その人において、最もたよるべき同情者を見出した。

十四年秋、吳佩孚は一年有半雌伏の後、漢口において、討賊軍の旗をあけ、孫傳芳と協力して、奉天軍閥に對する雪辱戰を劃策しつゝあつた。然るに、突如、郭松齡が張作霖に對して反旗を翻へしたこの報傳はるや、吳佩孚の張作霖に對する敵愾心は一變して同情心となり、彼は遙かに漢口から、奉天の張作霖にあて「馮玉祥の叛起で敗戦の慘苦をなめた余は郭松齡の謀叛に苦しむ貴下の心中を最もよく察するものである。余は貴下のために、出来る限りの援助を與へるであらう。貴下は専心叛逆討伐に向つて猛進されよ……」この電信をよせ、同時に孫傳芳軍の山東入りをおさへ、又靳雲鶚軍の北進を中止せしめ、最初の討奉計劃は、急轉して、援奉方針に改められた。殊に前記吳佩孚の電信は、恰かも張作霖が奉天で郭松齡の叛起について對策協議のために軍事會議を開いて居

た時に着し、張作霖はこの電信を部下に示して、大に士氣を鼓舞し、軍議は直ちに郭軍討伐に決したと云ふ。張作霖はかくして實に吳佩孚の義侠的態度によつて、危急存亡の苦境から浮びあがるこゝが出来たのである。

その後、奉直兩軍閥間には、張志潭その他の政客策士が、奔走斡旋するところあり、吳張兩雄はたゞに釋然舊怨を忘れて、こもに手を握つたのみならず、更らに共同の敵たる馮玉祥及び彼の率ゆる國民軍を向ふに廻はして、討赤聯軍をつくることとなつた。

十

民國十四年末に至り、郭松齡の無慘なる敗北、吳佩孚と張作霖との提携、孫傳芳の態度豹變……等思ひがけない幾多の出來事は、悉く國民軍の爲めに不利な形勢を誘致することとなつた。

こゝにおいて機を見るに敏なる馮玉祥はかゝる場合むしろ變局の舞臺面から一時その姿をかくし内は部下將士間における内訌の雰圍氣轉換をはかり、外は反馮各派の態度を緩和するにしかさくなし、十五年一月一日左の通電を發した。

吾國戰禍に苦むこゝ茲に十四年、殺人野に盈ち、殺さるゝ者は盡く同胞たり。爭端百出、争ふ者は國士に非ざるは無し。老弱溝壑に轉じ、少壯挺して險に走る。鞭弭周旋、相習うて風を爲し、金錢萬能、群趨して鷺の如し。禮讓の大節盡く失し、國家の信念存する無く、軍閥國を禍し、人

民切齒す。痛定つて痛を思ふ斯に極る。馮玉祥去歲和平を唱導して以來、本は是より内争を息止し、意を建設に専らにせんことを期せり。是を以て遠く邊塞に投じ、拓土移民、凡そ開渠植樹修路造林の諸端提唱せざる無く、郵貧養老、兵工屯墾の諸策、推行せざる無し。已過の事實は共に鑒みる所也。圖らざりき、跋扈者は其心を戦めず、攀附者は其勢を助長し、軍を淮上に屯し、馬を江表に領し、勢海内を席卷し、中原に雄霸せんことを欲す。暴横既に張り、義忿斯に動く。是を以て群起出抗、雲集景從し、孫馨督義を浙に首め、長驅北を指し、蕭珩督鄂に聲援し、志し澄清に切なり。皖贛響應し、已に破竹の勢を爲る。徐淮の袍澤も亦強敵の鋒を振り、未だ兼旬に至らざるに千里潰退せしむ。人心の向背此れ知る可きに猶復野心未だ死せず。趨勢に強逆し、師を驅つて入關し、轉じて北を圖り、用兵戦めず、終に自ら焚く。郭軍長(松齡)東省人民水熱の困を痛み、深く故國荆棘の悲を懐ひ、爰に師旅を整へ、民の爲め命を請ふ。返師の初め、芳宸(李景林)もこの援助を約す。榆關の戦勝より孤軍深く入るに迫り、乃ち芳宸其徳を二三にし、郭軍長に對しては頓に前約に違ひ、玉祥に對しては則ち通電譴誨す。玉祥和平促進の計の爲め、已を得ずして兵を用ふ。現在芳宸潰逃し、京津は肅清せられ、直省責を負ふに人あり。中原不日平定せんと思へるに圖らざりき、郭軍長滄陽に逼進し、一朝顛覆せり道路相傳ふ。聞く已に郷國に殉死して未だ初衷を遂げず、終に尸骸を成す。果して事實に係らば殊に悼惜に堪ふ。兩軍此痛劇を経て漸く覺

悔あり。善く戦ふ者は當に上刑に服すべく、舟中の人盡く敵國に成るは古訓の昭垂するところ。よく、警惕を知る可し。玉祥武人の專斷、戦勝の余威を恃み、毎に政權を把持せるに鑒み、往事を追溯して即ち痛心を爲す。此次僥倖にして勝を獲たるも亦已に武ならず。又何ぞ貪夫の功を敢てせんや。此の千鈞一髮の機、徹底澄清の會に値ひ、仍ち宜しく和平の衷心に本づき、國家の改造を謀る可し。但願くは戦争此れより結束し、人民をして休養に資するを得んことを。玉祥個人は應さに即ち下野して以て仔肩を卸すべし。是の如くんば、則ち造謠衆を惑はす者も以て息止すべく、而して是非を挑撥するものも憑依する所を失はん。國家の大計に至つては執政は碩徳の耆老、萬流仰鏡し、子玉(吳佩孚)は學深く、粹を養ひ、世變を経たり。當に能く前嫌を念はず、共に國是を謀るべし。孫馨督(傳芳)蕭珩督(耀南)方耀督(本仁)閻百督(錫山)岳西督(維峻)孫禹督(岳)共に義師を起し、克く奇勳を奏し、均な不世の功を爲す。此より國內の賢豪を延請し、公開討論し、諸大法を幹して、之を軌道に納れ、凡そ國計民生に關しては自から宜しく各々偉抱を抒べ、共に艱危を濟す可し。玉祥既に學術無く復た經驗に乏し。以て國を治するも、蒼生に益無く、之を以て軍を治むるも、空しく、袍澤を累せん。其誤りを將來に遺して、國人に譏られんよりは、早く引退して、以て咎戾を免るゝに如くは莫し。辭表を呈するに共に當に即時任を解き、我初服に還り、あらゆる國民軍の名義を通電取消し、此後は威な國軍に屬し、再び國民軍の名義を用ひ

ず。電達以後凡そ政事を以て教へらるゝ賓客には一律に敬謝し、凡そ識位に因つて惠賜さるゝ文電は答をなさず、以て決心を示すを恕せよ。玉祥解職の後は、即ち出遊して、學問に潛心せん。若し一得の愚あれば、願はくはこれを國人に貢がん。謹んで腹心を布き、敢て鑑察を祈る。

馮玉祥は右の通電を發するに同時に執政府に辭表を出し、西北邊防督辦の職を張之江に譲り、國民軍の組織を解いて、部下の各將領をして分管せしめ、自身は「春暖の候の至るを待つて外遊すべし」と宣言し、張家口を去り、包頭を経て平地泉に向つた。その後馮は暫らく平地泉にあつたので前年と同じく外遊の宣言は、芝居であらうと見られ、又彼自身にしても、たゞひ政略の爲めには云へ、部下の軍隊はその地盤を捨て、外國に去るに云ふことは、中々思ひ切れぬところで、流石の馮玉祥も未練があつたらしい。當時國民軍の爲めに百方壓迫を受け乍らも、なほ同軍によらねばならぬ苦境にあつた執政府は、時局の安定を計らんが爲め、頻りに馮玉祥に向つて復職を請ひ、改めて馮を直豫陝撫使に任命したりなごして、その機嫌を直しにつこめた。然し四圍の形勢は國民軍の爲めに益々悪化するのみであつた。奉天軍はドシ／＼關内に侵入して來た。吳佩孚軍も亦河南に入り、やがて直隸へも進入せんとしてゐる。吳張兩軍にして直接聯絡を取るに至らんか、國民軍はいよく敗亡を免れない。三月十六日、馮玉祥はつひに意を決して平地泉を發し、二十七輛の自動車をかつて、庫倫經由、訪露の途についた。

十一

馮玉祥がロシアに去つた後の國民軍は一方首領を失ひ、他方敵の重圍に陥り、非常の苦境に陥つたのであるが、しかし、そのため各將領は今の内争の時に非ずみなし、協力一致して難局に當るの態度に出で、内部は却つて結束を固くすることゝなつた。

殊に鹿鍾麟軍は北京に踏み止つて、奉魯聯合軍と猛烈なる對戦を繼續した。やがて戦局は北京の近郊に近づいて來た。三月二十四日國民軍が京津線の前線より總退却を始め、北京南郊の線に陣を布き、北京死守戦に移るや、北京は全く三方から包圍の状態に陥り、日夜砲聲轟ろき、奉軍の飛行機は、連日北京の上空を飛び、各所に爆弾を投下し、市民は數週間にわたり、恐怖の日を送つた。かくして奉軍の攻撃に壓迫された鹿鍾麟軍は窮餘の一策として、四月九日、再び北京に於て第二クイーターを敢行し、段祺瑞を捕へ、吳佩孚を迎へ、以て吳張の提携を打破せんとの大芝居を打つた。然し、吳佩孚はもごりかゝる手に乗らう筈はなく、また肝腎な段祺瑞は事前三十分にして交民巷に逃れた。かくして四月九日のクイーターは全然見苦しい失敗に終り、國民軍は却つて非常の窮迫状態に陥り、四月十五日午後四時、つひに北京を撤退し、北方南口の線に據ることゝなつた。

國民軍の北京撤退後、京奉線からは奉魯軍、京漢線からは直隸軍續々北京に入り、やがて六月二十六日張作霖の入京に次いで、吳佩孚も亦翌二十七日北京に到着し、こゝに懷仁堂に於ける吳張提

携會見なるものが行はれるに至つた。

會つて幾度か嬌を削つて戦つたこの両雄が一堂に集つて握手を交はす云ふことは、眞に離合集散常なき現代支那に於てもなほ豫想外の番狂はせであつた。しかもこの二人の敵を轉じて味方ならしめた動機は、何か云へば、要するに馮玉祥一人に對する敵愾心に外ならぬ。吳佩孚及び張作霖てふ支那近代の二大武將を、一時に敵に廻したことは、馮玉祥にして、非常の不覺には相違ないが、また他の一面から見て、男子の痛快事さしなればならぬであらう。

十二

民國十四年末から十五年にかけての支那の大勢は、私が「ソウエート東方策」において記せるが如く、いよく明白に赤白兩軍閥の分野状態を呈するに至つた。即ち滿洲を根據地として、山東及び直隸兩省に手をのべた張作霖の奉天派及び武漢を中心として、湖北、河南一帶に再舉の旗をあけた吳佩孚の直隸派の二大白色軍閥に對抗して、察哈爾、綏遠、熱河及び甘肅、陝西方面を地盤とする國民軍及び廣東に盤居して、北伐の師をおこした國民黨軍の二大赤色勢力が起ち、その間に長江の下流一帶に據つて、五省聯盟を唱へた孫傳芳の南京軍のみ、最初白もつかず、赤もつかず、旗幟を鮮明にしなかつたが、結局白色軍閥側に走つた。廣東と西北の二派は、明らかに左傾派政黨を背景とする「赤色軍閥」であつて、これに對し、吳佩孚と張作霖とが聯盟して、赤賊討伐軍をおこし

先づこの二色の軍閥が南と北の兩戰場に分れて、戦端を開始したのである。然し白色側にあつては再起後の吳佩孚は已に曩日の勢ひなく、赤色側にあつては當時の廣東軍はまだかけ聲のみ高くして實力あやしまれ、赤白双方の横綱は奉天軍と國民軍、即ち張作霖と馮玉祥であつたのである。

民國十五年四月から八月にかけて、國民軍は南口の天險に據り、直奉聯合軍を相手にして大いに奮戦した。國民軍もよく戦つたが、奉天軍も亦よく攻め、殊にその砲兵は大なる偉力を發揮し、ために國民軍は莫大なる損害を蒙つた。南口の激戦は蓋し支那近年の戦争中、最も慘絶を極めたものであらう。南口は北京を距る一日行程の地にある。奉天軍にまつてはこれを奪取せざる限り北京の安全を期することは出来ない。また國民軍にまつては張家口の根據地を防備する上においても、また捲土重來して北京奪回をはかる場合に於ても、南口の險は飽くまでこれを固守する必要があつたのである。

然るに熱河方面から察哈爾に進出せる奉天軍は同方面における西北軍を破り、突如として張家口の東北方に迫つた。國民軍の周章狼狽一方ならず、南口の鹿鍾麟軍は後方危急の報に接して、八月十三日匆皇退却を開始したが、この時已に熱河方面の奉天軍は宋哲元軍をひた押しに押し、張家口に肉迫し、國民軍の主力は退却の機を失つて、全く混亂状態に陥つた。一時北支那の霸權を握らんとした西北國民軍もこゝに至つて、支離滅裂、綏遠から甘肅の奥地に亂退した。殊に悲惨を極めた

のは石友三及び韓復榘の率ゆる部隊で、兩軍とも山西省北部を通過するに際し、山西軍に阻まれた。たゞ當時山西軍としては國民軍を敵に廻はしたくもなければ、奉天軍の感情を害したくもないこと云ふところから、國民軍が恰かも山西軍に降伏した如く装ひ、一時同軍を山西省に抑留し、時期を計つて奥へ退却を許したのである。當時國民軍の敗退振りの如何に悲惨を極めたかは、たゞこの一事から推しても、その全班を察するに餘りあるのである。

馮玉祥が張家口にゐた頃、某國人が察哈爾において牧畜會社を興し、羊數萬頭を養つてゐたが、馮督辦は十四年の暮突然命令を下して、盡くこれを沒收した。某國領事は大いに怒り、直ちに抗議を持ちこんだところ、馮玉祥は「不平等條約の中にすら、外人に内地牧畜を許す條項がない」と逆振を喰はせ、領事をして口を噤んで引下らしめた。國民軍はおかけで羊肉をたらふく喰ふことが出来たのみならず、その皮で多數の軍服を作つた。その後間もなく國民軍は李景林軍と京津に會戦したが、時恰かも嚴冬、氷天雪地の上で、よく長期の戦争に堪え得たのは、全くこの羊皮軍服のたまものであつた。

五 赤露の百日修行

窮餘の逃げ道から窮して通ずる道へ・庫倫會議・滯
露百日の赤化修行・赤色扮装芝居・「レーニンに似
た支那人」・馮國露の奇しき三角關係・三民主義の
手ほぎき・馮玉祥のロシア土産

一
民國十五年三月十六日、馮玉祥は平地泉を發し、蒙古を経て、訪露の途についた。彼のこの行、もごより敗戦の結果、窮餘の逃途を取つたものであるが、しかし、今日からこれを顧みれば、馮玉祥はむしろこの行によつて「窮して通ずる道」を見出したもの云はねばならぬ。

當時の馮玉祥は、云ふまでもなく、「敗軍の將」であつた。しかし外蒙古及びロシアにおける彼は恰かも凱旋將軍の如く、到るころ大歡待を以て迎へられた。

三月二十三日、馮玉祥の庫倫に着するや、外蒙政府の當局初め、軍官學生等多數郊外に賭迎し、歡待至らざるなきものがあつた。彼の庫倫滞在の日取りは、明白でないが、少くとも一ヶ月餘り、同地に逗留したらしい。それは單に外蒙政府當局との交驩、若くは交渉のためのみでなく、他にも重要な用事があつたのである。即ち馮玉祥は庫倫滞在中、同地において、一つはロシアの事情を窺ひ、今一つはその頃馮と同地で待ち合せた國民黨左派の領袖顧孟餘及び徐謙の二氏、並びに國民政府顧問ボロヂンと、今後の支那革命に就いて、極めて重要な協議を重ねた。

馮玉祥の始めてボロヂンと相識つたのは十四年春のことである。同年三月二十九日ボロヂンは廣東から北上の機會において、張家口に來り、二十九及び三十日の兩日滞在したが、馮玉祥は彼を迎へるに國賓の禮をもつてし、歡待到らざるなく、また親しく支那國民革命今後の作戰等について意

見を交換した。その後恰度滿一年にして、馮玉祥はボロヂンと庫倫において二度目の會見を遂げたのである。

馮玉祥と顧、徐及びボロヂンの庫倫會議は、馮玉祥の一代において、頗る重要な意義を有するものであつた。即ち、馮玉祥をして進んで、ロシアに接近し、國民黨に加入するの決意をなさしめたのは、實にこの會議であつた、庫倫會議におけるボロヂンの熱烈なる勸告であつたのである。

或る日の夜、ボロヂンは、開き直つて、馮玉祥に、國民黨加入の勸告を試みた。彼は先づ馮玉祥に向つて「貴下は支那において、最も優勢なる軍隊を擁し、二十年來、救國の大志を抱いて居られるに聞く。貴下の救國方針その具体的計劃は如何。また如何なる政策をもつて、これが實現を期せんとするか」この質問を發し、「もし貴下の救國大計にして、國民黨のそれに勝るならば、余は國民黨を離れ來つて、貴下を援助するであらう。若し貴下の胸中に、具体的の計劃と政策がないならば、貴下は須らく速かに國民黨に入黨し、その主義と政策を接受し、聯合一致、共に民國革命の大成を計るべきである。われ等も亦これを切望して止まない」さてボ氏獨特の莊重な口調で、諄々として説いた。

ボ氏の熱誠には馮玉祥も亦大いに動かされた。しかし用心深い彼のこころであるから、その場では例の通り「余は一國の武將であつて、もごり政治の習習に乏しく、また政治上の具體的意見をもちたない。たゞ革命の志に燃ゆる武人に過ぎぬ」を答へて、確答を避けたが、この時已に彼は國民黨加入に傾いたらしく、その夜は徹宵熟慮し、つひに一睡もせず、千思萬考の末、翌日遂ひに入黨の決心をなし、これをボロヂンに披瀝した。蓋し當時の馮玉祥としては、ロシアに倚る外、頽勢挽回の途がなかつた。而してロシアに倚らんがためには、ボロヂンの勸告に従はねばならなかつた……同時に、既往における失敗の苦き經驗によつて、時代の趨勢に目覺めた馮玉祥は、深く思想の風潮に思ひを凝らし、知らず識らずの間に、舊き軍閥のタイプを脱して、一歩々々左傾思想に足を踏み入れたのである。また北京クーデターの意外なる結果に失望し、奉天軍との對戦に敗れた馮玉祥の胸の中には、レーニンは如何にして、ソウエート革命に成功したか、ボリシエウイキーは如何にして彪大なる聯邦の統一に成功したか……云ふやうな疑問も起つたことであらう。彼は國民黨入黨の決意を定めると同時に、いよく訪露決行の臍をかためた。

二

五月一日、馮玉祥はウエルフネウヂンスクに着し、同地で大歓迎を受け、また野天講演會等の催なごもあつた。一行は三日同地を發したが、西伯利鐵道沿線各驛には、赤色軍の儀仗兵整列し仰山なる歓迎を受け、九日モスクワに着した。

馮玉祥があの大なる體軀を、詰襟の粗服に包み、烏打帽をかぶつて、モスクワ驛に現はれた時、

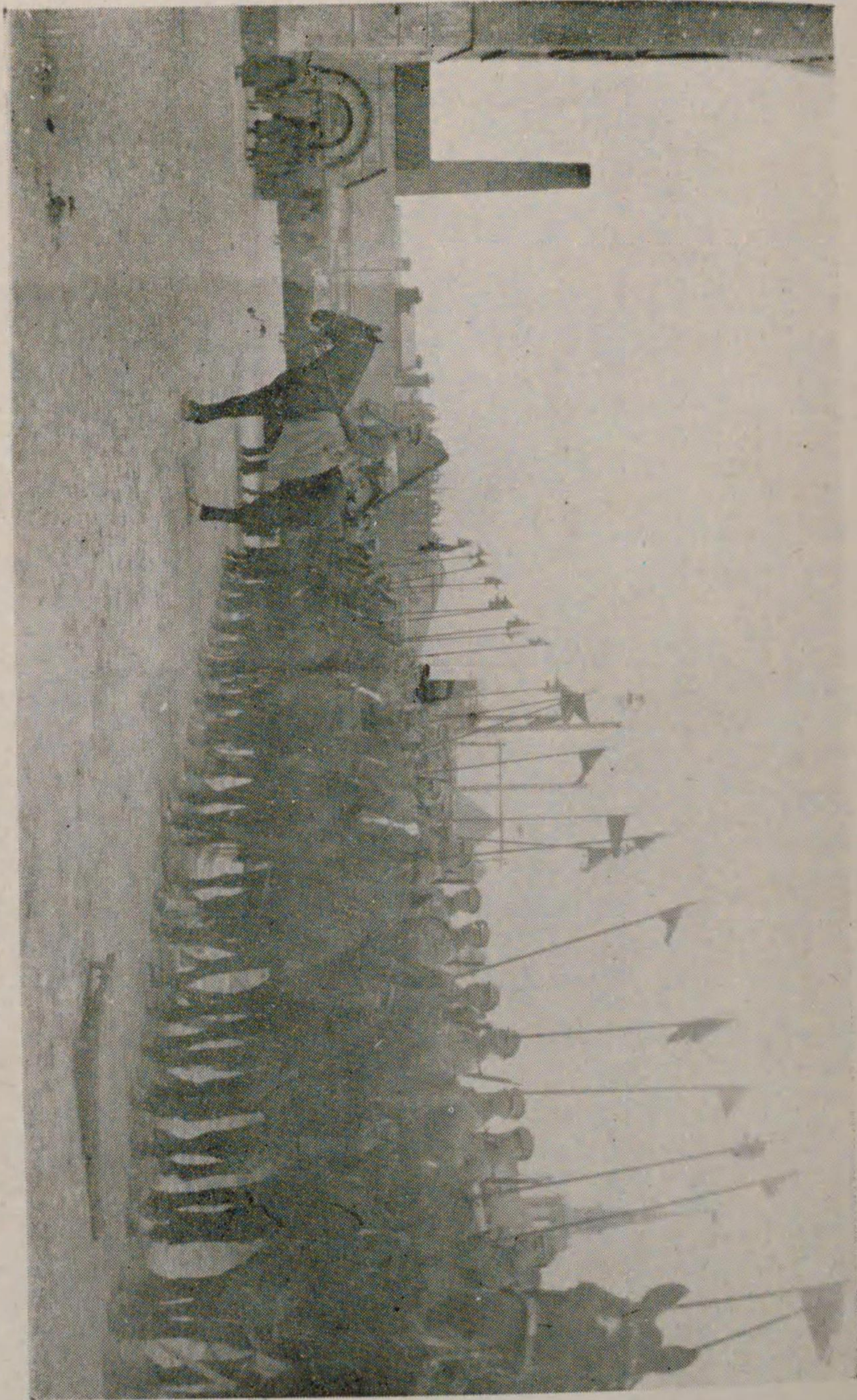
ソウエート代表、孫文大學生等が、多數出迎へ、更らに停車場には赤色軍の騎兵が、三角赤槍を手にして整列し、さながら同盟軍の凱旋將軍を迎へるの觀があつた。

モスクワ着後の馮玉祥に對して、先づ歡迎會を催うしたのはモスクワ孫文大學である。歡迎會席上同大學校長ラデックは左の如き歡迎の辭を述べた。(一九二六年六月十八日付嶺東民國日報に據る)

吾等は、今日、絶大なる歡びを以て、中國々民黨領袖馮玉祥及び國民黨の同志徐謙の兩氏を迎へる。また將來中國革命の戰闘に加はるべき數百の新闘士も、こゝに同時に一堂に會せるは、實に得難き機會であり、また有意義なこゝである。

革命の失敗は革命の過程中にありては、あり得るこゝで、それは同時にまた成功の基礎である。而して今回國民軍が大敗に至らざる前に、北京を退去したこゝは、一見異様に考へられるが、こゝは作戰上、一つの策略に過ぎない。國民軍はこの時期において大いに新精力を養ひ、捲土重來の實力を養ふべく、今回の退却は重大な意義を有するものである。

軍閥打倒は中國革命青年の標語である。しかし徒らに空言するのみでは成功し得るものでない。必らず革命の武力が伴はねばならぬ。かくて、こゝを始めて軍閥打倒も可能なるのである。今や中國の



莫斯科頭赤軍馮玉祥の歡迎

ろみな人民の援助を受けてゐる云ふ。之れ即ち該軍が已に民衆を提携せることを明かに表示するものである。従つてまた民衆化せる武力も云ひ得る。國民軍も亦民衆の提携を眼目とし、民衆の利益のために奮闘するものである。同軍も亦遠からず民衆化せる武力となるであらう。國民軍の他の軍隊と同じからざる點は、即ちこゝに存する。他の軍隊はいつでも帝國主義者の道具である。即ち吳佩孚軍は英國帝國主義者の工具であり、張作霖は日本帝國主義者の工具である。然るに馮玉祥に至つては、先きに帝國主義者が、彼を誣罵して、「上帝の難將」云ひ、後又彼の民衆革命軍を作るや「赤色の怪物」を名づけた。

われ等のソウエート聯邦は、中國の革命黨を提携するのみならず、全中國の人民を提携せねばならぬ。殊にこの際最も重要とするは、民衆の利益を代表する革命軍を提携することにある。

國民軍は廣義の見地から云へば、民衆の利益の上に立つて奮闘してゐるのである。現在中國の共產黨は中國労働階級の代表であつて、中國の労働階級のために奮闘しつゝある。中國國民黨も國民軍も亦民衆の利益の上に立つて奮闘してゐる。且つ國民軍は愛國の軍隊で、張作霖や吳佩孚の軍隊の如く賣國軍隊ではない。故に馮玉祥は民衆の利益のために奮闘する戦士である。大にしては世界大革命の戦士である。こゝにおいて、余は本校の幹部を代表して、一、中國國民黨萬歲、二、世界革命萬歲、三、中國國民軍萬歳の三口號を唱へる。

これに對する馮玉祥の答詞は左の如くである。

吳佩孚と張作霖とは明らかに日英帝國主義者の走狗、工具たるに甘んじてゐる。民國十三年曹錕大總統時代に、吳佩孚は英國主義者の走狗であり、張作霖は日本帝國主義者の走狗であつた。當時吳佩孚の部下にあつた余は、走狗と走狗との中間に介在してゐた。しかし余は常に兵士に向つて、我等は民肉を食み、民血を飲むものである。従つてわれ等は人民の保護に當るべき義務を有する、走狗となつてはならぬと説き、軍を回して北京に入るや、眞先きに宣統帝と曹錕とを幽閉し、その自由を束縛した。孫傳芳は張作霖討伐を主張したが、當時張作霖は八省區の兵力を有してゐるから、何故に孫傳芳に抵抗せずに後退したが。これは國民軍が張の後方を討たんとする形勢を示したからである。故に彼は兵を北京に回へすと同時に、人を余の許に派して、孫傳芳と吳佩孚を打たんことを要求して來た。そこで余は彼に「吳佩孚を打つも、貴兄を打つも、何等區別はない」との書を寄せた。又郭松齡は何が故に張作霖を討たんとしたか。當時郭松齡は演習參觀のため、派遣されて日本に在つた。而して張作霖は郭の外、別に代表を日本に派して、國民軍討伐の援助を要求したが、日本は即時承認を與へなかつた。此の消息を知つた郭松齡は直ちに日本に向つて、日本が若し張作霖を援助して、國民軍を攻むるならば、彼は先づ張作霖を討伐せんとの宣言をなし同時に余に一、福國兵民の軍閥を打倒すること。二、青年政府を建設すること。三、平民政治を

實行すること。四、強制教育を勵行すること。五、勞工保護を實行すること……の五ヶ條の條件を提示した。而して余はこれを以てまことに時宜に適すことなし、直ちにこれに署名した。これ即ち我等國民軍が人民の味方であることを自覺したからである。

余は今回途上幾多の教訓を得た。中國は革命によるに非ざれば、中國を救ふ途がない。哈克圖某縣知事の如きは、皆な選舉によつて選ばれたもので、中國各省の縣知事の如く、省長の親戚でなくば、師長の弟とか、或は又吳佩孚の護衛兵の如く、目に一丁字も見えぬものが、知縣になつてゐることは全然趣きを異にしてゐる。

兵士の生活に言及するに、われ等中國の兵士は、毎月六元を給與さるゝに過ぎない。兵卒は自分の生活を支へるのみならず、その家族を養はねばならぬ。六元そこらではとても足る筈がない。故にわれ等國民軍の兵餉は月給六元の外に、一兩の銀を加へ、且つ官級が上るほど、支給を後廻しにし、兵士の給料はあくまで缺かさないうにしてゐる。それでもロシアの兵士生活とは比較にならぬ。ソウエート赤色兵の飲食は、余の見たまゝころ、自分の平日用ふる招客の馳走より尙ほ優つてゐる。

又余はロシア工人の生活状態を視察して來たが、彼等は最少毎月三十餘元の収入を有する。中國と比するに甚だしい差異である。これ等の事實から察するに、中國にして再び革命を執行せざら

んか、恐らく國亡ぶるのみならず、民族もまたこもに滅ぶるであらう。余はまだく多く語りた
いが、これだけ話したのも、實は度を過した位ひである。各位の御批判を希望する。

三

馮玉祥はモスクワ滞在中、つぎめて講演會や、新聞を通じて、自家の意見表示を宣傳につぎめた
たごへば、七月十九日、モスクワ發行の漢字新聞の主催で開かれた演說會における彼の演說は左の
如くである。

支那の中央政府には何等の實力がない。政治の實力は武力を擁して、各地に轄據する軍閥の手に
ある。而して、歐米の帝國主義者は、これ等の軍閥を買収し、頻りに支那の内亂を助成して
る。今日の支那は反動勢力の支配下にある。しかしこれは一時の現象であつて、支那國民の前途
には、新しい戦争を、新しい勝利が待つてゐる。何となれば、反動勢力の内輪に調和統一
がなく、各軍閥は常に同志討をこころしてゐるからである。支那の革命は決して失敗に終つたこ
見るべきでない。國民軍は北方を固く支へ、廣東軍は南方の建設にあたつてゐる。この際特に注
目すべきは、支那全國にわたつて勞農運動が、勃然としておこり、日毎に其勢力を擡げんとして
ゐることである。この目前の形勢は、明らかに支那の將來がプロレタリアの勝利に歸結するとい
ふ固い確信をわれ等に與へるものである……。

又、モスクワの露國共產黨機關紙ブラウダは八月十九日の紙上、大要左の如き馮玉祥の談話をの
せた。

國民軍と廣東軍との提携は、益々鞏固なる革命勢力を構成し、聯合革命軍の勝利はいよいよ確實
となつて來た。國民各軍はつねに優勢なる敵軍と戦つてゐるが、曾てこれに屈服したことがない
それは各軍が終始人民と親密なる聯絡をこり、誠意國家のために戦ひつゝあるからである。然し
現下の形勢は容易に樂觀を許さぬ。何となれば、張作霖と吳佩孚との背後には、英國の武力が存
在し、政治的に、また軍事上に多大の援助を與へてゐるからである。然し余は支那の國民革命の
終局の成功を確信して疑はない。

現下の支那における革命運動は大體左の如き状態にある。

一、西北國民軍と廣東革命軍とは、力をあはせて、國民の解放に努力し、國民革命の達成に向つ
て驀進してゐる。

二、この革命戦争にあたり、我等は國民の自覺を促し、又敵軍中の進歩傾向の士卒を自覺せしめ
んことにつぎめてゐる。この目的は一部已に達せられ、吳佩孚、靳雲鶚その他の反動軍隊内に動
搖頻發し、敵軍の將卒にして國民軍に歸依したものが少くない。これ等反動軍隊における國家的
及び革命的自覺促進の運動は極めて急速に進展しつゝある。

三、我等は諸外國におけるプロレタリア及び革命同志ごにも共同一致して、事にあたらんごするものである。

余はこの數ヶ月間ソウエト聯邦にありて幾多の深い印象をうけたが、就中余をして驚歎措く能はざらしめたるは、露國共產黨員の活動ぶりである。ロシア共產黨員は實に夜を日に繼いで活動しつゝある。彼等は黨員ならざる労働者ご同額もしくはより少い額の俸給に甘んじながら誰よりも多くの労働にあたつてゐる。余はロシア共產黨員の勇氣ご努力に對して、深く敬服するものである。

四

馮玉祥がソウエト聯邦に滞在中、最も心を用ひたのは、ソウエト當局及び一般勞農民衆の人心を收攬するごにあつた。如才なき彼は、特に「赤」く見られやうごして、非常な工夫をこらしたご云ふ説もあり、當時次ぎのやうな挿話が傳へられたものである。

馮玉祥はモスクワにおけるその居室の四壁いつばいに、レーニンの寫眞をかけ、卓上にレーニンの彫像をおき、そして朝夕それを眺めて、レーニンの演説のヂエスチュアや應接ぶり、あるきぶりなごを極めて綿密に研究し、その眞似を練習した。そして「最もよくレーニンに似た支那人」ご云ふ評判を得るごごにつごめた。

彼はまた色々な集會における講演や、新聞記者ごの會見なごで、頻りに、「自分は労働階級の出身である……レーニンは自分が夙くから崇拜してゐた大先生だ……」なご、愛嬌をふりまいて、巧みに勞農民衆の人心に投じたものである。

然し、また馮玉祥はソウエト當局に向つて、可なり思ひ切つた理窟を並べたごもある。たごへば馮玉祥のモスクワ滞在中、露國共產黨幹事長スターリンが、その共產黨大會における政治報告中に「ソウエト聯邦は日本に對して親善方針を進めなければならぬ」ご主張したごを聞くと、彼はポリシエウイキーに向つて「諸君は世界革命を標榜し、中國革命の援助、帝國主義の打倒を提唱し乍ら、曾て中國に對して、二十一ヶ條の要求をなし、民國を侮辱せる日本ご親しまんごするは甚だしい矛盾ではないか」ご詰問し、ポリシエウイキーが「それは外交政策である」ごの辯明を與へるや、「外交に詭詐手段を用ふるはよくない。親日政策をやめて、中國革命を援助されたい」ご反駁したごである。

また、支那革命の援助についても、面倒な條件問題がおこるご、馮玉祥は「ポリシエウイキーの使命は世界革命の完成にある。世界革命を完成せんがためには、先づ被壓迫民族の革命の成功を第一の條件ごする。諸君にして誠意支那革命を援助せんごするならば、よろしく無條件で援助すべきである」ごやつたご云ふごである。

五

馮玉祥は五月九日から、八月十七日まで、恰度百日間、モスクワミレニングラードに滞在した。彼の赤都における生活は、ソウエート制度の研究や、ソウエート當局との交渉などで、極めて多忙なものであつたらしい。彼は幾多のソウエート巨頭に會見して、ボリシエウイズムの理論的解説を聞いた。又各官廳、工場、その他の機關を訪ふて、その實際方面の施設を研究し、七月の半頃には、自らソルモチ硝子工場に入つて、勞働に従事し、またモスクワ近郊のソウエート農村に遊び、自ら耕作したこともある。

馮玉祥の最も力を入れて研究に専心したのは、云ふ迄でもなく、ソウエート赤色軍の政治組織である。彼はモスクワの赤色軍及び同軍所屬の諸學校を歴訪した後、更らにレニングラードに赴き、同地の軍事政治大學を訪ひ、黨代表、政治訓練部の制度をその本家本元において、具さに研究するところがあつた。彼は赤色軍を始め各機關が如何に重く専門家を用ひつゝあるかを觀た。彼はまた各方面に亘り、如何によく共產黨の支配權の徹底し居るかを知つた。かくして馮玉祥のモスクワ及びレニングラード滞在は頗る多忙を極めたが、しかも彼にはかゝる忙中にも、時折モスクワ近郊の別荘地にかくれて、寫生の稽古をしたり、下記の如く、三民主義の講義を聞いたりなきする閑日月もあつた。

六

國民軍から最初の代表として訪露せるは、熊斌である。彼は十四年九月四日張家口を出發し、庫倫を経て、モスクワに赴いた。同年冬熊斌は張家口に歸來したが、彼のソウエート政情報告なるものは頗る悲觀的のものであつた。熊氏はソウエート・ロシアの「悪い半面」のみを觀て來たものに見える、彼の報告は徹頭徹尾ボリシエウイキーの政治をこきおろしたものであつた。例へばソウエート・ロシアでは、結婚も離婚も自由自在、従つて男女間の風儀紊亂甚だしく、青年婦女子の七八十パーセントは花柳病患者である……なご、全く普通一遍の素通り旅客が、モスクワやレニングラードの一部を見て、ソウエート政治を罵倒するやうな報告をもつて歸つたのである。然るに馮玉祥のロシアにあるや、主として、ソウエート革命の「よき方面」に注目した。

馮玉祥が恰克國からトロイツコサフスクをこえて、シベリアに入り、ウエルフネウデンスクで始めてシベリア鐵道の急行列車に乗つた時、一車掌に向つて、その給料高を尋ねた。而してその車掌から「月給八十ルーブルである」この答を聞いた馮玉祥は「支那の鐵道現業員の給料は遙かに少ない。ソウエート政府は如何にして斯くの如き高額の給料を支拂ひ得るのであらうか。流石は勞農國だけある！」と云つて大いに讚歎したと云ふ話がある。

馮玉祥の訪露より、一足さきに胡漢民、于右任及び馮玉祥の家族が、赤都に至り、モスクワ及び
 レニングラードで彼を迎へた。當時馮玉祥の長男洪國始め四人の子女も亦ロシアに留學し、レニ
 グラードにあつて、ロシア語を勉學してゐた。

馮玉祥はモスクワ到着の直後、さきに訪露の途中、庫倫で決定した方針により、國民黨へ入黨す
 べく、胡漢民の紹介で、正式の手續をこつた。たしか、李鳴鐘であつたと思ふ、馮玉祥の入黨誓約
 書を携帶して、わざ／＼廣東に赴き、一切の手續きをすませたのである。

馮玉祥はかくして民國十五年夏からいよく名實ともに國民黨員になつたのであるが、彼はそこ
 でまた正式に三民主義や、五權憲法、建國大綱等の研究を始めた。そしてこれが手ほぎ役に當つ
 たのが、當時同じく滯露中であつた胡漢民と于右任である。即ち、馮玉祥はソウエート・ロシアに
 あつて、ボリシエウイズムの研究と同時に、國民黨に入黨し、三民主義の手ほぎきを習つたのであ
 る。ロシア—馮玉祥—國民黨……何たる奇しき三角關係であらう。

馮玉祥のロシアにある間、前記の如く一方ソウエート革命の實情、殊に赤色軍の現狀について、
 仔細に研究をかさねるに同時に、他方ロシア人一般、殊に労働者や農民の間に好感と同情をあつめ

るべく、或は「赤色扮装」「レーニンの真似」の芝居を打ち、或は演説會や新聞記者との會見等におい
 て「赤い氣焔」をあげるなき、苦辛慘憺たるものがあつた。而してその結果、彼は何ものか得るこ
 ころがあつたか。私は「ソウエート東方策」においても、はたまた「レーニンのロシアと孫文の支
 那」においても、くりかへし論じた如く、ロシアの支那革命に對する援助の主要點は「革命の經驗」
 「經驗の教訓」を與へたことにあつて、武器や宣傳費等の物質的補給は、第二位の援助であつた。信
 ずるものである。従つて馮玉祥のロシア訪問によつて得たものも、矢張り形而上の收穫をもつて最
 大とする。即ち馮玉祥がソウエート革命の過程を親しく現地において目撃し、いよく現代の國民
 運動は、一定の標榜を必要とし、また多數民衆の力によらねばならぬこの信念を深くするに至つた
 ことは、彼のロシアを訪ふた結果の最大なるものを見なければならぬ。

馮玉祥は十五年八月十五日、即ちモスクワ出發間際において、ソウエート當局との間に、武器供
 給の契約を締結した。この契約については種々の説があつて、假りに契約そのものの成立を事實と
 しても、果してそれが履行されたものか、さうか、判然しない。ある國民軍の記録によれば、同軍
 は十五年夏張家口退却後、一門の砲、一挺の銃もロシアから受け取つたことがない云ふ。然し、
 ロシアの國民軍に對する武器や資金の供給がたゞひ事實であつたとしても、從來幾十年かにわたつ
 て、歐米列強の支那における各方面の勢力に注いだ資金と武器に比すれば、遙かに少いのである。

私は繰りかへして云ふ、馮玉祥のモスクワからもたらせる所謂「ロシア土産」の主なるものは、武器供給の契約書でなくて、百日間の赤化修業で、ソウエート革命から得た幾多の「経験の教訓」であつた。

▲馮玉祥のレーニン像▼



馮玉祥はモスクワ滞在中折郊外の別荘地にかくれて、ボリシエウイズムやソウニート制度の研究のかたはら、得意の寫生に閑日月を送つた。上圖は馮の畫いたレーニンの肖像である。

六五原誓師

敗報を手にして蹶起・敗軍の立直し・バイブルより
三民主義へ・決死章を犠牲帯・北京へ直攻か河南へ
迂廻か・甘肅行軍を陝西入り・西安奪取より潼關進
出まで・鄭州入りの奇計・難行苦行の實踐躬行

馮玉祥の赴露以來、國民軍の旗色愈々振はず。民國十五年八月、鹿鍾麟は南口に破れ、宋哲元は熱河を退き、張之江の率ゐる國民軍の主力は腹背敵の攻撃を受けて危地に陥り、つひに張家口を放棄して、遠く綏遠の奥地に向つて敗退するのやむなきに至つた……この急報がモスクワに達した。そして馮玉祥が赤露修行を中止し、突如歸國を決意したのは、實にこの南口陥落、國民軍大敗の急報を手にした時のことである。かゝる場合、凡庸の武將ならば、士氣更らに沮喪し、益々深く逃げをはるころであるが、流石は馮玉祥だけあつて、彼は國民軍の最大危急時に決然起つて、歸國の途についた。そこに彼の「亂世の武將」としての面目を見るのである。およそ人の眞價はその逆境に處して最もよく發揮されるものである。薄志弱行のものは逆境にあつて萎縮し、退嬰してしまふが、偉人は困難に會する毎に、益々その闘志を堅くし、不屈不撓、以て捲土重來を策する。

南口及び張家口において大敗した國民軍十餘萬は、殆んぞ支離滅裂し、その鐵道によつて退却せる主力部隊さへ、隊伍をなさず、加ふるに列車の事故頻發し、莫大の損害を蒙つた。退却途上落伍せるもの五、六萬人に達し、敗殘兵は察哈爾及び綏遠の奥地に散亂流浪した。また韓復榘を石友三の率ゐる五ヶ師の兵は、山西省の北方にて、山西軍に抑へられ、窮餘の末商震の指揮下にある山西軍の一部に改編さるゝことゝなつた。但しこれは奉軍の追窮を免れんが爲め、山西軍との諒解の下